

---

# 気ままな風吹くこの世界

BURST

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

気ままな風吹くこの世界

### 【NZコード】

N8151D

### 【作者名】

BURST

### 【あらすじ】

居場所を無くした一人の少年が、ある少女との出会いをきっかけに、一人である魔術学園に入学し、そこで様々なことが一人の周りで起こっていく…

## 第1話 一人の出会い

とある街の静かな裏路地に一人の少年が歩いていた。少年は15歳くらいで、銀髪で青色の瞳をしている。

「はあ……ここなら少しは休めるかな」

少年はそう言つと後ろの壁に、もつれかかるように座り上を見上げる。

空は漆黒の闇に染まつていて、月は雲に隠れている。

それでも、辺りは月明かりでほのかに明るくなつていた。

「これから先どうするかなあ……」

少年は上を向いたままそう呟いた。

空は相変わらず薄暗く、幾つかの星がにわかに煌めいている。

「まあ、その時はその時で考えればどうにかなるかな。夜もそこまで寒くはないし、これくらいなら充分耐えれるだろう。とりあえず……今日はもう寝るかあ」

そう言つと少年は上げていた顔を下ろし、そのままの体勢で眠りについた。

まだ見ぬ自分の行き着く場所を想いながら：

ここはラドヴィスという国にある、セリーアという名の街だ。王都からそう遠くない場所にあり、隣国との国境からも近い。

そのため隣国との交流の場所の役目となつていて、街の規模が大きく、多くの人々が行き交う。しかし、それも昼間までで日沈を迎えると昼間の活気が嘘のように静かになる。

そんな静かな街のなかで、

「遅くなっちゃった。早く帰らないと…でももう一人暮らしだしべつにいいかなあ」

1人家路につく少女がいた。

彼女の名はルリア。

桜色のマントを身に纏い、肩の辺りまで伸ばした蒼色の髪、淡い緑色の瞳をしている。

「でも暗いし怖いから早く帰るかあー。今日の『』飯は何にしようかなあ」

そんなことを思いつつ、足早に歩いていった。

暫く歩いているとルリアは壁に寄りかかるようにして倒れている人をみつけた。

不思議に思い近づいてみる。

どうやら少年のようだ。

夜空に輝く星のような銀色の髪をしている。

「大丈夫ですか？」

声をかけるが返事がない。

しかし耳をすませると、かすかに寝息が聞こえてくる。

どうやら寝ているだけのようだ。

「起きてください。こんな所で寝てたら風邪ひっちゃいますよ~」

そう言いつつ体を揺するが反応がない。

「しようがないですねえ~」

ルリアはそう言つと少年から少し離れる。

すると少年の足元に緑色の魔方陣が広がる。

同時に風が吹き始める。

「彼の者…我望む場所へ…」

そう言い終えると更に風が強くなり、少年の姿が消えた。  
そして風も吹き止む。

「ふう……これでよしと。じゃあ帰るかなあ」

ルリアは一息つくと足早に皿に向かっていった。

## 第2話 これから進む道

（あれ、ここは？）

少年が目を開けると視界に入ってきたのは天井だった。  
(確かに昨日は、外で寝たはずなんだが?)

そう思いつつ体を起こし周りを見回す。

しかしここが何処なのか全く分からぬ。

暫く少年が考えていると、

「気が付きましたあ？」

と部屋の奥から声がした。

そつちを見ると見知らぬ少女が見えた。

「君は誰？そしてここは？」

そう少年は尋ねる。

「私はルリア。ここは私の家です。昨日帰り道あなたが外で寝ているのを見つけて、呼びかけても返事がなかつたので〜」

「そうか。俺はセント。昨日のことは礼を言つ。ありがとう」

「いえいえ〜。セントさんはなんで外で寝ていたんですかあ？」

「ん〜、ちょっと言いにくいくらいだがなあ」

セントは苦笑いを浮かべ続けた。

「俺はもともとは王都に住んでたんだが、いろいろとあつて向こうにいられなくなつたんだ。それでとりあえずこの街に来たんだが…向こうを出たときにあまり金銭を持ってこれなかつた。だからすぐ底をついて宿がそれなかつたから、昨日は彼処で寝てたつて訳だ」

「そうだったんですね？」

セントの話を聞いてルリアはそう返したあと、いろいろと考えていたが少し経つて口を開いた。

「これからどうするんですか？」

「どうするって言つてもあてがないからどうしようもないんだがなあ」

少し投げ遣りにセントが言った。

「それなら……」リリィもここです呦

「え？」

思つてもいなかつたことにセントは驚き、思わず聞き返す。

「だつて街に出ていつてもお金がないなら何もできなことですしあた、野宿することになるじゃ ないですか」

痛いところを突かれてしまつたセント。

「まあな。でもいいのか？」

「はい。私もこの街に来てまだあまりたつてないから不安だつたですしあよづじいこと思つて」

「わうか。じゃあ御言葉に甘えておう。これからもうしきな

「ふふふ。よろしくね。それじゃあがんせん食べましょー」

そう言つとルリアは部屋から出でていつた。

セントは何か考えていたが少しして部屋を出た。

「はーい。えっと、もうすぐこの近くにある魔法学園の入学試験があるんだけど二人以上のチームで受けなければならないうつていう条件があるって…」

世界的に魔術がひろまっているから、それを学ぶ学校もある。もちろんラドヴィス国にもいくつかの魔法学校や魔術科のある学園があるのだが、全てにおいて二人以上の受験が決められているのだ。

「それに俺がペアとしてでてほし」と言つことか

「うん。その学校に行くためにこっちは越してきたんだけど相手が見つからなくて…」

そう言うとルリアは少し俯いた。

「そうか。いろいろと苦労してるんだな」

「うん……ぐすつ

「な、泣くなよっ」

突然涙ぐむルリアに驚くセントだつたが少しして口を開く。

「じゃあ一緒に試験受けやるよ」

「え…いいの?」

「ああ。それにこっちに来てからもやることなんか無かつたし別に入学しても問題ないだつ」

「ありがとう……ぐすつ

「だから泣くなつて、ほら」

そう言うとセントはルリアを優しく抱き寄せ、頭をなではじめた。

「ふえええん…」

「やるからには出来る限りのことはあるから

「うん…」

泣き続けるルリアをなでていたセントは自分の過去を思い出していた。

### 第3話 試験への準備

あれから数日後、セントとルリアは、近くの広場に来ていた。

あのあとルリアが落ち着いてから、試験日までどうするかを話し合つた。

そして、特にしなければならないことが無く、またセントが最近あまり魔術を使つていならいらしく、久々に使つておきたいと言つたので毎日魔術の訓練をすることになった。

「セント、じゃあいくよ~」

「ああ。 いつでも大丈夫だ」

それを聞いてルリアが詠唱を始める。

同時に、ルリアの周りに風が吹き始め蒼い髪がなびく。

そして緑色の魔方陣が浮かび上がった。

「世界を巡る風よ、刃となりて彼の者を切り裂け… ゲイルカッター！」

ルリアがそう言つとセントに向かつて突風が吹いた。

しかしその風はセントに届くことなく消えた。

「もう一度やるね~」

そう言うとルリアは再び詠唱を始める。

「…刃となりて彼の者を切り裂け…！」

しかし詠唱の途中、突然目眩に襲われ身体に力が入らなくなり、バランスを崩す。

それでも異変に気付いたセントが素早くルリアを支えたため、倒れるることは無かつた。

「大丈夫か？」

「うん… 大丈夫だよ…」

「無理するな。 今日はまつ終わりにしよう。 歩けそつか？」

「うん…」

そう言つて立ち上がり歩き出そつとするが転びそうになり、またセ

ントに支えられていた。

「しょうがないなあ、ほら」

セントはそう言つてルリアを背負つ。

「「めんね…」

「いって。それより試験近いかう早く体調治そうな  
そつ言うとセントは家に向かって歩き始めた。

試験前日。

ルリアの体調も良くなり今日は明日の準備に取り掛かっていた。

今2人は魔術書や術符などを揃えるため魔法店に来ている。

魔法店とは、魔術を使うときに補助として使う杖や術符、特殊な魔  
術を発動させるときに使用する魔術書など魔法に関するものがひと  
とおりおいてある店だ。

「じゃあ俺は術符を見てくる」

「わかった。またあとでねえ」

そんなやりとりをした後セントは歩いていった。

「私は魔術書でも見てくるかな」

そう言つとルリアも歩き出した。

ルリアは魔術書が置いてある場所に来ていた。

魔術書は用途と属性によって別れているため種類が多いのだ。

そのため、魔術書がある場所は他よりも広い。

「ん~、なんかどれもいまいちだな~」

風の魔術書を見ながらそう言つた。風の魔術書を見ながらそう言つた。

「風属性のなら家にもちょっと古いけど家に何冊かあつたしと出来るから他のを見るかあ」

そう言つと持つていた風の書を棚に戻し他の属性の書を見始めた。

日も沈み、辺りが暗くなつた頃、2人は結構な量の荷物を抱えて帰つてきた。

あの後ルリアが魔術書を見ているときにセントがやつてきた。  
そして一緒に魔術書を見てから戻つてきたのだ。

2人が買つたものは術符5枚、魔術書2冊、杖だ。

さらに店を出た後食料の買い出しもしたので荷物が多くなつてしまつたのだ。

「ふう~重かつた~」

荷物を置いたルリアが肩を回した。

セントも腕が疲れたのか家に着いて直ぐに荷物を置いていた。

「少し休んだら準備始めろよ」

そう言つとセントは先に準備を始める。

「わかつた~。そういうえばセント杖買わなかつたけど大丈夫なの?」

「俺は自分のがあるから大丈夫だよ」

「そうなの？」

「うん。ほら」

セントは右手をかざす。

すると突然輝きだし氣付くとその手に水色の半透明の杖が握られていた。

セントの背丈と同じくらい長い杖だ。

「綺麗…」

「この杖は自分の魔力のようなものだから簡単な魔術なら詠唱無しで使えるんだ」

そう言うとセントは何か思い出した様で荷物から術符を取り出しそのうちの2枚をルリアに渡す。

「これはルリアの分だから。」

「私はあるから大丈夫だよ」

「御守りみたいなもんだ。一応持つておけ。」

「うーん… そこまで言うなら貰つとくね。ありがとうございます」

ルリアは渡された符を鞄にしました。

「そういえばセントは料理出来る？」

「ああ。長い間1人だったから自然と身についた」

「なら、今日の夕飯作ってくれる？」

「別に構わないが、何故？」

「セントはいつも何食べてたか気になつたからかなあ？」

「そうか。じゃあ久々にやりますか」

そう言って台所へと向かつていった。

「セント、なかなか美味しかつたよ～」

夕食を食べ終えたルリアが嬉しそうに言つた。

「やうか。久々だつたから思つようにいかなかつたけどよかつた。  
そういうば試験はどんなことするんだ？」

「よく分からぬけど魔術の測定とかだと思つよ」「やうか」

そう返すとセントは食事の片付けを始めた。

「あつ私が片付けるから置いといていいよ～」

「いや、片付けまで料理つて言つから今口はやるよ。いつもやつて  
もらつてるし」

「やう? ジヤ、よろしくね～」

「おう」

セントは再び台所へと向かつていつた。

「さて、準備の続きしないと。」

ルリアは居間に戻り、今日買つてきた術符や魔術書などを鞄に入れていた。

そして一通り入れ終わつたときにあることに気が付いた。

「こんな魔術書あつたっけ?」

ルリアはそう言いつつ一冊の魔術書を手にとつた。  
表紙はほとんど色褪せていて微かに緑色をしてゐる。  
どうやら相当古いものようだ。

「だいぶ古いみたいけどセントのかな?」

そんな事を思いつつルリアは本を開いた。

本の中も文字が薄くなつていて所々読める程度だつた。  
暫く魔術書を頑張つて読み進めているとセントが片付けを終えて戻つてきた。

「何を読んでるんだ?」

「あつ、これセントの?」

セントに持つっていた魔術書を渡す。

「いや、向こうを出たときには一冊しか書を持つてこれなかつた。  
その書はもう鞄に入れてある」

セントは渡された書を眺めながら言つた。

「やうなの? ジヤあなんでここにあるんだらう

「これはルリアのでは無いのか？」

「うん。気が付いたら此処に置いてあつて…」

そう言つて鞄の横の置いてあつた場所を指差した。

「ん… 前のこの家の持ち主が忘れたつて訳でも無さそうだな」

「うーん…」

2人はいくら考えてもこの魔術書は何故あつたのか分からなかつた。

「この書はどうするんだ?」

「それで困つたんだよう」

「だつたら貰つておいたら? 見たところ風の魔術書みたいだし多分使えるだろ?」 魔術書は例外を除いて属性ごとに色分けされていて、詠唱時に発生する魔方陣の色と同じ色にされているのだ。

この魔術書は緑色なので風の書となる。

「私もそれは思つたんだけど表紙に何も書いてないのは初めて見たからちよつと…」

「あー… まあ確かに俺も初めて見たな。 模様はないけど中からして一応魔術書みたいだけど」

魔術書には色と同じく必ず表紙には模様が描かれているのである。模様が複雑化するほど難解で高度な魔術書となり、逆に単純な模様ほど簡単な魔術書となる。

しかし、この魔術書は模様がないのでどのくらいのものなのか全く分からぬのだと。

「とりあえず… 使わなければ問題無さそうだよねえ?」

「無い… とは言い切れないが多分大丈夫だな」

「そうか~。じゃあ一応持つていくかあ」

そう言つとルリアは魔術書を鞄に入れ、ボタンを留めた。 鞄から入りきらなかつた杖が顔を出しているような状態になつてゐる。

「このくらいでいいかなあ~」

「終わつたか?」

「うん。これで大丈夫だよ」

「そうか。 それなら今日はもう寝よう

「 もうだね。じゃ あおやすみ～」

「 また明日な」

そんなやりとりをして二人はそれぞれの部屋へと入つていった。

## 第4話 静かなる夜

夜も更け、街の家々から明かりが消えた頃、ある家から一人の少年が出てきた。

（明日は試験だけど珍しく眠気がないしたまにはいいかな）

出てきたのはセントだった。

どうやら田が覚めてしまい眠れないようだ。

セントは行き先も決めず歩き始めた。

外は相変わらず静かで月も出でていないため真っ暗である。

（にしてもほんと静かだなあ）

そんな事を思いつつ歩いていく。

暫くして、セントはある場所に出た。

以前セントがこの街に来て夜を過ごした場所であった。

（確かにここでルリアに出会ったんだっけ）

セントは立ち止まり、路地裏の一ヵ所を見ていた。

（あの時はこんなに早く田が出来るとは思つてもなかつたな）

そんな事などを考えて、暫く立ち止まっていると、遠くから明るい声が聞こえてきた。

「あれ、もしかしてセント？」

振り返りセントは驚いた。

暗いので分からづらいが漆黒の髪、瞳をした一人の少年が立っていた。

「フォルスじゃないか。久しぶりだな」

「やっぱりセントだ！ どうしちゃったの？、急に姿が見えなくなつたからみんな心配してるよ」

フォルスと呼ばれた少年はセントだと分かると駆け寄ってきた。

「ああ、すまないな。ちょっといろいろとあって王都のほうに居られなくなつた」

「そつか。無理はしないでね」

フォルスは久々に居なくなつた友人に会え、嬉しそうな表情だつた。それにつられてセントも笑みが溢れていた。

しかし疑問に思うところもある。

「分かつてゐる。ところでフォルスは何故こんな所に？」

「んと、頼まれ事でいろいろと調べてたんだけど、遅くなつちゃつて今帰つてる途中なんだ」

いつたい何を調べていたらここまで遅くなるんだろうか。

いろいろと疑問に思うことがあつたが特に深入りはしなかつた。

「そうか。そつちも気をつけるよ」

「僕だつて少しくらいは魔術は使えるから大丈夫だよ。セントはこんな時間に何してたの？」

「ああ。特に何かしてたつて訳ではないんだがな…。今日は珍しく早く眠れないからこうして外を歩いてたんだ」

困つたものだ、といふかのようにため息をつく。

「なんかセントらしいね」

少し笑いながらフォルスは言った。

「そうか？」

「うん。昔からセントは夜中によく外を出歩いてたよね」

「そう言われてみればそうだな」

セントは気分が安らぐからとか言つて、夜中街を歩いていた自分を思い出し、何となく懐かしい気分になつた。

「そういえば、セントはなんでこの街に？」

「そういえばまだ言つてなかつたな。向こうを出てこの街來たんだがすぐに金銭が底をついてな。宿もとれなくなつて仕方無いから此処で一晩過ごしていたんだ。その時に偶然通つた親切な人が暫く泊めてくれることになつて、そのお礼にと魔術学校の受験を付き合つことにしたんだ」

そこまで言つとフォルスは少し驚いたようだ。

「魔術学校つてもしかしてオルレイ魔術学園？」

「実際は何処だか聞いてないけどこのあたりならそこで間違えない

だろう」

「そつかー。彼処は有名だから受験者も結構多そうだね」

「それは仕方無いだろう」

「そうそう、調べ物をしているときにそれについて妙なことを見つけたんだ」

そう言うとフォルスは真剣な表情になつた。

「妙なこと?」

「うん。試験は一回あつてどちらかに合格すればいいんだって。それで内容は一回とも適合検査とかでは無くて、さらに合格者の定員も無いみたいなんだけど、さらにおかしなことがあっていつも合格者は受験者のほぼ半分の人数しかいないみたいだよ」

「そんなに試験が難しいのか?」

「分からぬけど…必ず何かあるんだと思う」

「んー…」

会話が途切れ、やや重い雰囲気になつてしまつたようだ。  
この雰囲気をなくすべく再びセントが口を開く。

「まあ大丈夫だ。もう一人のほうもだいぶ魔術を使えるみたいだし二人だけど何とかするよ」

それ聞いてもフォルスは心配そうな顔をしてたが、何か吹っ切れたかのように会つたときのような笑顔になつた。

「そうだよね。セントなら大丈夫だよね」

「やるからには全力でいくから心配はいらない」

「セント頑張つて合格してね!」

「ああ」

いつの間に一人に笑顔が戻つていた。

「それじゃあね、セント」

「めんな。長々と話して」

「ううん。久しぶりに会えたんだしいいよ」

「そうか。あと、皆によろしくと言つといてくれないか?」

「分かつた。それじゃあね」

そう言つとフォルスは歩いていった。

歩く速さが少し速く、角を曲がつていったのですぐに姿が見えなくなつた。

(だいぶ時間も過ぎただろう。そろそろ戻るか)

セントは家に向かつて歩き始めた。

フォルスと話していた時間が長かったのか、それともセントがフォルスに会う前に長い時間立ち尽くしていたのか、すでに辺りは薄暗く空は暁色となり、夜明けを迎えるようとしていた。

## 第5話 不穏な試験

試験当日。

セントはフォルスと別れたあと、家に戻ってきた。  
しかしあく朝日が出来ていたのでそのまま起きていたことにした  
のだった。

それでも今日は、不思議と調子が良いような気がしていた。  
そして暫くしてルリアも起きてきたので朝食をとり会場に向かつた  
のである。

「やはり結構多いな。ざつと1、2千人くらいかな」

「そうだね。ここには有名みたいだから各地から集まるみたいだよ  
「うらしいな」

一人はたくさんの受験者達の中で、試験が始まることを待っていた。  
セリーアの街外れの広場が会場となつていて、すぐ近くには雄大な  
森が広がっている。

この森はどうやら学園の所有地のようだ。

暫くして鐘の音が響き渡り教員らしい男の声が聞こえてきた。

「これからオルレイ学園の入学試験の説明を始める。試験内容は…

…

教員による説明が始まつたのだが、セントは昨日の晩にフォルスと  
話していたことを、ずっとと考えていた。

（フォルスは何かあるつて言つていたんだよな…。合格者が多くな  
いのは単に試験が難しいのか、それとも…）

セントが考えている間にもどんどん説明が進んでいき、ついには説  
明が終わってしまった。

説明の最中にもルリアが何回か話しかけてもセントは「うん」とは  
なかつた。

ルリアは最初こそは説明を集中して聞いていたのだが、説  
明が終わっても気がつかないのはおかしいと思い、再び声をかける。

「セント?」

「.....」

「セント~?」

先程と変わらず返事が返つてこない。

「セントつてば!」

「~、なんだ?」

ようやく呼ばれていることに気がつき、返事をした。  
しかしルリアは大声を出してしまったため、何人かの受験者がこち  
らをみた。

それに気づき、小さな声でルリアは話始めた。

「呼んでも気がつかないってセントにしては珍しいねえ」

「ああ、すまない。少しばかり考え方をしていて。それでも説  
明がいつの間にか終わっていたから、試験内容を教えてくれないか  
?」

「やつぱり聞いてなかつたのかあ」

ルリアはそう言って一息おいてから、話し始めた。

「えーっと、試験内容はこの近くにある森を無事通り抜けることな  
んだつて。森には学園の教員らが造り出した擬似生命体がいるみた  
いだから、倒すなり逃げるなりしてやられないようにしてつて。そ  
れで、もしチームのうち一人でも、重傷を負い行動不能に陥つたら  
強制で森から転送されて失格なんだつて」

「そうか。ありがとな」

「ううん。でも何かあったの?」

「実は昨日な.....」

セントはまだ言つていなかつた昨日の出来事をルリアに話した。  
夜遅くに外に出ていったこと。

辺りは寝静まつていても関わらず、偶然にも親友フォルスと会つ  
たこと。

そして、フォルスから入学試験で受験者のうち半分近くが、不合格  
となつているということなど。

ルリアは驚いたような表情をして聞いていた。

「…………という訳だ。まあ、実際に何があるのかはまだ分からな  
いけどな」

「そうだったんだ…」

ルリアは話を聞いて俯いてしまった。

合格者が半分くらいしかいないので不安のようだ。

そんなルリアを見てセントは口を開く。

「まあ心配することはないさ。何があるうと必ず合格をせるよ

「…………うん、そうだよね。ありがと…」

「俺は約束を果たすだけだから気にしなくていい」

セントがそう言つたあと、再び鐘が鳴つた。

「それでは、これから試験を開始する」

教員が言つたのを合図に受験者達が我先にと一斉に走り出した。

「じゃあ、俺達も行こう」

「うん！」

その言葉にルリアは頷くと一人は、たくさんの受験者が向かってい  
く森の中へ歩き始めた。

しかし、フォルスが言つていた『何か』は既に起きようとしていた  
のだった。

## 第6話 招かれる者

「あれ？さつさまであんなに沢山受験者がいたのに誰もいない…」

二人はたくさんの受験者たちと共に森へと入つていった。

それなのに、周りには誰一人の姿も見えず、風が木々の枝葉を揺らす音しか聞こえてこない。

「きっと森の中に続いていた道に転移魔法が仕掛けられていたのだろう」

そんなことを言つてセントは辺りを見渡した。

獣道らしきものが奥へと続いているのが見えた。

「とりあえずここで立ち止まっていてもしちゃうがないし、先に進もう」

セントはやうやく歩き始めた。

「ゲイルカッター！」

森にルリアの声が響き、一人に襲いかかってきた狼を風が切り裂いた。

狼は力尽き動かなくなると、光の粒子となり消えた。

「ふうう。何だか遭遇する回数が多いね」

ルリアは一息ついてそう言つた。

「まあ試験だから仕方無いじゃないか？」

セントがそう返した。

二人が歩き始めてから、一時間ほど時間が経った。  
そしてルリアが言った通りに、これまでにも何回も遭遇していた。  
しかし、受験者を一度も見かけることはなかった。

「ねえ、セント」

再び歩き始めてから、ルリアは何かに気づき、セントに声をかけた。

「なんだ？」

「小さいけど水の音が聞こえない？」

そう言われてセントは耳を澄ます。

微かにだが近くに川が流れているのか水音が聞こえた。

「本當だ。よく気がついたな」

「すごいでしょ？昔から耳はいいんだ～」

「そうか。方向は…………」

そういうとセントは音のする方向へ歩き始めた。

ルリアもセントの後を追う。

進む先には獣道などは見当たらなかつたが、それでも伸びきつた草をかき分け進んだ。

暫く進むうちに水音が段々と大きくなつていった。

「セント、川が見えてきたよ～」

そう言うとルリアは走つて行つた。

「あ、おい！」

セントは慌てて呼び止めたが、ルリアには届かなかつたのかそのまま走つて行つてしまつた。

「…………たくつ、しようがないなあ」

セントはそう言つと、走り始めた。

しかし、追いつく気配がない。

（あいつ、こんなに足速かつたか？）

セントはそんなことを思いつつ尚も走つた。

「！」

しかし、ちょうど視界が開けた場所に出たとき、セントは立ち止ま

つて辺りを見渡した。

しかし、田にはいったのは横を流れる川と、そびえ立つ木々だけだった。

暫くしても、何も起らせずセントが再び走り出そうとした時、セントは前に跳んだ。

その後、

ドオオオオン…

爆音と共に火柱があがった。

セントはそれを確認することなく素早く立ち上がると、走り出した。セントを追うように次々と火柱があがる。

（ここ）の木に炎が当たつても燃え上がらないんだな…。つと今はそれどころじゃないか

セントはそう思うと大きく右に飛び茂みにはいると、そのまま近くの木の後ろに隠れた。

すると上手く撒けたのか火柱があがらなくなり、代わりに受験者らしき男達が4人ほど先ほどの所に出てきた。

セントは耳をすまし、男達の会話を聞き始める。

「……逃がしたようだな」

「でもまだすぐ近くにいるはずだな。探すぞ……」

（相手は……四人か…）

先ほどの攻撃は、避けられたものの四人を相手にするのは少し厳しかった。

逃げるべきか？、と思ったがルリアも先ほどの爆音で、此方に向かってきているかもしないので、それは無くなつた。

（相当きついが、やるしかないか…まあ、走り回れば何とかなるかな）

そう思ふとセントは杖を手にして、駆け出した。

同じ頃、ルリアは来た道を戻っていた。  
ルリアはセントがついていなかつたことに気がつかなかつた。  
そして最初の爆音がしたときに初めて、セントがいないことに気がついたのだ。

爆音はルリアが来た方からしたため、ルリアは焦つていた。

（セント、無事でいて…）

そう思つと、足をさらに速めた。

途中に何度も転びそうになつたがそれでも走つた。

暫くして、人の気配がしたので走るのをやめ、ゆっくり歩いた。

そして開けた場所で何人かの人を見えたので近くの木の影から様子を伺つた。

どうやら対立しているらしく、奥には4人の受験者らしき男がいた。  
そして近くにいる受験者を見て、ルリアは思わず声をあげた。

「セント！？」

その声と同時に、男がセントに向かつて、術を放つた。

幾つもの炎の玉がセントを襲う。

しかし、セントは特に詠唱をすることもなく、杖を振つた。  
すると杖から水の刃が飛び、炎を消していく。

それでも連續して詠唱をしているのか、炎の数が多くセントは避けながら、相殺していく反撃する余裕が無かつた。

ルリアはそれを見てはつとなり、急いで詠唱を始めた。

「世界を巡る風よ、そのひと吹きで全てを吹き飛ばす強き者となれ

…」

ルリアは術を発動させるタイミングを見計らつ。

そしてセントが後ろに飛び退いたときに、発動させた。

「プラスチック！」

強い突風がセントに向かつて飛んでいた炎、を全て吹き消した。

「なつ！？」

突然の出来事に男達は驚いた。

セントは今の風はルリアが発動させたものだと分かつていて、先程と同じ様に杖を振った。

「セント、大丈夫？」

ルリアはすかさずセントのところへ走った。

「ああ、ありがとな」

セントは相手の方を向いたまま言った。

ルリアも相手の方を向く。

見ると、いつの間にか男達は六人になつていて。

「何が目的だ？」

セントは杖を構えたまま言った。

「悪いけど君たち受験者を失格にするのが目的だよ！」

一人の男がそう言ったと同時に詠唱を始める。

「燃え盛る火炎よ、彼の者を焼き尽くせ…フレイムスピア！」

巨大な炎がセント達へと飛んでいった。

セントは詠唱もせずに今度は杖を突き立てた。

すると目の前に水柱が空高くあがり、炎と衝突する。

ジュウウツ！

ものすごい量の水蒸気があがり、辺りの視界が一気に悪くなつた。

ルリアはその隙に、後ろへ下がると魔術書を取り出す。

しかし手にした魔術書があのボロボロの古い魔術書とは気づかなかつた。

そして、詠唱を始めようとしたときに急に目の前が真っ白になつた。

「！」

突然のこと驚き、思わず手を放すが持つていた魔術書は、不思議

なことに宙に浮いたままだつた。

ルリアが2、3回ほど瞬きをすると視界は戻つたが、今度は何か言葉が直接頭の中に聞こえてきた。

その言葉は初めて聞いたはずなのに、何処か懐かしく思えた。

そして、魔術書を気にすることもなく、自然と口が動き始める。

「気紛れな風は、時に厳寒を運ぶ嵐となる…」

少しずつ風が強くなり、気温が下がり始めた。

同時に段々と視界も晴れていき、ようやくもとの状態に戻る。

男達は再び詠唱を始めていたが、セントが水の刃を飛ばしているため、中断を余儀なくされていた。

「小賢しい真似を！」

男が悪態をつきながらそう吐き捨てた。

互いが睨み合いをしている間にも風は強くなり、ルリアの詠唱は続く。

「…厳寒を運ぶ風は、ここに集い、悪し者に破滅をもたらす…」

ルリアの詠唱は尚も続く。

「あの女の詠唱を止めろ！」

男がそう言つと、ルリアの詠唱を中断させようとして先程から詠唱していなかつた男達が走つてきた。

セントはそれを見ると水の刃を飛ばすのをやめ、詠唱を始めた。

「流れゆく水よ、その強き力で全てを押し流せ…アクアフロート！」

セントの杖の先に球体が現れるとそこから大量の水が溢れだし、走つてきた男達は足をとられ流されていつた。

そういうしているうちにルリアの詠唱が終わり、叫んだ。

「セント、下がつて！」

「！」

その声を聞いたセントは大きくバックステップをとり、下がつた。

そしてルリアが術を発動させた。

「吹雪け！ブリザードサイクロン！」

吹雪のような冷たい突風が巻き起こる。

そしてそれらが巨大な竜巻となり、男達を巻き込んだ。セントは、余りの風の強さに思わず腕で顔を隠した。

竜巻はうねりながら、段々と弱くなつていく。

竜巻が殆んどおさまつたところでセントは腕を下ろし、辺りを見る。

先程までいた男達はいなくなつていた。

恐らく強制転送されたのだろう。

そう納得するとルリアの所へ行った。

ルリアは浮いたままだつた魔術書を手にとると、余りの疲労感にその場にへたりこんだ。

「大丈夫か？」

「ちょっと派手にやりすぎちゃつたみたい……」

確かにルリアの言つとおり木々や川面が所々凍つているよつに見え、実際にまだ肌寒く感じている。

「気にする事ないさ。初めて使つたんだろ？」

ルリアはその言葉に頷くと、立ち上がるつとする。しかし、身体が鉛のように重く、動かなかつた。

「あれれ？」

「どうした？」

「あはは……立てなくなつちゃつたみたい」「わかつた。ほら」

セントはルリアを立たせると、そのまま背負つた。

「ごめんね。迷惑かけちゃつて……」

「いいつて。それよりも……」

セントはルリアがまだ手に持つていた魔術書を見て言つた。

「その魔術書、古いやつじやないか」

「え？」

ルリアもつられて魔術書を見た。

「あ……ほんとだ」

「……もしかして氣づいてなかつたのか？」

「だつて焦つてたんだもん」

「そうか。それにしても初めてなのに、よく突つかからずには詠唱出来たな」

セントは感心しながら言った。

「よく分からぬけど何か頭の中にその言葉が聞こえてきて、自然と口が動いたの」

何だつたんだろ？、といつよつに首を傾げる。

「不思議なこともあるんだな」

セントはルリアを背負い直しながら言った。

「とにかく、この魔術書を持ってきておいて良かった……のかな？」

「まあ結果オーライでいいんじゃない？」

「うーん…」

ルリアは考え込んでいたが納得したように言った。

「それもそうだね？」

「あと、だいぶ時間が過ぎたから走るけどいいか？」

「うん。大丈夫だよ」

「わかった」

そう返すと、セントは再び静寂の訪れた森の中を走り始めた。

## 第7話 試験の結果

再び進み始めてから、一時間ほどたつた。

幸い、何にも遭遇することもなく順調に進んでいたが、それでも先ほどの足止めのせいだいぶ遅くなっている。

（ふう、少し休憩するか）

セントは、休憩をとろうと近くの倒木に腰を下ろした。ルリアはといふと、先ほどの魔術で疲れてしまつたのか今では眠つてしまつている。

セントは休んでいる間にあることを思い出した。（そういうれば、フオルスが言つていたことつてもしかして先程のことだつたのか？）確かに彼らは、受験者を失格にするためだと言つていたので、その可能性は考えられた。

しかし何故そうする必要があるのか分からぬため、確信は出来なかつた。

（なんにせよ、もう何も起きなければいいな…）

そう自分でまとめると言えるのをやめ、辺りを見渡してみる。

相変わらずすぐ近くを流れている川と木々ばかりだったが、だいぶ進んできて地面が初めの方よりは、多少なり歩きやすくなつていた。

（もう少しつてどこかな）

セントはそう思つと、立ち上がりルリアを背負い直して再び走り始めた。

(やつと着いたか)

さらに走つてから三十分ほどたち、ようやく外に続く道が見えてきた。

道の先には試験前に集まつた広場がうつすらと見えていた。

セントはルリアを起しあうと器用に身体を揺すつた。

「ルリア、着いたぞ」

「…………」

「とりあえず、起きてくれ

「……すう……」

しかし、何度呼び掛けても、寝息が返つてくるだけだつた。

「…………まあ、いいかな?」

セントは諦めると、再び背負い直して外へと歩き始めた。

段々と少くなつていい木々に、見送られている様な気がした。

そして、ようやく広場へと戻ってきたのだった。

すでに田沈を迎えてるので、一人は半日近く此処にいたことになる。

セントは見渡すと教員が近づいてくるのが分かつたので、自らそちらへ向かつた。

「おめでとう。君たちは文句なしの合格だ。詳しい説明は後日するから暫くは自由にしていろとよい」

「ありがとうございます」

セントはそれだけいふと、会場を後にした。

（流石に疲れてきたなあ）

会場を後にしてからだいぶ時間がたち、すでに月も綺麗にでているのだが、まだ家に着いていなかった。

ルリアはまだすう、と静かに寝息をたてて寝ているので、セントがずっと背負つて歩いているのだった。

それでも、セントも疲労が溜まり始めていて歩みが遅くなっていた。疲労と戦いながら歩いていると、何処からか聞き覚えのある明るい声が聞こえてきた。

「あれ？ セント？」

「フォルスか。こんな時間にどうしたんだ？」

フォルスはセントだと分かると、此方に走つてやってきた。

「ちょっと気分転換にまたここに来たんだ。セントは？」

「昨日話していた入学試験に行つてきた」

「そうなの！？ 大丈夫だった？」

「ああ。フォルスが言つていた様なことは起きたけど、無事合格すること出来たよ」

フォルスはそれを聞いて、安心した表情をした。

セントのことを心配していたのだろう。

「おめでとう！ さすがセントだね」

「ありがとな」

フォルスはそう言つたとき、セントが誰かを背負つていることに気づいた。

「ところでセント、その人は？」

「ああ、一緒に試験を受けたんだ」

セントが少し下にずり落ちてきたルリアを背負い直しながら言つた。

「試験中に派手に一発撃つたせいで、力が抜けたみたいで歩けなく

なつたから、ずっとと背負つて来たんだが……

「寝ちゃつたつてこと?」

フォルスの言葉に同意するかのようにルリアの寝息が聞こえた。

「ああ。多分唐突に疲れが出たんだろう」

「そつかあ。セント、大変だつたね」

「いや、結構軽いからそんなに負担にはならなかつた」

「そつか。とにかく、お疲れさま」

フォルスはそう言つた後、何かを思い出した。

「そういえば、みんなにセントのことを話したら、たまには顔出しへに来いつて言つてたよ」

「そうか。余裕が出来たら行くよつてあるよ。話して貰えてくれてありがとう」

「ううん、そのくらいは頼まれたんだから当然だよ。それじゃあ、

セントも試験後で疲れてるだらうし僕はそろそろ戻るね」

「分かつた。気をつけてな」

「うん!じゃあね」

フォルスは闇の中へ走つていった。

それを見えなくなるまで見送る。

「さて、早く帰るかな」

そう言つてセントが歩き出たつとしたとき、再び声が聞こえた。

「……セント……」

「ん?」

「すう……」

「起きたのか?」

「すう……」

セントは振り返るが、後ろには背負つているルリアしかいない。

「起きたのか?」

「寝息だつた。」

(寝言だつたのかな?..まあいいか)

セントはよう納得すると家に向かつて再び歩き始めた。

## 第8話 夢の中の少女

（あれ？ ここは…）

ルリアは気がつくと、見知らぬ場所に立っていた。  
(夢の中かな？)

そう思いつつも周りを見渡す。

ずっと平原が広がっているが、やはり何処かは分からなかつた。  
(そういえば、試験はどうなつてるんだろう…)

そんなことを考えていると、突然強風が吹いた。

「うつ…！」

余りの強さに立つていられなくなり、その場に身を屈み目を瞑つた。  
風は少しの間吹き続け、吹き始めと同じように突如吹きやんだ。

「…止まつたかな？」

ルリアは恐る恐る目を開けた。

先ほどと変わらない景色が広がっている。

（とりあえず大丈夫かな？）

そう思つと立ち上がりつとする。

「だれ？」

「きやあつ！」

しかし突然後ろから聞こえた声に驚いて、バランスを崩し、尻餅をついた。

「だ、大丈夫？」

「いたた…大丈夫だよ～」

ルリアが後ろを振り返るとそこには、若草色の髪をした少女が困惑した表情をしていた。

「良かつたあ。ごめんなさい、驚かせたりして」

「ううん。大丈夫だよ～」

ルリアは少女を落ち着かせようと頭を撫でてみた。

少女は最初は警戒していたが、安心してくれたようだ。

「お姉ちゃんの名前は？」

「ふと少女が尋ねてきた。

「私はルリアだよ。あなたは？」

「エミリっていうの。ルリアお姉ちゃん、その鞄から出るのは？」

「え？あ…」

ルリアはいつの間にか鞄を持っていることに気がついた。

ルリアは鞄の中の物を取り出す。

「これは…」

鞄の中の物を取り出してもみると、一冊の古い魔術書でルリアが試験中に使ったものだった。

「わあ！すごいぼろぼろだねー。見てもいい？」

「うん。いいよ~」

ルリアはそう言ひと魔術書を渡した。

「わーー！」

エミリは受け取ると、早速中を見始めた。

「ルリアお姉ちゃんはこんな難しい本を読んでるの？」

「そうだよ~」

「す、」「ー、」

目を輝かせながら、エミリは言った。

ルリアは過大評価じゃないかと思いつつも、少し照れ臭い気分で魔術書に見入るエミリを見ていた。

少しして、一通り見終わったのかエミリは魔術書をルリアに返す。

「お姉ちゃん、ありがとう~！」

「いえいえ~」

「それじゃあ、わたしは行くね」

「そうですか。気をつけてね~」

「うん！今度は森で会おうね！」

「え？」ルリアはエミリが最後に言ひた言葉に思わず聞き返す。

しかし、再び先ほどよりもさらに強い風が吹いた。

ルリアは腕で顔を隠し、飛ばされないように身を屈めるが身体が浮

いた。

(まづい!)

そう思つたがもう遅くそのまま風に流された。  
ルリアは飛ばされている中で元いた場所を見ると、既にHミリの姿  
は無かつた。

そして、ルリアの意識は途切れた。

「う…………」

ルリアは小さな呻き声をあげ、目を開くと見慣れた天井が視界には  
いった。

(やつぱりさつきのこと)は夢だったのかなあ。それにしても、また  
会つて…)

ルリアはHミリが最後に言つた言葉について考えていたが、奥から  
声がしたので考えるのをやめた。

「やつと気がついたか?」

「セント?」

ルリアは身体を起し、セントと向き合ひ。

「1日経つても起きないから心配したよ」

「やうなの?」

「ああ。外を見てみなよ」

ルリアはそう言われて外を見ると、既に日は沈んでいて夜を迎えていた。

「ほんとだ…私はそんなに長く寝ていたんだ…」

ルリアは戸惑いながらも、気になっていたことを聞く。

「そういえば試験はどうなったの?」

「ああ、無事合格したよ。詳しいことは後日連絡するそうだ」

それを聞いてルリアは安心した表情を見せた。

「そつか。ありがと…」

「良かつたな」

「うん。セントが引き受けてくれてほんとに良かつた…」

ルリアはそう言つたが、声が涙ぐんでいた。

セントは、優しくあやすようにルリアの頭を撫で始めた。

暫くして、ルリアが落ち着いたのでセントは撫でるのをやめ、口を開く。

「とりあえず夕飯にするけど、歩けるか?」

ルリアは頷くと、ベッドから降りる。

セントはそれを見ると先に部屋から出ていった。

ルリアは歩き出す前に何となく、外を眺めた。

窓の外は変わらず静かな街が見える。

「今度は…森で…」

そつ言い聞かせるように呟くと、ルリアは部屋を後にした。

## 第9話 新たな始まり

「結構広いね」

部屋に入ってきたルリアはそつと、置いてあつたベッドを見つけて飛び込んだ。

「そうだな」

遅れてセントが部屋へと入ってきた。

今日は学園の寮への移動日で、一人も寮へ来ていた。学園は試験会場でもあつた広場と森を挟んで反対側にあり、セリーアの街の近くでもあるので来るまでには余り時間はかからなかつた。

「なにやつてんだ？」

セントはベッドに倒れ込んでいるルリアを見て言った。

「んー、ベッドの硬さを確認しようと思つて何となく？」

ルリアは起き上がり、ベッドに座る。

「そう聞かれても困るんだが…」

セントは部屋の隅に荷物を置いた。

授業 자체は2日後から始まるので、それまでは一応自由行動となつていた。

「セント、片付け終わつたら時間もあるから寮の中を見てまわらなさい？」

ルリアが外を眺めながら言った。

寮は森の隣にあり、窓からは鬱蒼と生い茂る森が見える。

「ああ、いいよ。ちょっと待つてくれ」

セントはそう言つと、手早く荷物を棚にしまつていく。

数分後、二人は部屋を出て見学を始めた。

寮は四階しかないが、建物が広く作られているため相当な大きさだつた。

部屋割りは各パーティーにつき一部屋、人数が多いときは二、三部屋となつていて、階や区画に応じて男女分けがされているのだが、

セントたちのように男女混合という場合もある。

セントたちはとりあえず今いる四階を歩き、自分達の部屋の位置や階段の場所を把握する。

余りに広く、更にやや複雑な構造のため場所が分からなくなつてもおかしくないとセントは思い、先に自分たちのいる階層を見てまわることにしたのだ。

廊下を歩いているときにルリアは、ここの大きさを改めて実感していた。

途中で誰ともすれ違わなかつたが、最上階といふこともあるのだろうとルリアは思った。

ある程度見てまわった所で下に降りた。

一階へ降りると、生徒らが続々とやって来るのが見えた。到着した生徒達は部屋割を確認すると次々と階段を上がりしていく。どうやら、一人が来るのが早かつたようだ。

寮の一階には、食堂や運動場などの公共の施設があり、食堂に関しては時間によつては非常に混雑するため一ヶ所もあるのだ。食堂のメニューは分類が多く豊富で気になつたものもあるので、楽しそうとルリアは思つたが、セントは良いものが無かつたといつ表情をしていたように見えた。

その後、室内運動場や売店、もつ一ヶ所の食堂などまわった。どの場所でもちらほらと生徒が見られたが、食堂だけは、大勢の生徒で賑わっていた。

時間的にはもう日が沈み、暗くなり始めていて夕食には丁度いいくらいになつていた。

「ついでに食べていくか？」

ルリアはそれを聞いて頷く。すると

しかし、

くきゅうう…

「…」

腹の虫が鳴つてしまいセントを見るがセントは少し笑つていた。

ルリアは恥ずかしさのあまり、顔が真っ赤になり否定しようとも言葉が出なかつた。

「…とりあえず入るか」

セントは困つたように言つとルリアは俯いたまま無言で頷いた。

二人は注文をし、受け取ると座席を探す。

幸い席はまだいっぱいではなくすんなりと座ることができた。ルリアは先ほどのことのせいでもまだ顔が少し赤かつたが、とりあえずほとんどもとに戻つたようだつた。

「それじゃあ頂きます~」

「頂きます」

そう言つとそれぞれの料理を食べ始めた。

暫くの間、黙々とルリアは食べていたが嬉しそうに口を開く。

「中々美味しいね~」

「ああ、そうだな」

セントがそう言つた時にはもう食べ終わつていた。

決してセントの分の量が少ないわけではなくルリアのとほぼ同じか、むしろ多いくらいなのである。

それでも気がつくといつもセントは、食べ終わつているのだつた。

「それにしても相変わらず食べるの速いよね~」

「そうか?」

セントは食後の珈琲で一服をしていた。

「うん」

「特に意識している訳ではないんだが…」

「そりなんだ~」

ルリアはそつけなく返した。

ちなみにルリアは吃るのが遅く、今もまだ半分以上が残つていた。

セントはのんびりと口に運ぶルリアを見ていて何となく微笑ましく思えた。

数十分後、ようやくルリアが食べ終わった頃にはセントは三杯目の珈琲を口にしていた。

セントがそれを飲み終え、少ししてから席を立ち部屋へと戻つてき  
た。

「はあ～。ちょっと食べ過ぎちゃったかなあ」

ルリアはそんなことを言いつつベッドに寝転んだ。

「じゃあ、俺はもう寝るな」

「わかった。おやすみ～」

「ああ」

そう言つとセントは自分の寝室へ入つていつた。

ルリアはそれを見送ると外に目を向ける。

今夜は弓張り月で薄暗く、すぐ近くまで迫つてゐる森が少し不気味  
に見えた。

ルリアはしばらく外を見ていたが、カーテンを締めると立ち上がり  
簡単に支度をすると、導かれるように部屋を出て外へと向かつてい  
つた。

## 第10話 少女との約束

夜の闇に覆われた森の奥の、月明かりが射し込んで少しだけ明るい場所に一人の少女がいた。

その少女はやや大きな切り株に腰掛けて誰かを呼びかけるように小さく呟いた。

「……お姉ちゃん……」

高い声は大きくなかったが辺りが静かなため、少しだけ響いた。するとその言葉に答えるかの様に弱い風が吹き、木々を揺らした。しかし少女が辺りを見渡しても特に異変は無かつた。

「待ってるよ……」

風の音に搔き消されるほど小さい声で再び呟くと、月が昇っている天を仰いだ。

約束の人が必要來ることを信じて…

「ほのかな光よ、小さな明かりとなり辺りを照らし出せ……」

ルリアが詠唱すると杖の先に光が灯った。

風魔法以外は、魔術書無しでは扱えないのだが簡単なものは一応使いうことが出来た。

ルリアは部屋を出てから、あの夢の少女が言つていたことに導かれるように森に來たのだった。

「とりあえず灯りはこれでいいかなあ」

ルリアはそういうと、森の中へ歩き始めた。

森は試験の時とはだいぶ違った姿で、数歩歩くだけで先ほどいた場所が見えなくなるほど見通しが悪く、更に相変わらず道らしきものはあるが足元も良くない。

それでも走っているのとほとんど変わらないくらいの速度で進んでいった。

しばらく進むと、少し足元がしつかりとした場所に出た。

「ここは…」

ルリアは杖をかざし、辺りを照らし出した。

近くには川が見えるこの場所は見覚えがあった。

「結構近くだつたんだあ」

ルリアは辺りを見渡して、そう言った。

前回試験で来たときは、この場所で男達に襲撃され何とか退けたもの、その時に放った魔術の反動でルリアは、意識を失ったのだった。

ルリアはそのことを思い出したのか、苦笑いを浮かべたが、せりふあることを思い出し小さく呟いた。

「そういえばあの魔術書…」

試験後からあのときルリアが使った魔術書が何故だか見当たらないのだった。

「たしか鞄にしまったんだけどなあ…………今度セントに聞いてみよっと」

そう自分で完結せると再び奥へと進んでいった。

更に進んでから一時間ほどたつた。

ずっと歩き通しでルリアの息が少し上がっていた。  
杖に灯っている光もだいぶ時間がたち、弱くなつて消えかけていた。

「はあ…ちょっと疲れたなあ」

そう言いつつもさらに歩みを進めた。

しかし途中で明かりとなつていていた光が消えて、辺りが闇で閉ざされた。

「もう一度つけないと…」

そつと立ち止まり、詠唱をしようとする。

ガササツ

「！」

突然茂みから音がして、杖を構え直すと周囲を見回す。

しかし視界が悪いため何処から音がしたのかが分からなかつた。  
しばらく警戒していたが何も変化がなく、ルリアが少し気を緩めた時だつた。

「お姉ちゃん！」

茂みから小さな影が飛び出してルリアに飛びついた。

「きやつ！」

ルリアは振り向きはしたものの、飛びついてきた衝撃に踏ん張りきれずそのまま倒れ込んだ。

「いたた…」

体を起こして見てみるとそこには夢の中に出てきた少女がそろいつた。

「来てくれたんだね！」

少女は嬉しそうにハーフパンツと半身を起し、こちらのルリアに抱きついた。

「えっと……Hミコちゃんなんだよね？」

「うん！覚えててくれたんだね」

それを聞いて、色々と不思議に思いつつも再び出合つたことが嬉しく思えた。

「もういえばどうしてこいだ？」

ルリアは当然のように出していく謎問を聞いてみた。

「ん~……あれ？」

Hミコはルリアに言われて答えようとしたが何故か頭をかしげる。

「なんでだらう？」

「え？」

思つてもいなかつた言葉に驚き、ルリアは思わず聞き返した。

「ほんとに？」

「うん。気がついたらしいにいたんだもんつ」

Hミコはルリアが信じていないと思い、頬を膨らませて言った。

「もうですか~。」めんね

ルリアはHミコの機嫌をとるために、頭を撫でた。

暫くすると、Hミコは嬉しそうな表情に戻つた。

それを見てとりあえず安心したルリアだつた。

「さて、じゃあ帰るかなあ」

「お姉ちゃん、ついてつてもいい？」

「もちろんですよ~」

そう言つとルリアは屈むとHミコに背を出した。

「わーい！」

Hミコはルリアの背に勢いよく飛び乗つた。

勢いが強く、少しだけふらついたが思つたよりもHミコは軽くビビつやら普通に歩けそつだつた。

「じゃあ行きますよ~」

「うん！」

その間のヒューリックは二三ヶを競争に直して参出した。

ガサ：

!

歩き始めてから間もなく茂みから小さな物音がして、思わず立ち止まり辺りを見渡す。

お姉ちゃん、どうしたの？」

エミリは先ほどの音が聞こえなかつたのか心配そうに声をかける。「ちょっと走るからちゃんと掴まつてね」

ルリアは少しだけ小さい声で言った。

二二

元気よく返事したのを聞いてルリアは静かに走り出した。

## 第11話 空を舞う翼

「はあ、はあ……」

「大丈夫？」

ルリアはエミリと出会った場所からずっと走り続けていて、だいぶ息が上がっていた。

「大丈夫だよ……ふう……」

ルリアはそうは言つたが、辛そうな表情をしていた。

「わたし、自分で歩くね」

「大丈夫だよ……」

ルリアはエミリが降りようとして、降りさずに走り続けようとした。

しかし木の根に気づかず足をとられ前のめりに倒れた。

「いたたた……」

ルリアは手が塞がっていたものの、幸いどこも怪我をしなかつた。

「お姉ちゃん、少し休もう」

エミリはルリアから降りるとその場に座り込んだ。

「そうだね……」

ルリアは早く寮に戻ろうと思っていたが、走りっぱなしだった身体が悲鳴をあげ始めていたので近くの倒木に腰掛けた。

「エミリちゃん、怪我はなかつた？」

「うん！」

「そうですか……」めんね……」

ルリアはそれを聞いて安堵しつつ、エミリに謝った。

「お姉ちゃんこそ大丈夫？」

「私は大丈夫だよ……」

それだけ言つと、ルリアは空を見上げた。

木々の間から少しだけ見える空は、夜明けが近づいているのかほんの少しだけ明るくなつていた。

少ししてだいぶ呼吸が落ち着き、身体が楽になつた。

「ふう…」

ルリアは一息つくと立ち上がり、少し身体を動かしてみる。  
これならどうやら普通に走れそうだつた。

「じゃあ行きましょっ」

「うん！」

ルリアが屈んで背中を差し出すと、Hミリは再び勢いよく飛び乗つた。

しかしルリアもそれを予想していたため、先ほどのようにふらつくことは無かつた。

「じゃあまた掴まつててくださいね~」

立ち上がり、Hミリをしつかり背負い直してそのまま走り出した。

「…」

しかし先の方で赤く光るものが見え、足を止めた。

それと同時に寒気が全身を駆け抜け、咄嗟に左に跳んだ。

ドオオオオ…

直後、爆音が響き振り向くとルリアがいた場所には火柱が上がつた。

「お姉ちゃん、前！」

「…」

突然の出来事に驚いたルリアだが、Hミリの声が聞こえ前を見ると赤い光が視界に入った。

そして慌ててその場から飛び跳んだ。

しかし、僅かに反応が遅れたため、爆発の衝撃に耐えきれず吹き飛んだ。

受け身をとるにもHミリを背負つていてとれないため、何とか踏み止まろうとする。

しかし耐えきれず横向きに倒れ込み、その拍子で右足を挫いた。

「つ……」

ルリアはからうじて立ち上がつたが、挫いた足が痛み走ることは出来そうに無かつた。

「Hミリちゃん、逃げて！」

ルリアはいつ炎に当たってもおかしくないと判断すると、Hミリを降ろして逃げるようになっていた。

「やだよーお姉ちゃんと一緒にいるー。」

しかしHミリは側から離れようとはしなかった。

ルリアはHミリを逃そうと振り向いたときに、再び赤い光が見えた。ルリアは何とか回避しようとするが、痛む足のせいでバランスを崩し倒れた。

（避けられない……！）

ルリアはそう思うと思わず眼をつむる。

バサツ

その直後、突然翼が羽ばたくような音が聞こえたが、ルリアは眼を開けようとはしなかった。

しかし、じぱりぐしても先ほどのような爆音が聞こえず衝撃なども感じられない。

「…………？」

さすがに不思議に思い、眼を開けた。

「えつ……」

しかし、視界に広がっている風景に言葉を失った。

鬱蒼と生い茂っていた木々が下に広がり、ずっと遠くまで見えた。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

何が起きたのか分からず必死に考えていると、Hミリの声が聞こえた。

そして、ルリアは振り返つてHミリを見て驚いた。

「つ、翼……」

「？」

いつの間にかルリアの背に捕まっていたHミリから、ガラスのように透き通った薄い緑色の一対の翼がはえていた。

そして、今一人は森の上空を飛んでいるのだった。

「お姉ちゃん？」

何故ルリアが驚いているのか、Hミリコはよく分からぬつで、首を傾げもう一度ルリアを呼んだ。

「...、なに?」

「どうかしたの?」

「えつと...その、後ろの...」

「?」

Hミリコは、後ろと叫われて振り向いた。

「?、何もないよ」

「もうじゃなくて...背中から翼が...」

Hミリコはもう一度後ろを振り向き、何かに気がついたようにな頷いた。

「これのこと?」

「うん。どうしたの?」

「んと、これは気がついたらあつたの」

そういうと背から伸びている翼を、羽ばたかせた。

「そうですか~」

ルリアは色々と疑問に残つたが気にしないことにした。

「ともかく、助けてくれてありがとうね~」

「うん!」

(外見が変わつただけみたい)

Hミリコが元気よく頷いたのを見て、ルリアは何となく安心した。

「お姉ちゃん、どこに降りればいい?」

「じゃあ.....このまま真っ直ぐ行つてくれる?」

「はーい」

そういうとゆつくりと羽ばたかせ、前へ進み始めた。

「ふう.....あつ」

ルリアは小さくため息をついて今一度空を見た。

「もう夜明け...」

気がつくと空は金色に輝き太陽が昇りかけていて、1日が始まつとしていた。

いつもよつ空に近いところにいるルリアは、思わず見とれていた。  
しづくして寮の近くまで来ると、ユミリは高度を下げて着地をし  
た。

「じゃあ行きましょ~」

ルリアはやつことユミリを連れて寮へと入つていった。

## 第1-2話 風変わりの少女

「ふう、これで完成つと  
そういうとルリアはテーブルに針を置いた。

「おはよう。足はもう大丈夫か？」

「あつ、セント。おはよ～」

すると、ちょうどセントが部屋から出でてきた。  
「まだちよつと痛むけど一歩歩けるよ～」

「ちよつ」

セントはちよつと近くの椅子に腰を下ろした。

昨日はセントに夜にあつたことを一通り説明をして、エミリをここに居させることを伝えた。

それを聞いてセントは、どうせならこつも一緒にいたほうが良いと言ひ、そして怪我をしているということで、エミリを連れてメンバー追加の申請をしにいったのだ。

さすがに事実をそのまま伝えるのは避けたほうがいいと決めていたので、エミリはルリアの親戚ということにした。

セントもルリアも申請が通るのか心配していたが、その心配を裏切るよつに学園長の、構わないという一言であつせりと許可が出たのだった。

周りの先生らも特に反対する者は出ず、エミリを可愛がる教員までいたのだった。

セントは椅子に腰かけると不意に、机に置いてあつた物が目に入つた。

「ちよつ、今日はやけに早いみたいだが何してたんだ？」

「それはね…」

ルリアが答えよつとしたとき、エミリが起きてきた。

「おはよー…」

「おはよ～、エミリちゃん」

「おまめの」

「やうだ。H//コちゃん、ちゅうと来てみて」

「え…」

「はい」

ルリアは手に持っていた物を、乗せてやつた。

「？」

それは先に綿の様な黄色の玉がついている、赤色の布地で作られた帽子だった。

H//コは近くにあつた鏡を見ると、田を輝かせた。

「わあ、これお姉ちゃんが作ったの？」

「そうだよ～。それはH//コちゃんに作ったんだよ」

「わーい、ありがとー。」

「良かつたな」

「うんー。」

セントは嬉しそうにするH//コの頭を撫でた。

「それにも、器用なことあるなあ

「私、こつこのは得意なんだ～」

「そうか。とこひで朝飯はどうするんだ？」

「あつ私、作つておいたから」

「そうか。じゃあ早く食べよう。今田から登校だからな

そつぱうと目を並べ朝食にした。

「今日からここ担当となつたセフィルだ。まあ、あまり顔を会わせる機会は少ないとと思うがよろしくな」

セフィルと言つた教師は適当に挨拶をした。

「何だかだいぶ親しみやすそうな人だね~」

「そうだな」

ルリアがそう言つとセントは少し苦笑いを浮かべて言つた。  
今日から授業が始まるということで教室へと移動して、今は顔合わせの最中だ。

新入生の教室は寮とは違つ校舎の五階にあるため、若干肩で息をしながら入つてくる生徒も数名だがいる。

生徒のほとんどがセント達と同じ年くらいかそれ以上で、エミリくらいの生徒はいなかつた。

そのため、席に着いた時はほとんどがエミリに注目をしていたのだった。

「まず実習のグループを決めてもらひ。人数は大体……五人から八人くらいだな。少しの間席を離れるから、戻つてきたときに報告してくれ」

セフィルは立ち上がると扉へと向かい扉を開けた。

「ついでに……現在のメンバーで充分いるんなら、そのままでもいいからな」

そう言い残すと、教室から出ていつた。

するといくつかのグループが他のグループの生徒と話し始めた。

「さて、どうする?」

「ん~…誰か声掛けてくれるかな?」

「どうだろ?」

「ちょっといい?」

そうセントがルリアに言った直後に声がかかった。

ルリアは声のした方に振り向くと、少し目のつり上がりついている気の強そうな少女がこちらを見ていた。

「私？」

「そうよ。一緒に組まない？」

「えつと……ちょっと待つててください」

ルリアはそう言うとセントに視線を移した。

「セント、そういうことなんだけどいい？」

「ああ、べつに構わないよ」

ルリアは再び少女に視線を戻す。

「いいですよ~」

「やつたあー女子のいるグループのほとんどが、人数一杯で困つてたんだよねー。本当ありがとー。」

「う、うん……」

余りに感激していたため、どう対応すればいいのか分からず戸惑つた。

「そうだ、まだ紹介してなかつたね」

少女はそう言うと何かを探すように辺りを見渡す。

しかし、どうやら見つからなかつたようでため息をつくと、再びルリアの方を向いた。

「あたしは、ステイアよ。よろしくね」

「私はルリア。こちらこそよろしくお願ひしますね~。それと……」

そこまで言うと再びセントの方を向く。  
セントは頷くと、前に出た。

「俺は、同じパーティーのセントだ。よろしくな」

セントは小さく手を挙げてそう言った。

「エミリちゃん、ちょっと来てください~」

セントが言い終えるとルリアはエミリを呼んだ。

「えつと、この子も私のパーティーだよ~」

「わたしはエミリっていうの」

「きやー可愛いーー！」

「ふえ！？」

ステイアは突然エミリに抱きつき頬擦りを始めた。

突然のことにしてセントもルリアも畳然としていたが、少ししてようやくルリアが声をかける。

「あ、あのステイア？」

「え？……あつ」

ようやく気がついたのかステイアは慌ててエミリから離れた。

「い、ごめんね！」

そしてすぐに謝ったが、既にエミリは少し放心状態になつていて、こくこくと頷くたびに帽子の玉が揺れる。

「突然どうしたんですか？」

ルリアがエミリを膝に座らせて、ステイアに聞いた。

「実はこれ癖になつちゃつてるんだよね。自分で直したいって思つてるんだけど…」

ステイアは少し困った表情をして言つた。

「そりなんですかあ」

（変わつた人もいるんだなあ）

そんなこと思いつつ、ルリアはあることに気がついた。

「そういえば、パーティーの人はどうしたの？」

「あたしのパーティーは一人なんだけどさつさつと搜してみたらいなかつたわ。トイレにでも行つてゐるのかしら……悪いけど、またいるときに紹介するね」

やや残念そうにステイアが言つたとき、扉が開いた。

「それじゃ、グループの人数が集まつた所から言いに来てくれ」

セフィルが教室へと戻つてきてそう言つた。

「じゃあ、行くわよ」

「あつ、うん」

「はーい」

ステイアがそう言つとルリアとエミルは返事をして、セントは一度

頷いて歩き始めた。

「……メンバーはこの五人でいいんだな？」

セフィルは名簿に書き込みながら、セント達に聞いた。

「はい！」

皆を代表するようにステイアが返事をした。

「わかつた……ん？」

そう言ったときにセフィルは一人足りないことに気がついた。

「そういえば、一人足りないがどうしたんだ？」

「あたしの連れが居ないんですよ。トイレにでも行つてると思います」

「そ、そ.ua」

ステイアの余りに投げやり氣味の言い方にセフィルは少し驚いていたが、余り気にせずにステイアはその場を離れた。

「では、失礼します」

セフィルに一礼するとセント達も、後を追つた。

「ステイア？」

「悪いけどちょっと搜してくるね。さすがに遅すぎのから……」

「それじゃあ私達も手伝う？」

「ううん、大丈夫。ありがとね」

そう言うと教室から出ていった。

「……お姉ちゃん、どうするの？」

「ステイアを手伝いたいけど、足を引っ張るだけになりそだから  
ここにいましょ」

「はーい」

三人は、ステイアが戻るのを待つことにしたのだった。

## 第13話 振り回される少年

「まったく、何やつてたのよ…」

「わかった、悪かつたって！」

ルリアはステイアを捜しに来て、ちょうど見つけたのだがステイアの行動に茫然とした。

ステイアは何故だか分からぬが、先ほどから一人の少年を殴つていた。

とりあえず何がどうなつてゐるのかを聞くため、ステイアに声をかける。

「ス、ステイア？」

「！」

ルリアがいることに気がつくと、ステイアはすぐに手を下ろした。

「あら、どうしたの？」

殴られていた少年はその場にうずくまつていて、何事も無かつたかのようなステイアの対応に、ルリアは驚いたが触れないほうが身の為だと思い、聞かないことにした。

「もう終わつたから、ステイアを捜してたんだよ」

「そうだつたの？」

「うん。だつてもう同じパーティーなんだから仲間じゃないですか

」  
「…」  
「…！」

ステイアはルリアの言葉に感激して、ルリアに抱きついた。

「えつ、ちょ、ちょつと…」

「ほんとにあなたたちと組んで良かつたわ！」

「ちか…ら…が…」

余りにも力強い抱擁にルリアは意識が薄れていいく。

「やつと見つけた……つて何してんだ？」

その時、ちょうどセントとエミリがやってきて、今の状況を見たセ

ントがそう言つた。

「あら、セントも来てたの？」

ステイアはセントの姿を確認すると、ルリアから手を離した。すると、氣を失っているらしくその場に力無くへたりこんだ。

「お姉ちゃん！」

それに氣がついたエミリが慌てて近づき、ルリアを揺さぶり始める。

「またかよ…………」

先ほどまでステイアに殴られてうずくまつていたがようやく復活した少年が、呟くように言つた。

「…………じめんなさい」

少年の呟きが聞こえてステイアは少年を睨んだが、事実を突かれてしまつたのでそのまま謝つた。

何が何だかよく分からなくなってきた状況にセントは、仕方なく苦笑いをしていた。

「改めて紹介するね。こいつがあたしの連れのウェーティよ」  
「おう、よろしくな……つて痛いからー！」

少年は、セントたちに挨拶をすると自分を呪じているステイアに言った。

五人は今、寮の談話室にいる。

先ほどまでは廊下にいたのだが、邪魔になるところとで此処に移動したのだ。

「あら、そんな強くはしないわよ」

「そういう問題じゃなくて！」

また騒ぎ始めた一人からセントはエミリに視線をやった。

「起きよー…」

此処に着いてからもエミリはずつとルコアのことを呼んでいるが、未だに眼を覚まさない。

「お兄ちゃん…」

すると、エミリは今にも泣きそうな声でセントのことを呼んだ。

「はは……ほら、おいで」

苦笑いを浮かべてセントはエミリとポンポン、とエミリを撫でた。

「うう……」

セントの服を掴み顔を埋め、エミリは小むく嗚咽を漏り出す。

「そういえば、まだこっちの紹介はしてなかつたな」

セントはエミリを落ち着かせながら、ふと思い出した。

「そういえばそうだつたわね」

エミリの様子に、やや俯き気味だつたステイアもセントの言葉に頷いた。

「俺はセント。そして、この子がエミリで今椅子で寝ているのがリアルだ。これからよろしくな」

「おう。それにしても、慣れてるんだなあ」

簡単な紹介が終わるとウエディが、ふと漏らした。

「ん？」

「いやあ、なんといつかさ……その、子供を育めるといつかな」

「ああ、そういうことか」

ウエディの言いたいことが何となく理解したのか、セントは再び苦

笑いを浮かべた。

「そんな大したことじゃ無いんだけどな」

「さうよ。アンタが過大評価し過ぎなだけよ」

「……それもそうか」

ウエディは、釈然としないものがあつたが渋々納得をした。

「あら、もうこんな時間だわ」

ふとステイアが時計を見ると、ちょうど1時にになると少しだった。

「そろそろ昼飯にでもするか？」

「そうね。でもあなたたちはどうするの？」

「部屋で作ることにするよ。エミリがきっとルリアから離れようとしているから食堂にも行けないだろ？」

「そう言つとセントは、再びエミリを撫でた。

「やつ。それじゃあ、此処に戻るからまたあとでね」ステイアはそれだけ言つて立ち上がると、ウエディを待たずに談話室から出て行つた。

「あ、おい……はあ」

ウエディが呼び止めたが気にせずに行つてしまい、溜め息を漏らした。

「じゃあ、また後でな」

「ああ」

そう言つとウエディもステイアの後を追つてここから去つて行つた。

「さて、部屋に戻るからちょっとといいか？」

「うん……」

セントはエミリを立ち上がらせると、自分も立ち上がる。

「よつと」

そして、椅子に寝かせていたルリアを上手く背負いつと談話室を後にした。

「う……

気がつくとベッドの上にいた。

「……あれ？」

辺りを見渡して此処が自分達の部屋だと「う」とが分かった。

「たしかステイアを見つけて……ん？」

ルリアは考えているときに、やけに温かいことに気がついた。そこを見ると、エミリが寄り添つように寝ていた。

「エミリちゃん？」

何となくルリアは呼んでみたが、意外にも返事はかえってきた。

「あ！ 気がついた？」

寝ていたはずのエミリが起きて、ルリアに抱きついた。

ルリアは何だか分からなかつたがとりあえず、頭を撫でてやつた。すると徐々にエミリの力が抜けて、そのまま寝てしまった。

「やつと気がついたか」

「セント？」

聞き慣れた声がしてセントの姿が視界に入った。

「その……ステイアは？」

「ルリアが起きるのを待つていたがもう部屋に戻つたよ」

そう言われて、なんとなく外を見ようとしたが、カーテンが閉まつていたせいで外の様子は分からなかつた。

「因みにもうそろそろ日付が変わるよ」

ルリアの意図を読み取つたのか、セントがそう言つた。

「えつ！？」

その言葉が信じられず、勢いよくカーテンを開けて外の様子を見たところでルリアは固まつた。

「ほんとだ……」

真上で輝いている月が、セントの言葉の真偽を表していた。

変わらない事実にルリアは小さく呟き、色々と考え込み始める。

「気絶だけで半日近くも眼を覚まさないのは珍しいと思うのだが…ルリアは、セントの言葉に頷いたが、セントは無意識に頷いているのだろうと、ルリアの様子を見て思つた。

「……とりあえず、空腹は大丈夫か？」

どう返せばいいのかなかなか思いつかず、少し悩んだセントだが話題を変えることにした。

しかしそれもルリアはまともに返事をせず、先ほどと同じように頷いただけだった。

「……食べたくなつたら言つてくれ

とつとつ諦めたのか、セントはそのまま残して部屋から出でていった。

「……あれ？」

しばらくして我にかえつたルリアはセントの姿が見えなくなつていふことに気がついた。

どうやらセントが思つた通り、無意識に頷いていたようだ。

（お腹空いたな…）

そう思つてルリアはベッドから降つよつとしたがあることを思つ出した。

「そういえば…」

寄り掛かるように眠つてゐるHILLIを抱きあげてから立ち上がると、ベッドに寝かせた。

あどけないエミリの寝顔を見て、自然と頬が綻ぶよつな気分になりながらルリアは部屋を後にした。

「実技試験？」

「なんだ、聞いてなかつたのか？」

首を傾げたステイアにセントはそう言つた。

今日も授業らしいことはせず、ほとんど連絡だけで解散となり、今は昼食にむけて食堂に移動している最中だ。

「先生が忘れて慌てて伝えてたのだよ～」

ルリアが続けて補足する。

「そういえば、言つていたような…」

「ちゃんと聞いておけよ…」

頑張つて思い出しているステイアの隣で、ウェーデイが小さく呟いた。

しかしその言葉が不運にもステイアに聞こえてしまつ。

「うつさいわね！そういうあんたは聞いてたの？」

「当たり前だ！」

「ちょっと一人とも落ち着いて」

言い争いが始まりそうなところでルリアが仲裁に入った。

「こんなところでケンカしないでよ～」

所構わず言い争いをするのは、他人からしてみれば迷惑であるため、二人は仕方無く押し黙つた。

「ねー、お兄ちゃん」

「ん？」

ステイアたちの少し後ろを歩いていたセントは、ヒミリが服を引っ張つていてことに気がついた。

「なんでよくケンカするの？」

主語が抜けているが、どうやら前を歩く一人のことを聞いているらしい。

「あー……」

Hミリの疑問にどう答えるか悩んでいた、ルリアがこちんこちんと答えた。

「どうしたの？」

セントはルリアに先ほどHミリが言ったことを聞くと、困ったように笑いながらも答えた。

「それはね、二人が仲良しだからだよ～」

「？」

しかし、Hミリは何故そうなるのか分からず首を傾げていた。

「そのうち分かるようになりますよ～」

そんな様子を見たルリアは、Hミリを撫でてそう言った。

「何の話してるのかしら？」

いつの間にか前を歩いていた二人も加わっていた。

「ねーねー、ステイアお姉ちゃん

「あら、なに？」

ステイアがエミリの方を向くと微笑んだ。

「ステイアお姉ちゃんとウエディお兄ちゃんって仲良しなの？」

「え、ええーー？」

突然な質問の内容に、ステイアは顔を赤くしてあたふたと落ち着かなくなっていた。

ウエディも驚いたように手を見開いて、Hミリを見たがすぐに下を向いた。

「ステイアーーー？」

ルリアは慌てて近寄り、ステイアを落ち着かせる。

この状況を作り出したエミリだが何が何だか分からず、首を傾げてセントを見た。

そんな視線に気がついたセントは、苦笑いを浮かべるとHミリを撫でてやった。

「……もうつ、行くわよー」

落ち着きを取り戻したステイアだが、今度は取り乱したことが恥ずかしくなり、先に歩いて行ってしまった。

「あっ、おい！」

ステイアの後を追つてウェーディも早歩きで前に行つた。

「何だかんだで仲良いよね～」

「確かにそうだな」

ルリアは一人の後ろ姿を見ながらそつ言つてセントもその言葉に頷き、そして一人を追い始めた。

食堂に着くと、既にたくさんの生徒で混雑していた。

「おーい、こつちだ」

しかし、先に行つてしまつた一人が席を取つておいてくれたようだ、座席からウェーディが手を振つて呼んでいた。

三人は適当に注文を済ますと、席へと向かつた。

「遅いじゃない。食べずに待つてたのよ」

「ごめんごめん

ルリアは謝りつつ、席に着いた。

「そういえば」

あとの一人も席に着き、皆食べ始めたときにウェーディが何か思い出したように言った。

「実技試験がどうかしたのか？」

「ああ、特にどうつてことは無いんだが一応良く使う魔術くらいは聞いておこうかと思つてな」

「そういうことね。あたしは光属性の魔術を使うわよ

「俺は……」

何か言いかけたが、すぐ口を開じてしまった。

ステイアが心配そうにウェーディを見たが、一度頷くと再び口を開いた。

「実は、魔術とかそういうのがほとんど使えないんだよ

「あたしがずっと教えてきたんだけど……」

ウェーディの言葉にステイアはやや俯いてそつ言つた。

「丁寧に教えてくれるんだけど、厳しすぎるんだよなあ

「あんたがちゃんと言つた通りにやらないからよ！」

「……」

「だからってわざわざ殴る必要は無いだろ！」

再び言い争いを始めた二人をルリアが落ち着かせる。

「それにしても、よくそれで入学試験合格できたね～」

「昔、父親がこの国の王立軍に所属していてさ。親に剣技を教わったおかげで多少なら扱えるから、ステイアが剣で術が撃てるようにしてくれたんだ」

「どういうこと？」

「俺の杖みたいな感じだよ」

「あれか～」

疑問に思ったルリアにセントがそう言つとすぐに納得した。

「参加するように頼んだから、やるうとは思つていただけどあれは大変だったわ。何度も調整したりしたからね」

ステイアは思い出したのか、そう言つと溜め息をついた。

魔力の多さは、血筋が関係してくるためどうしても差が出てしまい魔術がほとんど使えないという人も少なくない。

そのため、誰でも使えるように様々な物に魔力を込める技術が生まれされた。

詠唱無しで魔術が使える術符などがその一例である。

「……っと、だいぶ長話をしちゃったね」

ステイアが、ふと時計を見てそう言つた。

「このあと、ちょっと術の調整とかしたいんだがいいか？」

「わかつた～。ステイアとウェディはどうする？」

ルリアは、よく分からぬ話が続いて眠りこけているエミリを抱き上げて、一人に聞く。

「あたしたちも付いていくわ。最近魔術使つてなかつたし、こいつの剣の状態もついでに見ておきたいからね」

「勝手に決められたのが少し不服だけど、まあそういうことな」

「じゃあ行きましょう」そう言つと五人は席から立ち上ると、食堂を後にした。

「……これでいいかな?」

「ふうっ、と大きく息を吐いてからステイアは立ち上がった。  
「ちょっと使ってみて」

そして、手に持っていた剣をウェーディに投げ渡した。

「あぶなっ!？」

思わず行動に、ウェーディは咄嗟に身体をすらして剣の軌道から外れると、顔面掛けて飛んできた剣の柄を掴む。

「し、死ぬところだつただろ!」

ウェーディは顔を真っ青にして叫んだ。

「あら、あんたなら避けられるんだからいいじゃない  
しかしステイアは余り気にしていない様だった。

「それよりも、早くそれ使いなさいよ」

そう言われ、ウェーディは何か言いたげだったが渋々構えた。

「そういえば、何を相手にすればいいか?」

「知らないわよ。自分で考えなさい」

今は、ウェーディの剣をステイアが点検、調整を終えて調子を見ると  
ころだ。

「そう言つてもなあ。ただ素振りするだけで判るものなの?」

「それはあんた次第よ」

はあ、と溜め息をついて構え直すと何時もやつているよつてに剣を振  
る。

「…………どう?」

「やっぱり相手がいないと駄目みたいね」

それを聞いて、ウェーディは必死で相手を思い浮かべようと頑張つて  
いたが中々上手くいかない。

そのとき、ちょうどセントがやってきた。

「なにやってんだ?」

「ウエーディの剣を診てたのよ。でもあれが相手居ないと術が使えないって言つから、確認が出来なくて困ってるのよ」

ステイアの話を聞いて、セントは深く頷いた。

「それなら、俺でいいなら相手にならうか？」

「セントは剣を使ったことあるの？」

「剣は無いが前に槍なら振り回したことならあるよ」

セントはそう言つて、左手を掲げる。

するとその左手に光が集まって形を成し、杖となつた。

「！」

セントの行動に首を傾げていたステイアだったが、突然起きたことに驚いていた。

「特に切り結ぶわけじゃないんだからこれでも大丈夫だろ？」

「そうだけど、杖壊れたりはしないの？」

セントは頷くと、未だに頑張つているウエーディの元へと歩いて行つた。

「ウエーディ？」

「うわっ！？」

ウエーディは、セントが近づいてきたのが気がつかなかつたのか驚いて、反射的に振り向きつつ剣を横一閃に振つた。

「セントっ！？」

突然のウエーディの行動にステイアが反射的に叫んだ。相手が誰だか気がついたウエーディも、軌道を変えようとする。

しかし、セントは顔色一つ変えずに持つていた杖で上手く受け流し、後ろへ飛び退いた。

「大丈夫っ！？」

「ああ、少し驚いたがな」

顔を真つ青にしていたステイアは、それを聞いて安堵したのか力無くその場に座り込んだ。

「セント、すまねえ！」

ウエーディもその場に剣を落とし、駆け寄つて謝つた。

「特に怪我とかも無かつたから気にすることないさ。それよりも…」  
セントは言い淀みつつ目線をステイアに向かえた。

「？」

それにつられてウェーディの視界がステイアを捉えたとき、顔が青くなつた。

「あ、やば…」

「行つてあげたらどうだ？」

「お、おう…ほんとに悪いな…」

そう言つと、ウェーディは急いでステイアの所へと行き謝り始めた。  
相当大声で謝つてゐるらしく、部屋中に響いてゐる。

しばらくその光景を見ていたが、セントはふと持つてゐる杖に目をやつた。

透き通つた水色をしている杖はつすべと光を発してゐる。

「どうしたの？」

「ん?……ああ、ルリアか」

セントが振り向くと、ルリアとエミリが此方にやつてきた。  
先ほどまで、別の場所で身体ならしとして魔術の訓練をしていたの  
だが、どうやら終わつたようだ。

「あの一人を何とかしてくれないか?」

ルリアは言いたいことが解つたのか、面白げに微笑見ながら頷いた。  
「ちょっと待つててね」

そう言つてエミリを撫でると、ステイアの所へと歩いて行きまだ謝  
つてゐるウェーディに声をかけた。

「?」

エミリはどういうことか分からなかつたようで、首を傾げていた。  
ウェーディの声が止まつてから少しすると三人とも此方へ向かつてき  
た。

「セント、『めんなさい…』

ステイアもなんとか立ち直つたようだが、まだ若干目が赤い。

「もう過ぎたことだから気にするなよ」

セントは笑いながらそう言つた。

「それよりもやるんだろう?」

「え、ええ… お願いしていいの?」

一度頷くとセントは杖を構えた。

ウェディも剣を構えたが何を思つたのかすぐに下ろしてしまつた。

「なあ、ステイア」

安全な所まで下がつていたステイアはウェディの方を向いた。

「これ、前と同じで大丈夫なのか?」

「若干前よりも多彩なことが出来るはずだけど基本的には同じね。

色々と試してみて」

それを聞いてウェディは頷くと、再び剣を構えた。

「障壁張つたから、本気だしても問題ないはずだ」

「わかった。いくぞっ！」

そう言つとウェディは素早く踏み込み、ちゅうゞ胸の高さで白く光を発している剣を振り抜いた。

だが、セントは杖で軌道を変えると同時にバックステップで若干後退し紙一重で避ける。

杖に当たつた直後に一瞬青白い光が走つた。

その後もウェディは立て続けに斬撃を繰り出しが、全て防がれていった。

「……見たところは大した問題はないかな」

ウェディの手元を見ていたステイアは、鞄から取り出した手帳に何かメモをしていた。

「ステイアお姉ちゃん、何してるの?」

エミリが興味深そうにステイアのメモを覗き込んでいた。

「ウェディの剣の修正するところをメモしているのよ」

そう言つてエミリの方を向いて微笑んだ。

ちゅうゞルリアもエミリの様子を見ていたので、目があつた。

「あれ、そういうえばステイア眼鏡していたんだね」

「そうよ。でも普段は特に問題無いから掛けてないわ

そう言うとステイアは少しづれた縁の赤い眼鏡を掛け直して、視線を戻した。

「 なんだ～ 」

そう言つてルリアはステイアの邪魔にならないように、ミニリを抱き上げた。

「 大体これくらいでいいかな 」

そう言うと眼鏡を外して、鞄にしまった。

「 はあ～ ！」

氣合いの入つた声と共にウエディが大上段から剣を降り下ろす。先ほどまでと同じようにセントは杖で受けたがその瞬間に今までよりも眩い光が起つた。

「 ！」

目が眩んだため、衝撃に耐えきれずセントは後方に吹き飛んだ。何とか着地しようとしたが、勢いが強すぎて後ろに転がつて倒れた。

「 セント～ ！」

おもわずルリアはセントに駆け寄る。

そして他のメンバーもセントのところに集まつた。

「 いて～ 」

腕をおさえながら、セントは上体を起こした。

「 お兄ちゃん～ 」

ルリアに降ろしてもらつたエミリが飛びついた。

「 心配させて悪かったな 」

そう言つと抱きついているエミリを撫でた。

「 大丈夫っ？ 」

「 ああ。少し腕を打つただけだから大丈夫だよ。それに、手合わせとかするならこれくらいの怪我は付き物だからな 」

「 そつ～ 」

ルリアはそれを聞いて、安堵の表情を浮かべた。

「 まだごめんなさい… 」

「 もう気にすることないさ 」

セントはエミリを抱いたまま立ち上がった。

「それよりももう夕方だし夕飯にしよう」

「おひ、 そうだな」

「……」

「い、 ごめん……」

ウエディは頷いたがステイアに睨まれて、少々縮こまつた。  
そんな様子を見て、セントは面白そうな表情をすると、この場所から出ていった。

「あつ、 待つてよ～」

ルリアも慌てて後を追った。

「そういえばあんたの剣、特に問題なかつたから

「わかつた。色々と悪いな」

「あら、別にいいわよ」 そう言つと一人も部屋を後にして、食堂へと向かつていった。

## 第16話 真夜中の疾走

夜も更けて日付が変わろうとする頃、セントは一人ぼんやりと窓の外を眺めていた。

既にルリアはベッドに潜つていて、エミリも一緒に眠つている。一応、エミリはルリアの親戚ということになっているのだが、一緒にいる時間が短いわりにとてもよく懐いていて、周りから見たら姉妹としか見えなかつた。

「……まあ、俺も似たようなものか」

そんなことを思つていたセントは、苦笑いを浮かべた。

事実、一ヶ月くらい前までセントもルリアとは全く繋がりは無かつたのである。

「…………」

再びセントは外を眺めた。  
暫くするとおもむりに立ち上がり、ドアノブに手を掛けて部屋から出ていった。

カタン

「ほえ？」

ちょうど、ドアが閉まる音にベッドに潜り込んでいたエミリが顔を出した。

（お兄ちゃん？）

眠そうに目を擦りつつ、セントのベッドへと行つてみるとそこにはセントの姿はなかつた。

「？」

不思議に思つて部屋のあちこちを捜したが、何処にも見当たらなかつた。

部屋の外も確認しようとつたが、時間が時間なので諦めてベッドへと戻る。

だが、ちょうど窓を覗いた時に捜していた人物が見えた。

「お兄ちゃん!」

H//コは、勢い良く窓を開けて叫んだ。

すると下を歩いていたセントはそれに気づいて、振り向いた。

「H//リ?」

H//コは、セントが振り向いたのを見て手をふるとそのまま窓から飛び出した。

「なっ!?」

それを見るや否や、身体が勝手に受け止めようと走った。しかし、H//リは器具用に身体を回転せると、透き通った緑色の翼を出してゆっくりセントの腕の中に降りた。

「……頼むから驚かないでくれ」

「えへへ~」

無邪気に笑うH//コを見て、セントは溜め息をついた。

「はあ……とつあえず寒くないか?」

「うん~」

そうは言つても、今夜は何時もより冷え込んでいて、また寝起きといつこともあつH//リは薄着だったのでセントは着ていたマントを掛けた。

「お兄ちゃんはどうして外に?」

「眠れなくて、気晴らしに散歩しちゃひひひにな。どうせひ起きてしまったみたいだが…」

苦笑いを浮かべながらそう言つと、セントはH//コを撫でた。

「わたしも付いてこ~?」

「別に構わないが……戻らなくても平気なのか?」

「うん~」

H//コは嬉しそうに言つて、顔をセントの胸に押し当てる。

「……まあ仕方ないか」

やつぱりと、セントはゆっくり歩き始める。

学園はほとんどが森に囲まれているせいで、何処へ行くにも森を通りなければならぬのだが、余りにも森が広いため楽に行くこと

が出来る街は、セリー・アしかないのである。

森を歩くだけでも良かつたのだが、あえてそこを田指すこととした。

暫く歩いていると、ぽつぽつと建物の灯りが見えてきた。

「ふう……

セントは立ち止まって一息つくと、空を見上げた。

寮を出てから暫くは木々に覆われて真っ暗だったが、街に近づくにつれて徐々に明るくなり、月明かりだけで充分に見渡すことが出来るほどまで明るくなつた。

因みにエミリはこうと、途中から隣を歩いていたのだが、ふらふらとしていたので再びセントに抱き上げられていた。

この時間帯に起きているのはまだ大変なのだろう。

そう思いつつ、街の中へと歩き始めた。

夜中といつこもあり、通りには人一人見当たらない。

「やつぱりまだ若干冷えるな……」

ずれてしまつたエミリのマントをかけ直しながらせつて言つた。

セントも余り暖かい格好をしていなかつたが、我慢出来ないほど寒くもない。

「さてと、どうするか……」

少々歩きながら考えていたが、すぐに遠くのほうが騒がしいことには気がつき、耳を澄ませる。

すると、その原因が近付いて来るらしく徐々に音や声が大きくなつていつた。

「……戻ったほうが良さそうだな

面倒なことに巻き込まれる前にそう判断したセントは、踵を返し来た道を戻ろうとする。

ドスン！

「ひゃあっ！」

だが、何かが背後からぶつかり悲鳴が聞こえた。

振り返つてみると暗くて良く分からなかつたが、小柄な少女が尻餅をついていた。

「大丈夫か？」

「…………」

さすがに無視できず、セントはそう声をかけて手を差し伸べたが、怯えているのかその手を捕らうとはしなかった。

「まだ近くにいるはずだ。探せ！」

「！？」

だが、先ほどから聞こえていた怒声がまた聞こえると、慌てて立ち上がろうとする。

「つ！」

だがバランスを崩し、セントに寄り掛かるように倒れ、苦しそうな表情をした。

先ほどぶつかった時に足を挫いてしまったようだ。

それでも痛む足を我慢して、無理に立ち上がり逃げようとしていた。その様子を見たセントは、ヒミツにかけていたマントを自分にぐるりつけ、ずり落ちないようにすると少女を抱き上げた。

「ちょ、ちょっと！？」

突然の行動に驚いて、思わず声を上げた。

「足挫いたんじゃ、逃げきれないだろ？」

「…………」

降ろせと言わんばかりに抵抗していたが、それを聞いて腑に落ちないものもあつたが、セントが言つたように走ることが困難なため、渋々従うこととした。

「とりあえずここから離れるからな」

そう言つと少女の足に負担が掛からぬよう静かに走り始めた。

「いたぞ！」

だが、近くの路地裏に入る前に見つかってしまい、追つ手が来る。

「見つかったか…」

セントは、走る速度を上げて記憶と勘を頼りに道を駆け抜けた。それでも少女を抱き上げているというハンデもあり、追つ手との差が徐々に縮まつてきていた。

（やばいな…）

不安そうな目で見つめる少女に、セントは大丈夫だと視線で言った  
が内心は焦っていた。

このままでは、追いつかれてしまうのだが良い打開策が見つからな  
いのだ。

追っ手と戦うにしても相手がどのくらいの人数なのか不明である。  
さらに、こちらは少女を庇いながら戦わなければならぬため、移  
動しながらの攻撃が出来ない。

よつて、戦闘には多少自信はあつたが却下となつた。  
（なら、あれをやつてみるか…）

そう決めると、二人並ぶと通れないような狭い道に入る。

「あ…」

少女は前を見て、思わず声を漏らした。

不運にも道はだいぶ奥に入った所で行き止まりとなつっていたのだが、  
セントはそれを狙つていた。

「しつかり掘まれ！」

そう叫ぶと、片手を器用に掲げて杖を取り出し地面に突き立てた。  
すると、自分の足下から一本の水柱が勢い良く上がり、セントらも  
一緒に上がって行く。

「ひやあああ！」

「ふえ！？」

あまりの衝撃に少女は慌てて力を込めて、落とされないよう日に掘ま  
つた。

また、ずっと寝ていたエミリも驚いて目を覚ました。

「くつ…」

何とか倒れぬように水柱の上でバランスを保ち、充分な高さまで行  
くと屋根に飛び移つた。

そして安全な中ほどまで歩いた所で水柱が跡形もなく消えた。  
「逃がしたか」

行き止まりの壁を見て、追っ手の一人がそう言つた。

「しょうがないが撤退だ。一度出直すぞ」

その言葉が、屋根の上にまで聞こえてくる。

どうやら難を逃れることができたようだ。

そして、何事も無かつたかのように再び街は夜の静寂に包まれた。

## 第17話 人の暖かさ

「ふうっ」

少女をゆっくりと降ろして一息ついた。

セントは追っ手の姿が完全に見えなくなつてから、少女の容態を診るために、とりあえず寮に入る前にいたルリアの家へと向かったのである。

「どうして……」

「ん？」

少女は警戒しながら部屋を見渡していたが不意に口を開いた。

「……」

だが、セントが聞き返すと再び黙ってしまった。

「お兄ちゃん、ここどこ？」

ここについてから同じ様に部屋のあちこちを見ていたエミリが、興味津々に言った。

「ここは、ルリアが今の場所に移る前に住んでいた所だ」

「そうなんだあ」

エミリが再び部屋の探索を始めたのを見ると、セントは再び少女に目を向けた。

「確かに足挫いたんだよな？」

その言葉に少女が小さく頷いた。

診てみると、足首の辺りがすぐ分かるくらい青く腫れていた。

「これは酷いな……」

そう言って腰に付けていた袋を取ると、中を探し始める。

少女が、不思議そうに見ているのを背に袋から包帯と、小瓶を取り出した。

「回復魔法はあまり得意じゃないから、多少しめるが我慢してくれ」

そう言って小瓶の中の液体を包帯に数滴たらすと、包帯を巻いた。

小瓶の中身は、王都に住んでいた時に友人に教えてもらい自分で調

呑した薬である。

「つ……」

少女は反射的に顔をしかめたが、我慢出来ないほどでも無いようすで、すぐ元に戻る。

セントは手早く包帯を巻くと、もう一度少女を抱き上げてベッドに寝かせた。

「悪いけど出掛ける。何か作つておくから適当に食べてくれ」「え……？」

その言葉に、俯いていた少女が顔を上げてセントを見た。

「ここにいてもいいの……？」

「ああ。怪我してるので、外に放り出す訳にはいかないだろ？？」

そう言つとセントは少女の頭をポンポンと撫でた。

「それじゃあ、またあとでな」

「あ……」

少女が何か言おうとしていたが、それに気づかずセントは部屋を出ていった。

「H//リ、戻るよ

「はあ~い」

ぱたぱたと駆け寄ってきたH//リを抱き上げて、家を出た。

外はだいぶ明るくなり、若干朝焼けも見え始めていて、この街の一日が始まろうとしていた。

「そういえば、今日試験だったな」

そう言つと夜明け前の街の中、足早に歩いていった。

部屋に一人残された少女は、これまでのことを思い返していた。突然、謎の集団が故郷に襲つてくるまでは平和に暮らしていた。そしてそれが自分を狙つていることに気がついたときは、親友の計らいで村から逃げることが出来たが、もう故郷に戻ることはない。もし戻つたとしても、追い出されてしまうだろうと思つてはいるからである。

それからはずつと逃げながら生活をしていた。

初めの頃は宿屋なども利用していたのだが、何度も彼らに見つかるうちに人を避けるようになり、今では野宿が普通となっていた。

「どうして……」

そのため、何故見ず知らずの少年が自分を助けたのか分からず、少女はふと呟いた。

だが特に返答が戻つてくるわけもなく、再び沈黙が支配した。

「…………ううつ……」

不意に感情が込み上げてきて、嗚咽を漏らす。

そしてとうとう抑えることが出来なくなり、声を上げて泣き始めた。嬉しいのか悲しいのか分からぬが、涙が止まらない。

もう太陽も見え始めて外が明るくなつていくなか、少女の泣き声だけが部屋中に響いていた。

「くしゅんっ！」

「あら、風邪でもひいたの？」

だいぶ頬が赤いルリアを見て、ステイアが心配そうに言った。

今朝方、セント達が戻ってきたときはまだルリアは就寝中であった。だが、エミリがベッドから抜け出したときに毛布がずれ落ちてしまい、更に窓も開いたままだった。

その結果、体調を崩してしまったようだ。

「たぶん……ちょっとだるいんだよね…」

若干ふらふらとしているルリアが辛そうに言った。

「今日の試験休んだ方がいいんじゃないの？」

「だいじょぶ……今日は休めないから…」

今回は実技試験なのだが、これから始まる授業などに大きく関わつてくる。

当然良い結果が残せれば、選択できる授業の幅が増え、より高度な内容のものも取ることができる。

故に欠席してしまつと授業を選ぶにあたつて、制限が多くなつてしまつ。

さらに各グループごとに評価がつけられるので、実際よりもだいぶ低い評価となり周りにも影響を及ぼす。

あくまでも個人ごとではないので、出席さえしてしまえば余程のことがない限り、ある程度の評価は取ることができる。

「でも…」

ステイアもそれはわかつていたのだが、今のルリアの状態ではどう

も大丈夫じゃないように思えた。

もし、今回の試験が入学試験のように実戦形式ということになれば、恐らく途中でまともに動けなくなるかもしれない。

何よりも、ルリアの体調が余計悪化することを危惧していたのである。

「みんなに迷惑かけられないし、それにセントは自分の好きにすればいいと言つてくれたから……」

だがルリアのその言葉には、辛そうだがとても強い決意のようなものが感じられた。

ステイアはルリアに無理させたくなかつたが、強制したくもなかつたために悩んだ。

「ステイア？」

突然黙り込んでしまつた彼女にルリアが不思議に思つて声をかける。

「……しようがないわね」

「？」

「無理だけはしないでね」

結局、ルリアの意志を尊重するという形で引き下がつたステイアはそう言つた。

普段よりも随分柔らかい声だつた。

「うん……ありがと……」

先ほどのステイアの言葉に安堵していると、ウエーディが歩いてきた。

「おはよお……」

「おは、おはよ」

ウエーディは、何気なく挨拶を交わしてから、ルリアの様子に気がついた。

「つてやけにだるそうに見えるけど大丈夫か？」

ウエーディがそう聞いたとき、普段とは何か違うステイアの視線を感じた。

過去にも何度かあり、それはいつも放つておいてほしい時などにあつた。

「平気……」

「……そつか。まあ無理だけはするなよ」

結局、ウエーディはあまり言及しないことにした。

「そういえば、セントはどうしたんだ?」

「ん……今エリコちゃんを連れて、薬を貰いに行っているよ……」

「やつか。なら、先に食堂に行くわよ」

そう言ってステイアは、ルリアの手をとる。

「え……でも、セントが……」

「いいの。きっと食堂まで来てくれるわよ

「う、うん……」

「それに体調を良くするなら沢山食べてもらわなことね

「そんなあ……」

あまり食欲が無かったので、スープだけで済まさうとしていたがそれは叶わないようだ。

「……一応、あれはあれなりに心配しているんだよな?」

半ば引き摺るような形で、ルリアを引っ張りながら食堂へと歩いていくステイアを見ていたウエディが、そつそつと後を追つていった。

## 第18話 再びの森

「はあっ！」

氣合いの入った声と共に振られた剣は、飛びかかってきた狼を一つに切り裂いた。

「白き輝きよ、我が意に従い敵を貫け！…ライトーンング！」

ウエディの目の前に迫った獣を白く輝く矢が貫き、獣もろとも跡形もなく消え去った。

「ふう…」

ステイアは一息ついて他に何もなことを確認すると、ウエディを殴つた。

「つてえ！何するんだよ！」

「ちゃんと周りを見ながら戦いなさいよ！今のも危なかつたじゃないの」「みんながフォローしてくれるから、今みたいにしているんだよ。このほうが俺も楽だしな」

「はあ…」

ステイアはウエディの考えに呆れて、ため息をついた。

「もしあなたが怪我したりしたら、皆心配するでしょ？特にルリアが」

「……今度から気をつけ」

「よろしい」

ウエディが不服そうに言ったのを見て、ステイアはそつそつと頷いた。

「もう…ステイアもウエディも速すぎなよ…」

ちょうど、ルリアが若干息を切らしながら小走りで向かってきた。

「あら、ごめんなさい。つい…」

最初こそゆっくり歩いていたが、いつの間にか普段のペースで歩いてしまつたステイアは、素直に頭を下めた。

「……しても、こんな広い森の中で目印なんて見つかるのか…」

ルリアのやや後ろから、セントの姿も見えた。

彼は、ルリアの代わりにエミリを抱き上げて歩いて歩いていた。

「見つけやすいものだとは言っていたけど、普通に考えて怪しきよ。どれだけ広いと思っているのよ」

今回の試験というものは、セフィルが言っていたように森で行われ、何処かにある目印を取つてくるというものだ。

ちなみにルリアは、セントが貰つてきた薬を服用し、今では快調とまではいかないものの、だいぶ楽になつていた。

「きっと見つけられるよう何か仕掛けでもあるんじゃない？」

「んー…」

「？」

皆が悩み始めたなか、エミリだけがよく分かつていかないのか、不思議そうな顔をして見ていた。

「とにかく、先進もうぜ。結局は見つかるんだろ？」  
検討がつかないと自分でも分かつてていたため、すぐに考えるのを諦めたウエディがそう言った。

「そうね」

ステイアもウエディの言葉に同意し、あとの一人も頷いた。

「ねえ、いくらなんでも多くない?」

「たしかにそうかもな…」

再び歩き始めてからだいぶ経つたのだが、何故だか立て続けに獣やらが襲い掛かってきた。

ステイアも、いい加減嫌になつてているのか若干声が刺々しくなつていて、歩く速度もそれとなく速くなつていた。

ウェディもそれに気がついているのか、同意はしたものの、少々縮こまつて歩いている。

「はあ、はあ…」

「お姉ちゃん、大丈夫?」

「うん…」

だが、問題はルリアだ。

エミリが心配そうにルリアの顔を覗いている。

ルリアは薬の効果が薄れてきたのか、顔が先ほどよりも赤くなつていて、辛そうだった。

足元もしつかりせずふらふらとしていて、今にも倒れそうである。

「!、大丈夫か?」

「うん…平氣…」

ステイアたちの少し後ろを歩いていたセントが、遅れていることこゝがついて駆け寄る。

ルリアは前の二人に追い着こうと、走り始めたがすぐに足がもつれ、セントに支えられていた。

もし、彼がいなければ転んでいただろ。

「「ごめん……」

「なに、気にするなよ」

セントは、ルリアを何度か撫でるとエミリを呼んだ。

「エミリ、前の二人に止まるよつ言ってくれないか?」

「はあーい」

エミリは、返事をすると翼を一、三度動かして先を行く二人の元へと向かっていった。

「さて、まだ歩けるか?」

「うん……たぶん……」

そう言うと、セントに支えられながら歩き始めた。

「ルリア、大丈夫!?」

先を歩いていたステイアが、慌てた様子で戻ってきた。

「ごめんなさい、気づいてあげられなくて……」

そして、ルリアに頭を下げた。

若干ステイアの肩が震えていることにルリアは気がついた。

「ううん……心配してくれてありがとう……」

ルリアはステイアの身体を優しく抱き締める。

「おーい、大丈夫か?」

「!」

少しして、先の方からウェディの声がするとステイアの身体がびくつと震え、一瞬にしてルリアから離れた。

「ス、ステイア……?」

突然の動きにルリアは戸惑つて、ステイアに呼び掛けたが反応はない。

「あれ?泣いてるのか?」

そして、エミリを連れてその場に現れたウェディが、ステイアを顔を見て言った。

「ドスツ!」

「ばかあつ!」

その結果、脇腹に蹴りが入り、余りの痛みにウェディはその場に蹲

る。

泣いてなんかいないわよ！」

「お、おこ...」

更に追い討ちをいれようとするステイアを、慌ててセントは止めた  
入る。

一スティア……ちよこと落ち着いて……？」

めんなさしいよ」と取り乱したわ

そんなこんなで「二元」が動かなくなってしまったのです。それで復するまで休憩にすることにした。

卷之三

ステイアと戯れていたミニリがその声に気がついて、駆け寄ってきた。

「いってみたが、どうも、おまかせにならなかった」

「あんたが起きたまで待つてたのよ」

エミリの言葉をステイアが継いだ。

咄嗟にウェーディが頭を下づた

をした。

「なんで謝ってるの？」

ティアは見ていい。

「まあいいわ、そろそろ出発するわよ」  
それだけ言つと、ルリアの方へ歩いてい

?

エミリは再びよく分からなかつたのか、ウェーディとステイアを交互に見ていた。

「ルリア、気分はどう?」

「ちょっとさつきよりは良くなつたかな……?」

「そう……無理しないでね」

「うん……そういうえば……」

「ドオオオオオオオン!」

「きやあつ……!」

突然爆発音と共に大地が揺れ、バランスを崩したステイアは尻餅をついた。

「大丈夫つ?」

若干動搖しながらも、ルリアは手を差し出す。

「え、ええ……ありがとう」

「おい、大丈夫か!」

すぐに戸惑いを隠せないようだ。

「うん……でも、今のは……」

「だいぶ近い場所で爆発が起きたんだと思つけど……」

「お姉ちゃん……」

先ほどまで、辺りをうかがつていたエミリが泣きそうな顔をして、ルリアのマントの裾を引っ張つていたことに気がつく。

「……」

ルリアは、先ほどの音に驚いたのだと思い、エミリを抱き上げる。

「どうしたの?」

「お兄ちゃんが……」

「セントがどうかしたの?」

なるべく落ち着かせよつとするがやはり子供であるため、ぎゅつと抱きつくだけだった。

「ねえ、セントは?」

ステイアが、セントだけがいないことにはづき、ウエディに問いかける。

「あれ、一緒にいなかつたのか?」

「……」

今まで寝ていたウェーディは当然分からぬようだが、ルリアはエミリの言いたいことに気がついた。

（急がなきや……）

「さっきまではいたはずなんだけど……って、、ちょっとルリア！？」

突然走り出したルリアの後を、ステイアとウェーディは慌てて追う。だが、ルリアは病人のうえ森の中であるにもかかわらず、風のような軽快な走りをしている。

その為、すぐに後ろの一人が見えなくなつた。

それでも、後ろは気にせずただひたすらに走り続ける。

ドオオオオン！！

先ほどよりも大きい爆音が響き、連続して音が聞こえるようになつた。

（どうか間に合つて……）

心の奥でそう願いつつ、木々の間を駆け抜けていった。

## 第19話 再びの戦い

「くそつ…」

セントは立ち上がった。

彼の身体には所々傷が出来ていて、満足に動くことは難しかった。セントは、思うことがあり皆には黙つて抜け出した。

それは入学試験以来、一度森に来たルリアが襲撃されたため、ずっと警戒をしていた。

そして、セントが読んでいた通り襲撃に遭い、今の状態に至る。入学試験では、魔術を使う者何人かの集団だったのだが、今回は剣を得物とする者一人だけだつた。

だが、男は魔術も心得ているようで、それが厄介だつた。

セントは槍をつかつたことがあるとはい、本来接近戦は得意ではない。

お互ひ得て不得手があり、始めのうちはほぼ互角な戦いをしていた。だが、接近戦が得意の相手が有利となりセントは徐々に傷を負つていき、今の状況となつてゐる。

「おらあつ！」

「つ！」

ガキイン！

再び距離を詰め、上段から振り下ろされた剣を杖で受け止める。

セントの杖は、彼自身の魔力で構成されていて滅多なことがなれば、折れたりすることはない。

「はつ！」

彼は、上手く剣を受け流すとすぐに杖を振るつ。

杖自体は相手を捉えないが、水の刃が至近距離で襲うが、特に表情も変えずに身体を捻つて回避した。

「フレームスピア！」

「ゴオツ！」

更に追撃を試みるが、相手が回避しながら唱えた魔術によりに、進路を塞がれ一度後退する。

「逃がすかあ！」

だが、着地と同時にすぐ距離を詰め、後退に合わせて男が再び剣を一閃させた。

セントは咄嗟に反応し、間合いから外れようとバックステップをするが、剣先が着ていたマントをかすめ、端が少し斬れた。

「チツ、また外したか」

恨めしそうに舌打ちをして、一度セントを睨むと再び剣を構えた。セントは、こうなることは分かつていて懸命に打開策を練っていたが、中々有効な策が浮かび上がらない。

策が浮かび上がらない。（そろそろ限界か…）

内心焦りつつも決して顔には出さずに、相手を待ち構える。再び距離を詰めて来たのに対し、水の刃で牽制をして時間を稼ぐ。

「小賢しい真似を！」

痺れを切らした男がそう言つと剣を大きく振り、飛んできた刃を一掃させた。

だが、セントは特に驚くこともなく後ろに下がると詠唱を始めた。

「流れゆく水よ、その強き力で全てを押し流せ！…アクアフロート！」

詠唱が終わると同時に彼の前から大量の水が溢れだし、至近距離まで迫つっていた男を押し流した。

そして間を開けず再び詠唱を始める。

「水よ、視界を閉ざす霧となれ……ルミナスマスト！」

男が体勢を立て直すが、既にセントの詠唱が終わっているために、下手に近づくことが出来ず身構えていると、突如霧が出始めた。霧はすぐに広がっていき、瞬く間に何も見えなくなつた。

「余計なことを…」

男は、すぐに魔術だと分かつたようだが、特に捜すわけでもなく正面を向いたままだつた。

「……まあいい」

そつ咳くと踵を返しだしてしまった。

「……っはあ」

男が居なくなつてから、先ほどの場所にセントが現れ、彼は大きく息を吐くとその場に膝を着く。

彼は先ほど霧の魔術以外にもうひとつ発動させていたのである。それは自身の身体を見えなくする魔術である。

仮に霧を使って不意を突いたとしても勝てないと判断したために、相手をやり過ごそうとしたのだ。

「やはりキツかつたな……」

セントは苦笑いを浮かべてそつ咳くと、杖に寄りかかりながら立ち上がるうとした。

一度に慣れていないほどの多くの魔力を使用してしまつと、一時的な欠乏状態になり、身体に影響ができる。

人によつて若干違いがあるが、脱力感や疲労感に襲われるといった様なものがほとんどだ。

セントが詠唱した魔術は、アレンジがされていて、より持続するようにしているために両方とも結構な量の魔力を使う。

同時に詠唱したが故、多くの魔力を消費することとなり、欠乏状態となつた。

「ん……」

セントは先ほどから立ち上がるうとしていたが、どうしても力が入らず、諦めて仰向けになつた。

「……セ……ト……」

しばらくそのままでいると、不意に声が聴こえたような気がした。彼はなんとか身体を起こして、辺りを見渡したが、未だに霧が残つてゐるため、遠くまで見ることが出来ない。

「そつか……解除……」

そつ咳くと急激に霧が薄れていき、とうとう元の森の中の景色へと戻つた。

「セントっ！」

そしてそこに現れた景色の中に、駆け寄つてくる仲間達の姿があつた。

「……つと、悪いな。変な心配させてな」

事情を話し終えたセントは、すまなさをいつて言つた。

「良かつた……」

ルリアは、先ほどからセントに顔を押し付けて、涙ぐんだ声で繰り返していた。

「ホントよもう、いきなり爆発音がするわ、セントがいないと思つたら今度はルリアとエミリーがいなくなっちゃうわ、大変だったのよ」  
彼の肩を叩いて、ステイアが言つた。

「お、おい、その辺にしておけよ」

彼女が何度も何度も叩いていたために、見かねたウェーディが止めさせようと声をかけると、ステイアは手を下ろした。

「……もう大丈夫……？」

ようやく落ち着いたルリアだが、心配そうにセントの顔を覗く。

「ああ。完全とまではいかないが、もうだいぶ動けるだろ?」

そう言つと、セントは立ち上がり、ルリアと同じように彼にしがみついていたエミリを抱き上げた。

「それじゃあ、行こ!」

セントの言葉に皆が頷くと、風の抜ける森の中を再び歩き始めた。

カサ……

セント達が見えなくなつてから、先ほど戦つていた場所に男が戻つてきた。

先ほどは、片手でも扱えるほどの大さの剣を使用していたが、今はそれは何処にも見当たらない。

そして、代わりに自分の身長近くまである大振りな剣　　いわゆる大剣を背負つていた。

「おや……ラス、どうしたのですか」

「……」

突然、誰かの声が聞こえて反射的に背負つて居る大剣の柄に手を掛ける

だが、声は聞いたことのあるものだつたらしく、すぐにその手を下ろすと声のした方を向いた。

「ファイカ…」

ラスと呼ばれた男がそう言つと、前の木の陰から別の男が現れた。ファイと呼ばれた彼は、何か人を惹き付けるような雰囲気をもち、ラスとは違ひ華奢な身体つきをしている。

「たまたま通り掛かつたんで戦いを見せてもらいましたよ」

「ここまで言つと、ラスへと歩み寄り始めた。

「あなたは戦いになると熱くなりすぎです。相手は子供なんですよ？」

「まあ……自分で分かつてんんだけど、どうしても癖でなあ……」

ファイの手厳しい言葉に、ラスは苦笑いを浮かべて空を仰いだ。

「……まあいいか。それより、どうだつたか？」

主語の無い突然の質問に、ファイは呆れたように笑つた。

「ラス、ちゃんと内容は言わないと伝わりませんよ」

「いいじゃないかよ。何時ものことなんだし、あんたなら分かつてるんだろう？」

「それもそうですね」

「……」

なら言ひなよ、と突つ込みたかったが、余計なことを言えれば的にされると思つていたラスは、口には出さなかつた。

「……なかなかいい線までいつてていると思いますよ。あの杖といい、二重詠唱といい、中々の技術です。何より、あなたと互角に戦えたのですから」

その言葉を聞いて、ラスは首を傾げた。

自分と互角に戦えたところで大したこと無い、そう戦えて当然だと思つていた彼は、どうやらファイの評価を信じられないようだ。

「やうなのか？」

「ええ。…まあ、あなたは自分を低く見すぎです。本来ならこの国で五折の指に入つてもおかしくない…」静かだがいつになく力のある声にラスは目を見開いた。

「お、おい…」

「…すみません。…ともかく、あの子は期待できますよ」ファイは、自分が熱くなつていたことに気がつき、一度謝ると自分の意見をまとめた。

「そうか。ありがとな」

「いえ、私も暇潰しにはなりました。…では」そう言うとファイは、一度微笑みを浮かべて頭を下げる。森の奥へと消えていった。

「…とりあえず、戻るか」

それを見送ったラスはそのままくどく腰に着いていたペンドントに描かれた魔方陣に触れる。

ヒュン

途端にペンドントが光を発したかと思つと、既にラスの姿は無かつた。

森は三度静寂に包まれた。

## 第20話 不思議な場所

「これば…………？」

しばらく歩くと、一行の前に高くそびえる絶壁とそれに空いた洞穴が姿を現した。

「うわ…すげえでかいなあ」

「そうね…」

洞窟の奥は闇に包まれていて見ることが出来ないが、普通に走り回れそうなくらいの広さである。

「……」

皆が思い思いの感想を抱いているなか、セントは辺りを見渡していった。

「セント、どうしたの？」

それに気がついたルリアが、彼に問い合わせる。

「……どうやら、この崖はずっと続いているみたいだ」

「そうなの？」

「ああ、おそらくな」

エミリが、彼らの言葉を聞いて前を見た。

だが、木々が生い茂つていて、奥まで続いているところは分からなかつた。

「お兄ちゃん」

「ん？」

「わたし、見てくるねー！」

「え？」

そう言つと、エミリは翼を広げ、三度はばたく。

「……」

ルリアが、理解したときは、もう宙くと舞い上がつていた。

「エミリちゃんー？」

慌てて掴まえようと手を伸ばしたが、あと少しのところで空を切つ

た。

「大丈夫だよ、お姉ちゃん」

エミコはそう言つと、大空田指して昇つていつた。

「…………」

手を伸ばしたルリアも、エミコを抱いていたセントも畠然とした様子で、動かずに見送つた。

「…まあ、大丈夫なんぢやないか？」

先ほど、ルリアが叫んだときに気がついたウエディが言つ。

「でも…………」

「とにかく、ここ待ちましょ。変に動いたら、それこそはぐれてしまうわ」

「うん…………」

ステイアの説得に、ルリアは渋々納得した。

「でも、どうするのか？」

彼女のことばはステイアに任せて、ウエディがセントに話し掛ける。

「…………」

「セント？」

「…………ん？」

彼は、何か考えていたようで一回呼び掛けてやつと気がついた。

「珍しいな。セントがぼーつとしてるなんて」

「ああ…悪いな」

ウエディがセントの様子を見て、不思議そうに言つた。

「まあ、いいや。で、どうするんだ？」

だが、ウエディはあまり気にすること無く、本題を切り出す。

「まあ、色々と考えてはいるがエミリが戻ってきた時に決める」

そう言つと空を見上げた。

ちよつどその頃、エミリは木々が足下になる高さまで昇っていた。  
上には、雲と太陽しかない。

陽が差し込んでいるわりには、枝が細かく絡まつていて、ここに出来るまで少々時間がかかった。

「ん~…」

キヨロキヨロと辺りを見渡すが、前に見えている崖はずっと縦にも横にも延びている。

セントの言つた通りだ。

だが、それよりも彼女はこの崖が何処まで続いているのか気になり、更に上を手指す。

「んしょ…」

上へ昇ることに風が強くなり、何度も飛ばされそうになりながらも何とか頂上を手指す。

そして、下に広がる森が小さくなり始めた頃、ようやく崖の上へと辿り着いた。

「わあ…」

そこに広がる風景にエミリは目を見開いた。

小さな民家がひつそりと建つていて、

エミリは、着地すると家へと近づいていき前まで来た。

そして、古ぼけた木製のドアの冷たい感触を我慢しつつ耳を当てた。中からは誰もいないようで音ひとつしない。

彼女は手を掛けてドアを引こうとしたが、壊れているのか微塵も動

かない。

「ほえ？」

押しても引いてもびくともしない。

「むー……」

結局、ドアから入ることを諦め、他に入ることが出来そうな場所を探し始める。

反対側にまわったところで小さな丸窓を見つけた。

そこから中を覗くと、木のテーブルが置いてあるのが見えたが、他には何も見当たらない。

この窓に取つ手の様なものがあつたが、何かに引っ掛けたてこれも開かなかつた。

エミリは民家を後にして、辺りを見渡す。

下で崖を見たときよりも大分狭いこの空間に、短い草や花があちらこちらに生えている。

更に強く吹き付けていた風は、今では嘘のように優しく駆け抜けていた。

エミリはその中をゆっくりと歩き、先ほど出てきた方の崖に立つた。そして、一度だけ名残惜しそうに振り返ると宙へと身を任せた。空間が違うかのように、風が再び吹き付ける中、昇るときと違い、エミリの身体はどんどん速度を上げていく。

地上に大体近づいたところで、翼を動かし減速を始めた。

ガサササツバキバキツ

「！」

突然不穏な音が聞こえ、皆咄嗟に身構えた。

「！、エミリちゃん！？」

そして、音の源を見つけようと辺りを見渡していたルリアが叫ぶと、駆け出す。

「あ、お姉ちゃん！」

エミリは木々の枝に引っ掛けた状態でルリアの姿を見つけると、手を振った。

「大丈夫！？」

そんな彼女を見たルリアは、先ほどの音のこともあって相当心配しているのである。「顔が少し青い。

ほかの三人もエミリの姿に唖然として固まっていた。

「うん！」

バキッ

「！？」

エミリがルリアの言葉に頷いた時、彼女を支えていた枝が折れ、再び落下する。

「うつらああ！」

突然のことに対する動けなかつた中、ウェディが咄嗟に反応し素晴らしいスタートを切ると、数歩助走をつけて飛び込んだ。

トスン

「ぐえつ」

だが、余りに必死で飛び込んだため、目測を誤り彼の背中にエミリが落ちてきた。

「ちょっと、大丈夫！？」

「うん！ちょっとびっくりしたけど…！」

エミリが答えていた、突然後ろから腕が絡んできた。

「お姉ちゃん？」

どうやらルリアのものらしいその腕は、若干震えている。

「もう…ほんとに…」

辛うじて聞き取れるくらい小さな声で呟いた。

だが、その直後腕の力が抜けてルリアは突つ伏してしまった。

「ルリア！？」

慌ててステイアが抱き起こす。

だが、ルリアは気を失っているらしく目を覚まさなかつた。

ガサツ

「お兄ちゃん、後ろ！」

ガツ…！

エミリに言われるがまま振り向くと同時に杖を振るうと、熊のよつなものの爪とぶつかり合つた。

だが、圧倒的な力の差でセントは吹き飛ばされる。

「ぐつ……！」

吹き飛ぶ先にあつた木に背中を強く打ち、一瞬呼吸が止まる。

「セント！」

ステイアは思わず叫んだが、ルリアが目を覚まさないでいるために駆け寄ることができない。

獣はステイアの声に気づき、次の獲物を一番近い位置にいたステイア達と決め、向かつていった。

「はあっ！」

ウェディが彼女の前に出ると、矢が放たれたかのように駆け出す。彼は元々運動能力が高いうえ、ステイアが彼の剣に能力上昇の補助効果も付けたため、時折人間離れした動きをすることもあるのだ。ザツ！

一瞬で獣との距離を詰めると、横薙ぎに剣を一閃させる。だが、堅い皮となつているらしいその体に大した傷を負わすことは出来なかつた。

そのため、相手も怯むこと無く爪を降り下ろした。

先の攻撃で背を向けていたウェディはすぐに回避行動をとる。直後、その場所には深々と爪跡が残つた。

「大丈夫か？」

ウェディは、視線を獣から外さずセントの側まで行くと声をかける。

「ああ……もう平氣だ」

セントはそう言つと杖を構えた。

グウオオオオ！

獣は咆哮をあげ、二人に襲いかかる。

「ウェディ、フォローする」

「了解つ！」

そう言つと第一撃を左右に別れて避ける。

右に避けたウェーディは宙で反転し獣の方を向き、着地と同時に地を蹴つた。

「おーりあーつ！」

氣合の入った声と共に雑ぎ払つた。

ザンシ！

先ほどと同じところを捕らえた剣は、今度はしつかりと裂いた。その痛みで相手は仰け反る。

「アクアバイト！」

「ライトニング！」

先ほど回避してから詠唱を始めていたセントと、いつの間にか詠唱をしていたステイアの魔術が獣を襲つた。

ギャワアアア！

「ウェーディ！」

「おーつ！」

光の矢と水の槍によつて深手を負いながらも、未だ倒れない獣にウェーディが剣を向けた。

すると彼の剣が僅かに光だす。

「はあーつ！」

三度距離を詰めると、次々と斬撃を繰り出す。

「終わりだあー！」

そして、大きく左に振りかぶると斜め上方に向に引き抜いた。グアアアア…

獣は断末魔を上げ、他と同じ様に光となつて消えた。

「ふう…」

ウェーディは剣を一度振ると鞘へと閉まつた。

「やはりすごいな

先ほどの動きを見て、セントが感心した様子で言つた。

「俺にはこれくらいしかないからな」

「ほんとよね。魔術も勉強もろくに出来ないんだから」

「それは言い過ぎだろ…」

そんな会話をしつつ、三人はルリアとエミリの元へと戻った。

「あつ、セント！」

「ルリア、もう大丈夫なの？」

「うん。『めんなさい…』」

どうやら大事には至らなかつたようで、ルリアは直ぐに目を覚ました。

「気にすることないわ」

「うん…」

げんなりとしてしまつたルリアを何とか元気付けようとステイアは試みる。

「もつと頼つていいのよ。皆あなたの具合が悪くても、來ることに同意したんだし、何より仲間なんだから…」

「うん……ありがとう…」

少しずつ、笑顔が戻つてきてステイアは一安心した。

「お兄ちゃん！」

「ん、どうした？」

三人が戻つてきてから、辺りを見ていたエミリがセントを呼んだ。

「紙落ちたよー」

「紙？」

エミリの言葉に疑問を持つたセントは、彼女からその紙を受け取つた。それは、カードの様なもので二つ折りにされていて、片面に紋章が書いてあつた。

「これは…」

セントは、中を開くとそこに書いてある文字を読み上げた。

「探し物は…我にあり……？」

その直後、五人の姿が森の中から消えた。

気がつけば、建物が見える場所にいた。

「な、なんだ？」

突然周りの風景が変わり困惑している五人。

「お疲れ様。今回の試験はこれで終了だ」

突然周りの風景が、変わったことで困惑している五人に、顔を知っている人物が声をかけた。

「！、セフィル先生！」

五人の様子を見て、セフィルは不思議そうな顔をした。

「終わりということは…」

「これが、目印なの？」

ウエディとステイアが言ったその言葉にセフィルが頷く。

その後、どうやらまだ戻ってきていない生徒がいるようで彼は幾つか連絡事項を伝えると、再び戻つていった。

「…なんか締まらないね～」

ルリアの口からそう溢れたのをきっかけに皆が笑いだした。

それは呆気なさから来たのか、それとも試験が終わったことへの安

堵からなのが分からなかつたが、笑いを押されんことは出来なかつた。

「あーっ！」

部屋に戻る途中、ステイアが大声を上げた。

「ど、どうしたの！？」

「あの洞窟、何があるのか調べなかつたじやない！」

そう言つてステイアは、何故かウェディを叩き始めた。

それも、本氣で。

「つて、何すんだよ！」

どうやら彼女はあの洞窟に入る気満々でいたらしい。

そのために、やや機嫌が悪くなつていてウェディにハツ当たりをしている。

「煩いわね、早く戻るわよー……それじゃあね。しつかり休みなさいね」

彼女はそう言つと、すぐ歩いていつてしまつた。

「……理不尽な」

短い間に結構な回数殴られたウェーディは、そう呟いた。

「ほんとによく殴られるね……怪我とかしないの？」

ルリアは、蹲つているウェーディを見て少々氣の毒そうに呟いた。

「ああ……このくらいで怪我してたら身体が持たないしな……」

そんな彼の言葉にますます、ルリアはさらに氣の毒に思つた。

「まあいいや。じゃあな、体調しつかり治せよ！」

そう呟うと、ウェーディはステアの後を追つていった。

## 第21話 追われし少女の不安

ギイイ……

ドアが疲れた声を上げながら開いた。

「ん……？」

その音に気がつき、寝ていた人物はゆっくりと目を上げる。

そこにはいつもとは違い、天井が見えた。

横を見ると、人の足が視界に入った。

「！？」

ドアが音をたてたのなら、誰かが開けたのはほぼ当然である。慌てて逃げようとしたが、足の痛みによりそれは叶わなかった。

「お、おい……」

だが、聞き覚えのある声に恐る恐る振り返つて見ると、そこには暗闇のなかでも輝くような銀髪をした少年の姿があった。

「どうかしたのか？」

少年、もといセントは少女の行動に困惑を覚え、心配そうに声を掛けた。

少女は、ほつとしたような表情を見せるふるとふると首を横に振つた。

「……そういえば、名前言つてなかつたな。俺はセント、昨日はすまなかつたな」

その言葉に少女は再び首をふる。

「ありがとう……」

そして、消えてしまつよつた小さな声でさつと言つた。

「ん？」

「……うう……」

「！？」

だが、少女が突然泣き出してしまつたセントは驚いた。

「うわあああん……」

少女は、戸惑つているセントに顔を押し当て、声を上げた。

「な、泣くなよ…」

セントは、何とか声を掛けて落ち着かせようとする。だが、そんな努力も虚しく少女が落ち着くまで、數十分を要したのであった。

「……とにかくとなの…」

ようやく落ち着かせることができたセントは、事情を彼女から聞いた。

彼女はナタリアと名乗り、この国とは別の国の出身ということだ。セント達のいる大陸には、ラドヴィス、リティナ、トルポリックの三国がそれぞれ治めていて、彼女はリティナから来たということらしい。

そして、追われているということは何となく分かっていたが、誰に追われているかまでは分からぬと言つた。

「そうか……大変だつたな」

「うう……」

再び泣き出しそうになつたナタリアを宥めつつセントには、若干違えど似たような立場にいたことがあつたために、多少なりとも気持ちが分かつた。

「原因とかも心当たりは無いんだよな？」

その言葉にナタリアは小さく頷いた。

「少し探つてみるか……」

「……？」

セントの言葉を聞き取ることが出来ず、彼女は彼を見た。

「なに、じつちの話？」

「あう……」

だが、セントには撫でられるだけで、はぐらかされてしまった。そういうえば、ナタリアには昨日から気になつていたことがあつた。何故かこの少年に撫でられるのは嫌では無いのである。

ずっと人目を避けてきたのだから、触られることなんて絶対に受け入れることは出来ない、と思っていた。

だが、それとは別に何となく、くすぐつたく思つのも事実で、ナタリアは少し複雑な表情をしていた。

セントはそんな彼女を見て、微笑むと手を離す。

そして、ナタリアの足に巻かれている包帯に手を伸ばし、ゆっくりとほどいていく。

「まだ足は痛むか？」

「ううん……」

彼女は首を横に振つたが、セントの手が腫れがあつとじりに触れ、刺すような痛みが走つた。

「うとと、悪いな……」

そのことに気がついたセントがすまなさうに言つた。

「ふむ……腫れは治まつていいみたいだが……」

足の腫れは、昨夜は酷かつたが今ではほとんど無くなつていた。

だが、彼女の様子から見るとまだ痛むよつて、暫くは安静が必要のようである。

「……あの……」

「ん？」

そう考へてみると、ナタリアが再び声を掛けってきた。

「その……出ていった方がいい……の？」

「え？」

セントは一瞬、耳を疑った。

「どうこうことだ？」

「え？」

思わず聞き返すと、ナタリアは再び黙り込んでしまった。

だが、若干俯き気味である彼女の表情は暗いものだった。

セントは改めて理由を考え始めたが、先ほど彼女が経緯を離したこともあり、幾つか理由は浮かび上がつても決定的なものは無かつた。

「んと……迷惑かと思つて……」

「そうこうことか」

「うん……」

どうやら、ナタリアは自分によつてセントも狙われるかもしれないことを危惧して、言つたようだつた。

「……確かに狙われるかもしれない」

その言葉にナタリアは、さらに表情を暗くした。

「だが……」

そう言つとセントは、再びナタリアの頭に手を置いた。

「見捨てるようなことするの嫌だからな。足が治つた後も、気が済むまでここにいればいい。出でいけとは言わないからや」

彼女には、それだけで充分だつた。

全く知らない土地で、独り闇に紛れながら生活をしていた彼女には、頼る人が欲しかつたのだ。

そのことにこそ気づいていないが、それでもひどく感激し、目に涙を溜めながらも何とか声を出すことだけは堪えた。

「それに……」

そう言つたセントの手が、僅かながら震えているのに気がつく。

「…………」

「…？」

さらに突然セントが黙ってしまい、暫くしても彼は黙つたままでいたため、ナタリアは不思議に思い顔をあげた。涙目なのに加え、少々上田遣い気味になつてしまつていてが気にしない。

「どうしたの…？」

恐る恐る声を掛けると、セントはピクリと反応して彼女を見た。

「…いや、なんでもない」

そう言うとセントは彼女から手を離す。

「…じゃあ、悪いがまた出掛けてくる」

そして、一言だけ言い残すと部屋から出ていった。

「あ……」

セントが部屋から出ていくとき、ナタリアには彼の頬に一筋の跡があり、それが光ったような気がした。

また、先ほどのこともあり、彼女にはどうしても、何でもないようには思えない。

（どうしたんだろう…）

セントが黙り込んだ時、彼は過去でも振り返っているのか遠い目をしていた。

その過去は彼にとつて何らかの因縁があり、それは自分のせいで思い出された、と彼女には予測できた。

（やつぱり……）

そして、ナタリアの頭の中ではここを去るといつ考えが大きくなる。自分としては、彼の厚意に甘えたいが迷惑を掛けたくない。何より、拒絶されるのが怖いのだ。

それでも先ほどの考えを決意するには至らず、暫く悩み続けたが、結局、結論が出ないまま意識は闇へと落ちたのであった。

## 第22話 水面下の組織

「はあ……あいつがか」

夕日が差し込んでくる部屋で、壁に寄りかかっている人物が、黒髪の少年の報告を聞いている、そう漏らした。

「うん。見た限りだと、元気そつだつたよ」

「そうか。まあそのうち、あんたに連絡役頼むかもな」

その言葉に、少年が小さく頷いたのを見ると、一度咳払いをする。「さて、それより新しい依頼が来ている。それも名指しで、だ」

「そりなの？」

普段とは違うことに少年は首を傾げた。

「ああ。それに、詳しい内容は追いつて話すと言ひつけだ」

「ホント? …なんか変な話だね」

「まあな……とにかく、この場所に行つてくれ」

そう言つと、少年に一枚の紙切れを渡した。

少年は、まじまじと紙を見ると再び顔を上げた。

「わかった。じゃあ、またね」

そして、二、三度手を振ると少年は部屋を後にした。

「あら、もう大丈夫なの？」

「うん。昨日は心配かけてごめんね」

朝、ルリアの姿を見つけたステイアが彼女の側に駆け寄る。試験の日から今日まで、結果の集計やら何やらで授業が出来ず、休日となっていたのである。

その間、ある生徒は魔術の訓練に精をだし、またある生徒はまだ新しい友人らと交友を深めるなど、それぞれ有意義に過ごしていた。ステイア達も、例に漏れず自分のすべきことをしていった。

だが、ルリアは体調の悪いまま長い間森の中を歩いたために、翌日には風邪が悪化してしまい、数日間寝込んでいたのだ。

それにより、ステイアは彼女のことが心配でしうがなかつたのである。

幸い、今日にはほとんどの治つていいようで、少しずつ挨拶をしている。

「セントは？」

「えっと……あれ？」

ルリアは後を向いたが、彼の姿はなかつた。

「さっきまで一緒にいたのに……」

「どうするの？探しに行く？」

「うん……ちょっと待つて」

そう言つて、引き返そうとしたルリアをステイアが呼び止めた。

「何言つてるのよ。私も行くわ」

「でも……ウエーディは？」

「いいのよ、あんなのは気にしないで。それより行くわよ」

「う、うん……」

さつさと歩いていくステイアの背を、疑問を抱きながら追つていった。

「悪いな。急に呼び止めたりして」

「別にいいですけど……時間大丈夫なんですか？」

「すぐ終わるから大丈夫だ。それに今日も大したことないし、遅れても問題ないだろう」

「は、はあ……」

何処か適当なセフィルの発言に、セントは少々呆れつつ苦笑した。

先ほど、彼はルリアと共に教室へと向かっていたのだが、偶然通り掛かつた教員であるセフィルに呼び止められた。

ルリアは、気づかずに先に行ってしまったのだが、どうやら彼に用があるようだ。

「ちょっと付いてくれ」

「?、分かりました」

すぐ終わると言っていたために、その場で話すのかと思つていたが、どうやら場所を移すようだ、セントは首を傾げながらもセフィルについていった。

「ふあ……」

「おっ、起きたか?」

「む~……」

途中で、セントの背中で眠つていたHミリが、小さな欠伸をして眼を覚ました。

「おはよー……」

「おひ、おはよ」

「ほえ?」

いつものように朝の挨拶をするが、何故かセントではなくセフィルが挨拶を返した。

そのため、Hミリは声のした方をセントの背中越しに顔を覗かせる。

「お兄ちゃん、だれ?」

「セフィル先生だよ。覚えてないか?」

「う~ん?」

どうも今一つのHミリの反応に一人は苦笑した。

「……まあいい。それよりも本題なんだが」

セフィルは一度咳払いをすると、辺りを見渡して誰もいないことを確認する。

「ラーレイン魔術組合って知つてるか?」

「ラーレインじゅつ……?」

「ラーレイン魔術組合だ」

彼の言葉をエミリは聞き取れなかつたのが分かり、セントが繰り返す。

セフィルは、そのやつとセントの様子から、何かしら知つてゐるように思えた。

「…要は入れつてことですよね？」

「うむ。一応詳しい話は今日の放課後するから、とりあえず考えておいてくれ」

「分かりました」

「それじゃあ、用件はこれで終わりだ。先に教室に向かつてくれ」

セフィルはそう言つと、来た方とは逆の方に歩いていった。

「…………

彼が立ち去つてからも、セントはその場から動かさなかつた。

「お兄ちゃん？」

暫くしてもやうであつたために、不思議に思つたエミリが心配して声を掛ける。

「ん？」

「どうしたの？」

「ああ…何でもない」

だが、セントの表情は何処か複雑そうに見えた。

「エミリ」

「ふえ？」

「「」の事をルリア達には言わないでくれるか？」

その言葉の意図はエミリにはよく分からなかつた。

「うん…？」

そのために、深く考えずに頷いてしまつたが、やはりどこか疑問が残つていた。

それでも彼女は特に問い合わせることもしなかつた。

これも、セントに信頼を置いているためであり、彼なら何かしらの考へがあつての発言だろつと思つた故である。

「さてと、早く戻るか」

「うん！」

そう言つた彼は、いつも彼だった。

「ふうん。何だかんだで結構選べるじゃん」

ステイアは、渡された授業選択の案内を見て、口には出していない  
が意外そうだった。

授業の選択の可不可は、事前に行われた試験の結果に基づいて、決  
定された。

そのために、彼女はあまり期待していなかつたのだ。

「でも、まあ良かつたなあ」

「うん…みんなありがとつ

「もう、何で謝るのよ。水臭いじゃない」

試験のことを引き摺つて いるかのよ うなルリアの言葉に、溜まら ずステイアが口を尖らせた。

「う、うん…」

「まあ、いいじゃんかよ。それより、早く決めようぜ」  
だが、ウエディが横から口を挟み、話題を変えようとしたために、ステイアは反射的に彼を睨み付ける。

「ス、ステイア…？」

その鋭すぎる視線に、少々怯えつつも恐る恐るルリアは呼び掛けた。

「あら、『じめんなさい』」

ウエディはいつも思つて いるのだが、何故ステイアはあんなにも切り替えが速いのだろうか。

す「」にことだと思つたのだが、彼としては強く当たるのをやめてほしい。  
だが、ずっと前から何度も言つてきて今に至つて いるため、殆んど諦めていたりする。

「貴方たちはもう決めたの？」

そんなことを考へて いる彼を余所に、ステイアは話を進めた。

「俺は、古代語とか受けようかと」

セントは、自分の授業選択案内をステイアに渡した。  
それには幾つかチェックが付いていて、『古代語応用』と書かれて  
いるところにも付いていた。

「古代語つて いうと、魔術書の？」

「ああ、そうだ」

「でも何故？」

馴染みこそはあるが、魔術書にはほとんど訳も載つて いるため、わざわざ習つ必要は無いのでは、とステイアは思つて いた。

「前々から興味があつてな。一度の機会だから受けようかと」

「そつか。ルリアは？」

「え、えっと……」

ステイアは、ルリアに聞いたが、彼女はびむつてしまつ。

「決まつてないの？」

「うん……」

申し訳なさそうにステイアに案内を渡した。

「……でも、一応三星は付いているみたいじゃない」

「うん……でも、Hミリちゃんの分もあるから……」

「あー……そういうことね」

どつやから、ルリアとHミコは同じ授業をとむことにしたらしい。

「ねえ、Hミリちゃん」

「ほえ？」

「ルリアに任せちゃつても大丈夫？」

「うん！」

「ステイアには悪氣は無いのだが、どじが腑に落ちない」というのがある。

「ほんとにいいの？」

「うん！」

「そつか……じゃあ……」

結局、ルリアは既に決めていた授業を受けることにした。

「Hミリちゃん、よろしくね~」

「うん！」

とりあえず決まつたことに安堵しつつ、隣で興味深そうに彼女の案内を覗き込んでいるエミコを撫でた。

「そういうえば、ステイアはどうしたの？」

「あたしはね、これよ」

「魔……製学？」

よくイメージが掴めないルリアは、疑問符を浮かべた。

「そうよ。魔製学で、色々と護符とか作るらしいから、いくつかのことがあるし受けたことになったのよ」

ステイアは、後ろでうんうん悩んでいたエミコの脇を小突きながら言った。

「そりなんだ」

「で、あんたは決まつたの？」

「い、一応…って、おい！」

有無を言わば案内を奪い取ると、内容を見て軽い目眩を覚えた。

「何よこれ！ 一つしか決まつてないじゃないの！」

「そりは言つても、仕方ないだろ！」

「二人とも、少し落ち着いて」

再び口論となつた二人をルリアが宥めにはいる。

「まあいいわ……どうするのよ？」

「うーん……どれがいいんだか…」

彼自身何がやりたいのかよく分からず、決める」とは出来ずにいた。

「ちよつといいか？」

「！、は、はい」

「ウエディは試験の時、剣を使つていたよな？」

「え、ええ…」

突然声を掛けてきたセフィルに、戸惑いを隠せない三人だが、彼は特に気にすることもなく話を進める。

「あまり人が多くなかつたから細かく記載しなかつたんだが、『実技演習』の中で、剣技とかの武術も一緒に扱つつもりだから、良かつたら受けてみてくれ」

それは、ウエディにとつて嬉しいことだ。

彼は魔術が使えないために、ステイアが剣に魔力を込めて使えるようになつた。

彼自身、技術自体はほとんど問題ないのだが、魔術の方ではあまり使いこなせていないのが、現状である。

それ故に、同時に学べるのはこの上ない機会なのだ。

「本当ですか！？」

「ああ。一応俺が指南することになつてゐるが、時々知り合いにも来てもらつ予定だから、他にも色々と学べる筈だ」

「分かりました。ありがとうございます！」

「良かつたじゃない！」

戻っていくセフィルの後ろで、ステイアがバンバンとウーディの肩を叩いた。

「おう。後は……」

ウーディは実技演習の他に、何とか付いていけそうなものを選ぶことにした。

「これで決まったようだな

「そうだね～」

皆無事に決まり、ほっとしていたがセントだけは、本の少しだけ浮かない顔をしていた。

そして、それに気がついたのはエミリだけだった。

「ここが組合事務所だ。学園長にお願いして、自分の部屋を利用している」

セフィルは、セントとエミリを中心に招き入れた。

彼の部屋は学園内の教師達が寝泊まりできる場所にあるのだが、一部生徒の出入りもあるために、学園長が配慮して少し離れた場所にある。

「ほえ～」

エミリが興味深そうに辺りを見渡した。

自分達の部屋よりも幾分広く造られているこの部屋には、あまり物が置かれていない。

「それじゃあ、一応説明するからそこに掛けてくれ

二人は言われた通りに席に着くと、セフィルは説明を始めた。

そもそも、ラーレイン術士組合とは、この国に住んでいた何人かの魔術士達が、立ち上げたのが始まりだと言われている。

初めは、術による手伝いのようなことをやっていたのだが、現在ではほぼ依頼内容の枠がなくなつた。

その為に、情報収集のようなものや秘密にしなければならないような内容も時々くることもある。

本部はこれまで転々としてきたが、現在はとある伝説の賢者の名を冠した街にある。

組合には数十人ほどが所属しているが、ここの中ではセフィルを含めて三人ほどだ。

「……と、まあ大体こんな感じだ。もしかしたら、知つていることを繰り返しただけかもしれないが」

セフィルは一通り説明を終えると、一枚の紙を差し出した。

「断りづらいかも知れないが、嫌なら言ってくれて構わない。此方も強制してまで入れるつもりはないからな」

セントは、先ほどから俯いて黙つたままだつた。

エミリが心配そうに見つめるなか、彼は不意に顔を上げて沈黙を破つた。

「……つだけ、言わなければならぬことがあります」「ん？」

「先生は、三年前の出来事の噂を知つてますか？」

「……その年で組合のことを知つてゐるから、只者ではないと思つてはいたが……その話題を持ち出すとはな……」

セフィールは、目を見開いて、だが何か興味を持つよつた目でセントを見た。

彼が言つた出来事とは、三年前に遡る。

当時、ラドヴィスは他二国とまだ今のような友好的関係がなく、こそこだけやや孤立してゐる状態だつた。

領土拡大等のために、いつ攻め入つて戦争が起きてもおかしくはない状態だつたが、双方も消極的だつたのか余り小競り合いも無かつた。

そのなかである日、王都から西の方で突然眩い一筋の光が、天へと昇つていつた。

それは、國中の何処からでも見えたといつ。

すぐにはその光は消え、その日は特にそれ以外は何も無かつた。

だが翌日から何故か雨が続き、終には分厚い雲が広がり嵐となつた。

その激しさは凄まじく、ほとんどの建物が瓦礫の山と化した。

奇跡的に死者は出なかつたものの多大な負傷者を出して、街は絶望に包まれた。

だが、当時の王　　今の先代にあたるのだが、すぐさまに対策を打ち立て、街の復興に取り掛かる。更にそれまで対立していたリディナ、トルポリック両国に救援を求めた。

突然の要請に外交官は耳を疑つたが、それぞれの王は事情を知るとすぐに行動に移した。

そのかいあつてか、街は半年近くでほとんど元の姿へと戻つたのだ

が、今も王都の人々に深い傷を残している。

この惨劇、自然災害として認識されているのだが、一部の魔術士達の間では人為的ではないかという話があるのだ。

セフィルもその中に含まれるのだが、根拠を掴んでいるわけでもなく、真相も謎のままなのである。

「だが……組合とは関係ないんじゃないのか？」

彼は、真相が聞けるかもしない期待を抑えつつ、セントに問う。

「いえ。あれは……組合に来た依頼が全てのきっかけです……」

それは、あの日の三日前になる。

当時、王都にいたセントは術士組合で既に活動をしていた。

「セント、来てくれたか」

その日彼は組合王都支部顧問のアーサーから、事務所の方に来るよううに予め連絡されていた。

アーサーは、今のセフィルよりも若干年上程度とまだ若いのだが、これまでに魔術の分野で多くの理論を打ち立て、功績を残してきた。古の賢者とまではいかないものの、実力は当時で王国一、世界で見てみてもトップクラスで、魔術を扱う者の間では知らない者はいないとも言われている。

「さて、新しい依頼の件なんだが……」

「?、何かあつたんですか?」

語尾を濁す辺り、何やらあつたのだろうかと疑問に感じたセントは、率直に問い合わせた。

「今回の依頼主、国の関係者になつてているのだ。しかも、機密事項としてな」

「!」

セントは、今日事務所に誰も見当たらぬことを不思議に思つていたのだが、それを聞いて理解した。

この組合はそもそも、薬草などの代理採集などと云つたいわゆる便利屋の様な活動を中心にしていた為に、これまで国など大きなことに絡むようなものは無かつた。

それ故に、アーサーもこの依頼に關しては信頼できる者のみで行おうとして、彼だけを呼び出した。

「内容は、地下にある魔方陣の効力を止めることだ

「……はい?」

だが幾ら機密事項とはいえ、余りに唐突過ぎる内容に唖然として、そう聞き返すことしか出来なかつた。

「ど、どういうことですか?」

「んとな、セント、この国が閉鎖的になつてきているのは知つているよな？」

「は、はい。ここ半年前に突然ですよね？」

その言葉にアーサーは深く頷いた。

実際、ラドヴィスと隣国との関係が悪化したのは昔からではなく、ほんの数ヶ月前からのことだ。

国境の街では、何人かの商人が出入国を断られたといつ話も彼らの耳に届いている。

「ああ。王の命令に臣下達も疑問に思つた。そして、その内の何人かが何か裏がないか調べ始めたのだ」

「そんなことやって大丈夫なんですか？」

セントは首を傾げながら聞いた。

「勿論、そんなことがばれたら逆臣の汚名を着ることになるからな。極秘でだ」

彼も納得したのを見て、アーサーは話を進めた。

「とにかく、どう調べあげたのかは分からぬが、城の近くの地下に魔方陣が在ることが分かつた」

「そしてそれが原因ではないか、つてことですか？」

「お前は理解が速くて助かるな。説明する側も楽だよ」

依頼内容を聞いていれば、何となく分かることだとセントは思ったが、それを指摘するよりも気になることがある。

「確証はあるんですか？」

「ある……とは言い切れない。だが、これ以外に原因となるような不自然なところが全くないらしい」

「そうなんですか？」

「それに、魔方陣の停止は素人では出来ないから、むやみに城の術師にも頼むこともできずに悩んだ結果、この組合に白羽の矢が立つたということだ」

魔方陣には幾つか種類がある。

今回の場合、それが原因ならばその魔方陣は他人に作用するものと

なる。

このように他人に何らかの作用をするものは、陣を描いてそれに魔力を注ぐことで、それが周りに作用するような形になる。

魔力が残っている状態で無闇に陣をいじつてしまふと、最悪の場合陣の魔力が暴走することもある。

魔力が暴走を起こした場合、その魔力の性質に従うことばほとんどだ。

例えば、火の性質をもつていたのならば、独りでに燃え上がつたりする。

だが規模が相当な大きさになり、更に性質も個人によつて異なるために、実際のところ起きてみなければどうなるかは分からぬ。その為に先に魔方陣の魔力を無くさなければ、停止させることは出来ないのだ。

「一応、停止の操作は私がやるが、セントには万一一の時の人払いを頼みたい」

人払いという言葉に、若干の違和感を感じつつセントは、呆れるようになじめ息をついた。

「……わざわざ遠回しに言わなくていいですよ。普通に言つてください」

「それはすまない。とにかく誰か来たときに、此方の作業が終わるまで足止めして欲しいんだ」

セントは暫しの間、考え込んでいたが不意に口を開いた。

「分かりました。あまり力になれないかも知れませんけど……」

「ありがとう。そして、すまないな。セント」？」

「……いや、なんでもない。また明日打ち合わせをするから来てくれ」

「……はい」

セントは、彼が何故謝ったのか気になつたが、特に問うことはせず、その日は組合を後にしたのだった。

「来てくれたか」

後日セントは再びアーサーに呼び出されて事務所へと赴くと、アーサーの他に見知らぬ人物がいた。

「そちらは？」

「ああ。今回一緒に来てもらう者だ」

「よろしくね！、えつと…」

「セントだ。君は？」

「フォルスだよ」

そう名前を告げると、にっこりと笑った。

「それじゃあ、明日、日中に行動を開始する。段取りは前にそれぞれに言つた通りに行つつもりだ」

「はい」

「でも、何で昼間なの？」

アーサーの計画にフォルスは首を傾げた。

「依頼主が、入り口までの案内をしてくれるんだが、城に近いところにあるらしく、夜間だと警備やらなどで動きづらいそうだから、敢えてそうした」

「そつかあ」

夜中こつそりと盗みに入るというのはよく聞く話である。

人目に付きにくいというのが理由にあるのだろうが、よくあるが故に警備が厳しくなっていることがある。

依頼主の話では過去に一度だけやられたことがあるらしい、それ以降警備が厳しくなったという。

逆に、白昼堂々盗みに入るという血迷った行動を起こす者はいないだろうという心理から、昼間は中々手薄となることが多いのだ。昼間ならば誰かしら城内を通り掛かるところともあり、わざわざ見回りを割り当てる必要もないのだが。

「城に入る訳では無いし、もし見つかったとき元々遣り過いりや  
すいからな」

「成る程」

フォルスも納得したのを見て、今度はセントに視線を移した。

「セントは、何があるか？」

「いや、特に無いです」

「もうか。じゃあよろしく頼むな」

仲良くなじむよ、ヒアーサーはそつまつと、何か作業するらしく奥へと消えた。

「ねえ、セント」

「ん？」

彼がいなくなると同時に、隣にいたフォルスが話し掛けってきた。

「セントは、いつから此処に？」

「んど、一年くらい前からかな。ビリしても魔術を習いたくてな。

先生に頼んだんだ」

「先生って言うと、アーサーの？」

「ああ。そしたら、入ったばかりだつて勧められてな

「そつかあ」

うんうん頷いているフォルスにセントが同じ質問をしてみると、

「内緒つー」

と笑顔ではぐらかされてしまった。

その日は一人とも特に予定がなかつたため、色々と話してから別れた。

当時のフォルスは現在よりも髪が長く、やたらと幼い顔立ちであった。

それだけではなく、何故だか雰囲気や言動なども少女のようであつたために、周りからはそうとしか見えなかつた。

セントも、初めは少女であると勘違いをしていたために、男だと聞いたときにはすぐには信じられず、耳を疑つた。

本人はと云つと、何とか少年に見えるように努力しようとはしているのだが、余り成果が見られていないのが現状である。

彼はセントに何かアドバイスを貰おうとしたが、そのようなことを知つているはずもなく、ただ苦笑いを浮かべるだけだつた。

そんなこんなで次の日、彼らはアーサーに連れられて城の近くの林に来ていた。

彼によると、依頼主とは此処で落ち合つこととなつてゐるが、三人が着いた時にはまだ依頼主の姿は見えなかつた。

「なんか楽しみだね」

「おいおい…遊びに行くんじゃないんだから

緊張感のないフォルスの言葉に、セントは若干呆れ気味である。

「だつて、未知の洞窟に行くんだよ？ドキドキしない？」

何やら一人盛り上がつてきているフォルスの話を聞き流していると、

城の方から誰かがやつて來た。

「いやいや、遅れて申し訳ない」

肩を上下させてそう謝りつつ、乱れてしまつた服装を正していく。

どうやら、この初老の紳士が依頼主の様である。

「いえ…何かあつたのです？」

「会議が入つてしまつてな…今も上手く抜け出して來たんです。申し訳無いんですが案内は出来ません」

「分かりました……では、場所の方を教えてください」

「うむ。ここからあの方向に向かえば、魔方陣のあるところに繋がる洞窟の入り口に出れるはずです。ただ、その洞窟が人口的に造られた様なんで…」

その言葉に、アーサーは頷いた。

「何らかの罠があるのは承知の上。必ず、良い報告を持つて戻つてきます」

「任せておいてよ！」

アーサーに相槌を打つように、フォルスが言った。

依頼主は、彼を見て柔らかい笑みを浮かべた。

「これは何とも頼もしいお嬢さんですな。宜しくお願ひしますぞ」

そう言つと、彼は踵を返して城のほうへと戻つていった。

「…また、間違えられていたな」

「うわあん、セントお～！」

フォルスはまた少女だと間違えられてしまい、セントに泣きついた。

「仕方無いだろう。そんな格好では…」

そう言いつつ、セントはフォルスを慰める。

「…一人とも、そろそろ行こうと思つんだが…」

アーサーはやや呆れつつ一人に言つと、少しずつ歩みを進め始める。

「あつ、「じめん」

「すみません」

「そう言つと、二人はアーサーの後を追つた。老紳士の言つた通り、暫く歩いていると洞窟が見えた。

やや急な斜面に空いた穴は、なだらかな下り坂になつていて人一人くらいならば充分に入ることが出来そうである。

「どうやら、ここらしいな……一人とも、細心の注意を払つて行動してくれ」

セント自身、フォルスと同じ様に確かに好奇心があつた。そのためにセントは油断して二人の足を引っ張らないよう気を引き締めて頷いた。

「そうだね」

そう言つたフォルスは、何となく何処か雰囲気が変わつたようにも感じられるが、余り変わらない気がする。

「それじゃあ、行くぞ」

だが、アーサーにはそれだけで充分伝わつた様だつた。彼がそう言つと、未知の洞窟へと足を踏み入れていつた。

内部は老紳士の言つように、確かにおかしな所が幾つかあつた。この洞窟自体は元からあつたのかも知れないが、狭いところでは壁や天井も突起した岩などが不自然に削られていて、奥まで行けるようになつていた。

「やつぱり狭いなあ……まだ着かないし……」

少し屈んだ状態で進んでいるフォルスが、不満を漏らした。

入り口の光はもう見えなくなり、大分進んだのだがまだ魔方陣には辿り着かない。

逆に同じような場所が多いために、余り進んでいないような錯覚さえ覚える。

「もしかして行き止まりとかないよね？」

「それは大丈夫だ。僅かだが風が吹き抜けているのが感じられる」

「そつかあ」

もうしばらく進むと、徐々に広くなり、開けた場所に出た。

「うわあ……」

幾つもの岩の柱が高い天井まで伸びている光景は、鍾乳洞の様に神秘的で目を奪われ、思わず溜め息が漏れる。

「これは流石に人の手じゃないよね」

フォルスは、繁々とそれらを見ながら言つた。

「確かに……魔術でもここまで細く削るのは相当難しそうだしな……」

そんなことを話していると、アーサーが灯していた光が消えた。

「……、何……？」

二人とも反射的に身構えたが、アーサーは特に気にせず辺りを見渡す。

すると柱で影になつてゐる所から、僅かながら光が漏れていることに気がついた。

彼は何の躊躇いもなく近づき、床に手をやつた。

「ゴト……

「わあっ！」

突然驚いたようなフォルスの声が聞こえてきたが、アーサーはセントがいるから大丈夫だらうと思い、音がして外れた石蓋を持ち上げた。

「当たりだな」

そこには、更に下へと続く階段があつた。

若干奥の方が明るく見えるが、どうやらここから人口的に造つたようだ。

「光よ……」

杖を前に掲げて小さく呴くと、再び杖に小さな光が宿る。

「助けて……」

それと同時に再びフォルスの声が聞こえてきた。

「おーい……つて、何やつてんだ？」

だが、今度はそれが助けを求めるものだつたために不思議に思い、岩影から出て前方を照らし出す。

「その……フォルスが躊躇いて……」

「だつてえ……」

そこには何があつたのか、絡まつて倒れている一人の姿があつた。明らかに普通に転んだ訳では無さそうである。

「とりあえず……解くの手伝つて……下……せい……」

「もう……明かり消すなら言つてよ！」

フォルスが、頬を膨らませて言った。

「いや、悪い悪い」

結局、アーサーに助けて貰つて自由になれた後に彼が事情を聞いてみると、どうやらフォルスは暗闇が苦手らしく、明かりが消えたときからセントの腕にしがみついていたのだが、フォルスが躊躇した勢

みでセントも倒れた挙げ句絡まつたらしい。

実際のところ、相当複雑にこんがらがっていたため、酷い転び方をしたと思われる。

「つてか、暗闇駄目だつたんだな」

「だつてさあ…」

若干涙目になつているフォルスに、セントがそんなことを聞いた。セントも、先ほどまで息が絶え絶えだったが今は落ち着いたようだ。

「うう…」

「お、おいつ」

だが、フォルスが俯いてしまい慌てて慰めに入る。

（仲良いのは悪いことじや無いが……大丈夫…かな?）

その様子を見ていたアーサーは、微笑んでいた。

それは一人が仲の良いことに対してなのか、それとも緊張感が無いことに対しての苦笑いなのかは、本人も分かつていなかつた。

## 第25話 最深部の別れ

「ふう……疲れたあ……」

フォルスが大きな溜め息をつくと、その場にへたりこんだ。

「大丈夫か？」

「うん……平氣」

アーサーが見つけた階段は、更に下へと続いていた。

階段を降りきつた後は、壁や天井が綺麗に削られていて、人工的に造られた通路のようになっていた。

だがそれは、まるで迷宮の様に入り組んでいて大分長い時間歩き回り、広い空間へと出た。

「それにもでかいな」

この場所に辿り着くまで殆んどが狭い空間の行き止まりであり、魔方陣も描かれてはいなかつた。

それに比べるとここは異様に広く作られていて、それは盛大に舞踏会などを行つても余裕がありそうなほどである。

アーサーの杖の灯りだけでは全貌を見ることは出来なかつた。

「少し休んでてくれ。ちょっと奥まで行つてくれ」

アーサーはそう言つと、一人の傍らに自分の杖を置き、奥へと向かつた。

少し歩くと、彼の背後に光源があることもあり、奥は見ることが出来ない。

「……ディムビジョン」

アーサーは一度立ち止まって目を瞑ると、そう呟いた。

眼を開くと、しっかりと奥の壁まで見えるよつになつた。

この術は一時的に光の感受性を増幅させるもので、アーサー自身で編み出した。

これにより、明かりがない暗闇でもある程度まで見えるよつになるのだ。

だが、この術の効力が残ったまま外など明るい場所を見てしまうと、余りの光に視界が白くなり何も見えなくなってしまい、酷いときは意識を失うこともある。

さらに、半ば無理矢理に高めるために身体に負担を掛けてしまう。それ故に、先ほどまでの三人で行動しているときは、少々視界が悪いが光を呼び寄せていたのである。

アーサーは、明るくなつた部屋を改めて見渡す。まるで大規模な舞踏会でも開催出来そうなほど広いこの場所の床に、うつすらと線が描かれていることに気がついた。

（当たりか？）

線を追つていくと、円と幾つかの模様を描いているようで、振り返つて確認することは出来ないが、どうやらそれは後ろにも続いている。

彼が思つた通り、どうやら此処に魔方陣が描かれているようだ。

「……解除」

アーサーは再び眼を瞑つて呟くと、視界は元に戻つていた。そして後ろを振り返ると、いつの間にか随分と進んでいたのか、遠くに光が見えた。

アーサーは早足で二人のところへと向かつていく。

「あつ、どうだつた？」

フォルスがゆつくり立ち上がつて彼に聞いた。

「ああ、やはりここのようなだ。奥に魔方陣があつた……ん？」

アーサーは二人に報告しているときに、フォルスの顔が先ほどよりも赤くなつてゐることに気がついた。

「熱もあるのか？」

「え？ 突然どうしたの？」

「そういえば……確かにさつきよりも顔が赤いですね」

セントが徐にフォルスの額に手をやる。

「……もしかして、僕？」

「ああ。何かあつたのか？」

「ううん。何も無かつたはずだよ」

アーサーが奥に向かっている間も特に騒がしくならなかつたために一応聞いてみたが、案の定無かつたようだ。

「…まあ、大丈夫そうだな」

「うん。だるいとか、そういうことはないよ」

フォルス自身大丈夫と言つているために、アーサーは本題に移ることにした。

「…そうか。…それより、やはり此処に魔方陣があるみたいだ。暗いせいで見えないが…」

その言葉にセントが、戸惑いを隠せない様な表情を見せた。

「…でも、何も魔力が感じられないじやないですか」

「…そうなの？」

「…そこなんだが…もしかしたら見つけられないように、何らかの仕掛けがあるのかも知れないな」

本来魔術を扱うものは、大方他人のものでも魔力を感じられる。これを利用して、仲間や相手の位置を大まかだが把握することも出来るのだ。

因みに、フォルスは護符など自身の魔力を消費しないものを使うため、長時間かけて意識を集中させないと、魔力を感じることが出来ないのである。

アーサーはそう言つと、一人を魔方陣の方に移動させる。

「…これが、陣の一部だ」

そう言つて、杖を床に近づけ照らし出した。

「…どれ？」

「これだよ」

中々見つけられずにいるフォルスに、セントが屈んで少しだけ色の違う部分を示した。

「…何か薄くない？」

フォルスが率直な感想を述べる。

確かに彼の言う通り、線は染みのように薄く目を凝らして見なけれ

ば分からぬほどだ。

「一応、薄くても魔方陣としては成立するが……確かにこれでは分かりづらいな」

色々と話している一人を他所に、アーサーは魔方陣に手をやつた。同時に、魔力が体の中に流れてくれる。

どうやら魔方陣には魔力が残っているようで、何か細工があるが故に普通には感じられないようだ。

彼は、その魔方陣から感じられる魔力の性質を、経験と感覚から予測していく。

「……！」

突然、フォルスが顔を上げ辺りを何度も見渡した。

「どうかしたのか？」

「……誰か……来る」

「……、本当か？」

「うん……まだ遠いみたいだけど……」

ちょうどビアーサーも終わつたのか、立ち上がって一人に向かい合つた。

「そうか。ならば、早く始めなくては。一人とも、何かあつたら宜しくな」

「大丈夫なんですか？」

「ああ。恐らくな」

そう言つて、後ろを振り返ると再び魔方陣に触れる。

すると、陣がうつすらと光始めて暗闇に浮かび上がつた。

どうやら始まつたようで、セントにも魔方陣の魔力が感じられるようになつた。

一度に大量の魔力を外から取り入れてしまつと、余程魔力が無いときでなければ、欠乏時と同じように何らかの症状が起こるために、少しづつ取り込まなければならない。

もし下手に大量の魔力を身体に流して気でも失えば、魔力が暴走して自身も無事ではいられなくなる。

二人は、周りを警戒しつつもアーサーを見守っていた。

時間は刻一刻と過ぎていき、それにつれて特にフォルスに焦りが見え始めた。

「もう時間が…」

だが、自分たちには手伝おうにもこの事に関しての技術、理論を知らないために何も出来ない。

ただ、待つということが非常にもどかしく思えた。

とうとう近づいてくる足音が聞こえてきた。

だが、未だにアーサーが終わる気配はしない。

「！、気づいたみたい…」

「分かった」

向こうは走り始めたのか、足音が早く小刻みになっていた。

フォルスは術符を取り出して構えた。

セントはといふと、短く詠唱を始めて杖を生成した。

これはアーサーの下で勉強していたときのある日、夢で見てから出来るようになっていた。

更にアーサーから色々と教えてもらい、水弾を飛ばす程度ならば詠唱無しで可能になつたのである。

「行くよ！」

「お、おい！」

フォルスが暗闇に向かつて駆け出した。

彼は魔力を感じることは苦手であるが、気配を察する能力が非常に高い。

そのために視界が無しに近い状態でも、大まかな位置関係は感覚から分かるのだ。

一番近い所にいる敵に狙いを定め、術符を投げた。

「ドン！」

狙い通り、相手に術符が触れたと同時に小さな爆発がおき、後ろへと吹き飛ばした。

ガシヤツ

衝撃で倒れ、金属がぶつかるような音が聞こえた。

どうやら、鎧の様なものを装備しているらしく、余りダメージは期待できなさそうだ。

「！、セントつ右！」

フォルスの声に、ほぼ時間差無しに反応した。

セントは左に飛び退けると同時に、杖を振るつ。

水弾は大人一人を弾くほどの威力で、遠くまで飛び。

「わあっ！」

フォルスは突然飛んできた水弾を、身体を捻つて間一髪避ける。ちょうど攻撃動作の直後立つたために、反応が遅かつた。

「ちょっと！、こっちに飛ばさないでよ！」

「悪い！」

そう一言謝ると、よつやく目が慣れてきたセントも前へと出た。先ほどと余り変わらないが、それでも魔方陣から僅かに発している光のお陰で、僅かながら周りが見える。

「はあ！」

相手の攻撃をうまく避け、そして鋭く振り抜いた杖は、脇を捉えそのまま横へと吹つ飛ばす。

ガン！

吹つ飛んだものは、思いの外のびていき、そのまま壁にぶつかり下へと落ちた。

だが行き着くまもなく、別の敵が攻めてくる。

「くつ……」

何とか攻撃を防ぎつつ、次々と捌いていく。

だが敵の数は一向に減らず、時間だけが過ぎていく。

幸いこれまでアーサーの方にまで攻撃が行つていないようだが、まだアーサーも終わる気配がしない。

「つー、うそ……」

突然、フォルスが小さく声を上げた。

「どうした！」

セントがすぐに彼の元へ行くと、動搖からかフォルスの動きがそれまでよりも鈍くなっているように感じる。

「あれ……」

彼が短く指差した方を見ると、空の鎧が転がっていた。セントはすぐに分からず、また攻撃が来たために考えを中断した。フォルスも再び戦い始めていて、動きも戻って来たようだ。安心して戦いに集中しようとしたとき、さきほど鎧が無くなっていることに気がつく。

「…まさか…」

そう思った時には目の前に、鎧の剣が迫ってきていた。

「…」

「エル・ハイドレーーー！」

刹那、アーサーの声が響き渡り、セントに迫っていた鎧を貫いた。

「先生、終わつたんですねか！」

「いや、まだだ」

それだけ言うと再び、詠唱を始めた。

「断絶された空間……マイトセパレート！」

短い詠唱の後、丁度三人を囲むように巨大な壁が立ち上がった。

「フォルス、ちょっと来てくれ」

「あれ？、アーサー！」

「悪いが時間がない。…恐らく、あれらは魔術によるものだ」

「そうなの？」

そう言ってセントの顔を見るが、彼も気づかなかつたようすで首を傾げている。

「ああ。だから、あれは幾らでも攻めてくる。こっちが消耗してやられてしまう」

「じゃあ、どうしたら…」

「とりあえず、魔方陣の魔力は半分位までなくなつたはずだが、まだ時間が掛かる。だから、二人は先にここを出でくれ

「…？、じゃあ、先生は…？」

「私は大丈夫だ。魔力なら幾らでもあるからな。もう少し陣の魔力を減らさないと危険だが…」

そう言つたとき、彼らを囲んでいた壁が一瞬歪む。

「…時間がない。頼む…」

「でも…」

どうしても、アーサー一人を残すことはしたくないセントが食い下がる。

もしそんなことをしてしまえば、アーサーは確実にやられてしまう。  
「…分かった。ここから出ればいいんでしょう？」

すると、俯いていたフォルスが口を開いた。

「ああ。こいつのことも頼む」

「任せて。アーサーも無事に戻ってきてよ！」

そのフォルスの言葉を聞いて、アーサーは満足そうに頷くと背を向けた。

「ああ。必ず…」

と同時に、壁が崩壊した。

「凍つつく氷よ、絶対零度の楔となりその懷に抱えよ……シーザズフローズン！」

ビキビキッ！

物凄い音と共に、部屋の中にいた鎧が全て凍り付く。

「行け！」

そしてアーサーの怒声に弾かれたかのように、一人は地上を目指して走り出した。

## 第26話 少年の迷い

「……結局、俺はその友達と共に地上へ戻ってきました。それ以降は再びその洞窟には行っていないのでどうなったかも分かりませんが、後の嵐を引き起こしたのは確かです……」

セントはそう言つと俯いてしまつた。

「そうか……よく、話してくれたな。ありがとう」

「……」

エミコが心配そうに彼の顔を覗く中、セフィルは言葉を続ける。

「俺にはセントがどう思つているのかは分からない。だがそれでも、来て欲しいという思いは変わらない」

「……もう少し時間を頂けませんか？」

「ああ、別に構わないぞ。決まつたら何時でも言つてくれ

「ありがとうございます……それでは」

「あら、遅かつたじやない」

部屋に戻ると、そこにはステイアの姿があつた。

「あつ、ステイアお姉ちゃん！」

「何故ここに？」

「ルリアが一人だつたから色々と話していたのよ。そしたら彼女が部屋に来ないつて誘つてきたから、ついてきたの」  
その本人はトイレにでも行つていたのか、後ろから現れた。

「二人とも何処行つてたの？」

「ああ、ちょっと先生に用があつてな」

「そつか～」

ルリアは特に深入りせずに頷くと、Hミリを自分の膝の上へと座らせる。

「何の用だつたのよ」

「まあ、授業とかについてな… そういうえば、ウエディは…？」

「さあ、どつかで油でも売つてんじやないの？」

何となく予想がついていたが、予想通りのステイアの返答だつた。  
今頃学校の何処かをさまよつているのかも知れないが、セントは深く考えるのをやめた。

「そ、そつか…」

「やっぱり呼びに行つた方がいいんじや…」

「いいのよ、あれは放つておいても。まず何処にいるのか分からな  
いのにどう呼ぶのよ」

「そ、そつか…」

(ウーディ、ごめんなさい…)

何処か強引な彼女に勝てず、ルリアは心の中で静かに謝つておくれとした。

「ところでさ、まだ詳しい自己紹介してなかつたわよね？」

「ふと、ステイアがそんなことを言い出した。

「そういえば…… そうかも」

よく考えてみると、確かに素性など分からぬことも意外と多い。

「あたしは、ラインタイトっていう村から来たのよ」

「ラインタイトって、確かトルポリックとの国境沿いだつたよね？」

「あら、知つているの？」

ステイアが珍しそうな表情で言った。

「うん。一度だけ訪れたことがあるんだよ」

「ふーん、珍しいわね」

ラインタイトは国境近くにあるのだが、セリーアとは違ひ余り商人などが立ち寄るということは無く、自給自足に近い村である。

というのも、ラドヴィスとトルポリックとの国境線上にはずっと大きな河川が流れていて、更にラインタイトから下流に行くと別の街があるのだ。

そこは両国に跨がる街で過去に一度だけ分断しかけたが、古くから二国の貿易拠点となつていて、更に海からも定期船も往来しているために、城下町にも勝るほどの繁栄を遂げている。

その為にほとんどの人はそちらへと向かい、ラインタイトへ訪れる人は村の親族がほとんどで時折迷い込んでくる人がいた。

「そうなの？」

「ええ、村に来るのは大抵同じ顔ぶれよ。ルリアも誰かに会いに行つたの？」

「えつと……あれ？」

彼女にはラインタイトを訪れた記憶は確かにあった。

縁と河川に囲まれ、城下町などのような賑わいこそないものの、そこにはない様などかな景色が浮かび上がる。

「何しに行つたんだっけ…」

だが、そこで何をしたのか誰にあつたのかも思い出せず、恐る恐るステイアの顔を見ると少しだけ落胆したような表情をしていた。

「「めん…」

「いいのよ。ずっと前に行つたのでしょうか?」

反射的に謝つてしまつた彼女だが、ステイアの言葉にますます申し訳なくなつてしまつ。

「うん…」

「セントはどこなの?」

「……」

今度は、セントに質問をしてみたが氣づいていないのか反応がない。

「セント?」

「ん?」

「なんだ、聞こえてるじゃない」

ステイアの言葉に、彼は状況を理解した。

「すまない。どうやら無視していただんだな」

「何か悩みでもあるの?」

「いや、少し疲れてるだけだ」

言われてみれば確かに彼はやや疲れた表情をしていた。

「そつか。ならもう休んだら?」

「あたしも構わないわよ」

その言葉に小さく頷いて、すまないな、と言つと部屋へと入つていつた。

「…それで、ルリアはどこから来たの?」

「んと…私は、トルポリックのローレシアから来たんだよ~」

「あら、そうなの?」

ステイアは、ルリアがラドヴィス出身ではないことに少し驚いた。

「うん。ローレシアは国の北東にある港町なんだよ」

「東つてことは…ここまではいぶん遠いじゃないのよ。よくわざわざここに来たわね」

トルポリックは、大陸東側一帯を領地としていてほぼ中心には東西に分けるように山脈が縦に走っている。

領地が広いために、街は点々と存在しそれらを結ぶように道が走っていて、ほとんどの場所で馬車による定期便がある。

それでも街の間の移動は半日かかる事もあり、それこそ国を横断するということになれば、峠道など道の悪いところもあるため三、四日かかる。

「でも入学試験があれだつたから、前もつてセリーアに越してきたんだよね。ローレシアからここの中学校にくるのなんて私くらいしかいなかつたから」

「そうだつたの。でも、どうしてトルポリックじゃなくてこっちの学校に来たの？」

「それはね、向こうだと魔術学校のほとんどが上層階級の人たちしか入学できないってのがあつたからこっちに来たの」

貴族のような上層階級の中では自分のステータスというものが非常に重要となり、トルポリックではそれが著しい。

特に魔術は才能に左右されること多いために、習得が難しいが故に完璧に扱えれば非常に強い武器となる。

そのため皆ほとんどが一度は魔術学校へと通つたため、魔術学校が富豪や権力者ばかりを集める傾向にあるのだ。

もちろん大衆が入学できる学校もあるのだが、トルポリックでは数が少ないので倍率が高く、結局のところそれなりの才能がなければ入学することができないのである。

「ふーん、何だかいろいろと面倒くさそうね」

「でも、そのお陰でステイアたちにも会えたから…」

「ちょっと、嬉しいこと言つてくれるじゃないのよ」

少し照れくさそうに笑つたステイアは、そう言いながらルリアの肩を叩く。

彼女が手を出したときにはルリアは少し驚いたが、すぐに照れ隠しの行動だと分かりルリアもつられて笑つた。

その後もそれぞれの生い立ち以外にも自分の趣味など、様々なことを見た。

中でもステイアとウェーディは幼馴染ではないことにルリアは驚いた。ステイアの話によると、昨年あたりにウェーディがラインタイトへと越してきたようで、お互いに知り合つてからまだあまり経っていないそうだ。

だがそれでも、二人の気が合つたのかすぐに打ち解け、数週間でほとんど現在のように話していたという。

ルリアは珍しいね、とステイアに言うと、先にセントとルリアの出会いを聞いていたために、自分らの方が稀よ、と突っ込まれてしまった。

ルリア自身、人を助けることは普通なことであると思つてゐるのにあのような行動をとつた訳であるため、あの状況で頼んだことこそするいとは今になつて思つてゐるが、彼女はそれ以外のことを稀だと言られて少々ショックを受けていた。

「…………っと、もう口が落ちてきたわね。そろそろ戻ろうかしら」いつの間にか部屋には夕口が差し込んで少し寂しげな独特の雰囲気となつてゐる。

「きっとウェーディも心配してゐるよ」

「寧ろ怒つてゐるわよ。どうして置いて行つたつてね。…………そうだ、セントのことなんだけど」

「セントがどうかしたの？」

「あくまであたしの予想だけど、もしかしたら何があるかもよ」

突然のステイアの言葉にルリアは理解できずにいた。

「どうゆうつじと？」

「さつき通つたとき、何処か思いつめたようだつたから、恐らく何かしら悩みもあるのかと思つてね。彼自身の問題ならあなたなら彼も話しやすいはず……」

「そつか……」

「押し付けるような形になつてしまつけど、あたしもできる限り協

力するから

「分かつた…ありがとう」

ステイアが部屋を去った後、ルリアは色々と思い返していた。

今日の朝までは、特に何の様子の変化もなかった。

そうすると、やはりセントが突然いなくなってしまった時に何かあつたのだろう。

（やつぱり……）

だがはたして、彼は自分に話してくれるのだろうか。

エミリならば彼と一緒にいたために何があつたのか分かるだろうが、まだ幼い彼女に聞くのは酷である。

結局、大した考えも出ることもなくルリアは、いつの間にか抱きついて眠ってしまっているエミリを膝に座らせたまま、彼女の意識は夢の中へと吸い込まれていった。

「……む

気がつくと、外は暗くなっていた。

セントはとりあえずベッドに横になつて先ほどのセフィルとの会話を思い返していたのだが、思つていたよりも疲れていたようでいつの間にか寝ていたようである。

彼の部屋を出ると、一人が一緒に眠つている姿があつた。

「おいおい、風邪引くぞ……」

彼は頬を緩めつつそう言つと、ルリアのベットへと移動させた。そして、セントはふと窓の外を見た。

「……少し夜風に当たるか

自分にとつて何かきつかけになれば、と願いつつ、彼は外へと向かつていった。

## 第27話 少女の思い

「…で、聞いてみたの？」

「「うん……」いざ聞くに至ると、じりじりとも…」

そういうとルリアは俯いてしまった。

彼女は今、ステイアと共に談話室にいた。

あれから一週間ほど経過したが、ルリアはどちらしても躊躇してもいい、これまで彼の悩みについて聞くことが出来ずになっていた。

次の日から授業も始まり、彼の様子も普段と変わらなことによく見えた。だが、時々思いつめたように見えた。

何度もエミリにも聞いてみたりはしたのだが、彼女は首を振るだけであった。

「うん……、じゃああたしから言ひておくわ

「じめん……」

「あたしの方こそ、無理言ひ「じめんなさい」ね。あなたの方がセントも話しやすいと思つたけど…」

ステイアは気にしないで、と言つているのだがルリアはどちらでも申し訳無く思つてしまつ。

そんな彼女を見かねてか、ステイアは再び口を開く。

「そんなに気を落とさないで。あなたは彼に、逆に迷惑をかけるかもしれないから聞けなかつたのしよう？」

「うん……」

「それは彼も同じで、あなたに迷惑をかけたくないから、話そつとしないのよ。あなただつて、もし彼の立場にいたならば同じことをするはずよ」

話の途中で俯いてしまったルリアは、そのまま小さく頷いた。

「だから、そんなに気を落とすことも無いわ。下手に聞きだそつとしても、時期というものもあるからね」

「そつか…」

それらの言葉で、幾らか気持ちが軽くなつたように感じられた。

「なんかこう聞いていると、ステイアは過去に色々あつたみたいだね」

「まあ実際に色々あつたんだけど……今となつたら役に立つたみたいだね」

「そ、そつか……『めん…』

ルリアは何やら触れてはならない」とを聞いたと思つて謝つたが、ステイアは苦笑いを浮かべた。

「あたしが可哀想だとか思わないでくれる?、確かに色々あつたけど、思つていいようなことじやないからね」

「『』、『めん…』

ステイアに対して申し訳無くなり、ルリアは再び俯いてしまつた。

「ちょっと、そんな気にしなくてもいいじゃない。あたしが苛めているみたいじやないの」

「そ、そつか」

ここでもしウエディがいたならば、恐らく余計な一言を言つて殴られているに違いないが、幸い彼はセントと共に手合せに行つている。

「さて、重い話はここまでにして……選択授業の方はどうだつた?」

「えつ、こきなり?」

突然話題が変わり、戸惑つているルリアを不思議そうに見た。

「だつて、一応決めることは決めたじやないのよ。それに、これ以上下手に話して『ちや』『ちや』になるよつは、ことと思つわ」

「そつか…

それを聞いて、ルリアは少し残念そうに肩を落とした。

「もしかして…まだ何かあつた?」

「ううん。ただ…ステイアの色々あつたつてのが少し気になつて、それを聞いて納得したのか一度頷くと、過去を懐かしむように話始めた。

「そうね…、昔…といつてもそんな前じやないけど、一緒につるる

でた子がよく悩みを持ち掛けってきてね。いつも相談にのつたんだけど、そのときに自分なりに色々と学んでつたのよ」

「へえ～…ステイアってどこかお姉さんみたいな雰囲気が感じられると思つてたけど、もしかしたらそのせいかな?」

「どうかしらね。ウエーディのお手りつてのもあるとは思つけど」

「あはは…」

ルリアとしては、何故ステイアはここまでウエーディを懲らしくつのかがよく分からなかつた。

恐らく嫌いでは無いのだろうが、余計なことを聞く勇気は彼女には無いようだ。

「それで、授業の方はどう?」

「中々良い感じだよ。魔力の根本つてのを今やつていて、フォトンとフォノンの総称なんだつて」

「フォトンなら聞いたことあるわ。付隨魔術で使われるのよ」

「そなんだ～。まだちょっとあまりやつてないから、よく分からないんだよね」

ステイアはそうね、と言つと詠唱を始めて指先に小さな光を灯した。「フォトンつていうのは、イメージを具現化している物質のことよ。今あたしが光をイメージしたから、こうやつて光が出来るの。付隨魔術なんかは、これを他の物に付加させるのよ」

そう言つうと、ステイアの指先に灯つていた光が四散した。

「フォノンのほうはよく分からないけど、総称する位だから似たようなものだとは思うわ」

「そつか～。ちなみにステイアの方はどう?、確か魔製学だよね?」何処からかメモを取り出してステイアが言つていた内容を、一通り書き留めると逆にステイアに問い合わせた。

「そうよ。説明を聞いたところでは、結構深くまでやるみたいだからそのうち何か作つてあげるわね」

「えつ、ほんとに?」

「ええ。実習とかもあるだろ?」、きっと自分じゅあ使わないだろ

うからね

「そつか。じゃあ、期待しているよー。」

ルリアには、ステイアがどういうものを作るのか興味があった。ステイア曰く、ウェーディの剣は付随魔術でも初步的な技術の物であるため、今のところあれが限界らしい。

そのため、彼女自身授業に対しても大いに期待を寄せているようである。

「さて、そろそろ行くわよ」

話が一段落した所で、ステイアはそう言つと立ち上がつた。

「あつ、ほんとだ…」

ステイアに言つてルリアは外を見てみると、既に日没を迎えた静寂の闇に包まれ始めていた。

彼女は一瞬だけ足が止まつたが、ふるふると首を振るとステイアと共に歩き出した。

「そらああつ！」

気合いの入った声と共に大上段から降り下ろされた剣を、セントは紙一重の差で避けるとすれ違い様に脇を狙って薙ぎ払う。だが、ウェディもその勢いを利用して身体を宙に浮かして、薙ぎ払いの上を通過した。

ダッ！

そして、着地するとすぐに身体を切り返し再びセントへと突進する。それは瞬く間の出来事でセントも追いついて行けず、今ウェディに背を向ける形となっている。

「はあっ！」

ウェディはすかさず、一度脇へと小さく振り被ると素早く横に一閃させた。

ガキン！

しかし、その斬撃はセントを捉らえるか否かの所で防がれた。

彼は背を見せたままの状態で、斬撃を受け止めたのだ。

バチイッ！

「っ！」

その時、セントの右手に痛みが走り、一瞬力が緩んだ。

その次の瞬間には、彼の手にあつた杖が宙を舞つた。

「……ふう。やっぱり勝てないな」

セントはそう言つて、苦笑いを浮かべた。

「俺にはこれしか無いからさ。でも、最後は一応魔術使えたから勝てたけど、普通の剣だつたら分からなかつたな」

「いや、それでも大分疲れてたから、あまり変わらなかつただろうこれまでセントはウェディの魔術を避けるために、魔術を相殺せたりあまり剣に触れないようにしていたのだが、これまで長い時間ずっと手合わせをしていたため、少し疲れが見え始めていた。

更に、まともに受け止めてしまつた上に咄嗟の事だったために防ぐことが出来なかつたのである。

「それはそうと、セント。何かあつたのか？」

「ん？」

だが、ウェーディには引っ掛かることがあった。

「いや、最近動きが鈍い感じしてね」

それを聞いたセントは、目を見開いていたようだったが、すぐにすまなさそうな表情になる。

「…やはり、出でしまうか……すまないな…」

「俺は別に気にしてないけど、話せるなんならルリアには話した方がいいんじゃないのか？」

「ああ… そうだな…」

彼女の元気が無いのはウェーディも気づいていて、この手合わせからセントに関係があるのでないかと想つている。

「んじや、今日はもう戻るつぜ。エミリも寝ちゃってるみたいだし、ウェーディが指差した方を見ると、壁に寄りかかって眠りてしまっていた。

「そういえば昨日だいぶ遅くまで起きていたな…」

そんなことを思い出し、彼女を抱き上げると部屋を後にした。

「ルリア……その、色々とすまない……」

「ううん。ただ……滅多に顔に出さないから、心配してただけだよ」

「やべか……」

「HIIリちゃんの様子も何処か違つからで、自分だけ仲間はずれみたいに感じちゃつて……」

感情が溢れそうになるのを何とか押さえて、ルリアは言葉を続ける。「仲間なんだから、いつも一人で何とかしないで、もつと頼つてくれたつていいじゃない……セントには及ばないけれど、」

「……」

そう言いくると、ルリアは俯いてしまった。優しい淡緑の瞳からは、堪えきれずに溢れた涙が零れ落ちていく。

「……どうやら……」

ルリアの言葉から暫くの間、沈黙が続いていたがそれをセントが破つた。

「迷惑にならないようこしたつもりが、裏目に出ていたようだな……すまない……」

その言葉にルリアは顔を上げるとその時、彼の頬を一筋の涙が流れた。

「セント……」

「……つまらない話だが、どうか聞いて欲しい……」

少しだけ間をとり、そしてゆっくりと話始めた。

## 第28話 それぞれの決意

：魔力とは、本来フォトンとフォノン二つの物質の総称である。フォトンは体内を構成する物質の1つで、生命を維持するためには不可欠のものであり、多かれ少なかれ誰にでも存在する。これを放出するときにその時の想像を具現化する性質があり、それこそが魔術を操ることとなる。

フォノンは外に放出されたフォトンのことで、過去にとある魔術士によつてフォトンとは別の物であると証明された。

フォノンは不安定な物質であり、基本的には長い時間イメージを具現化することは出来ない。

しかし、イメージがはつきりしていればしていほどフォノンは崩壊していくなり、歴史に名を残すような者の中には通常の数十倍もの時間、フォノンが崩壊せずにイメージを具現化し続けたという逸話もある。

また、杖などを媒介として魔術を発動させても若干崩壊していくなり。

フォトンには本来の性質の他に、何かしらの性質が付いている。フォノンも同じで、その性質に近いものの魔術を発動させると、正確に具現化したりフォノンが崩壊していくなりする。

しかし、それを知る術というものが未だ確立していない上に、実際魔術として使いやすい性質とは限らないため、よく使う魔術と性質が一致しないというのも少なくない。

更に、フォトンの性質は血筋などに影響されず、何によつて決定するのかが分かつていない。

また稀に、フォトン本来の性質のみ持つ場合もあるのだが、何らかの影響があるのかも分かつていない。

現在、フォトンの性質の判別方法、そしてその性質を決定する因子と成り得るものを見らかにするのが、研究士の研究課題ともなつて

いる。

パサ…

「んう……ふう」

手に持つていた筆を置くと、両腕を上に上げて伸びをした。  
窓から射し込んでくる柔らかい月明かりが、優しく照らしてくれる。  
細やかな風が開いた窓からやってきて、彼女の髪と戯れては再び外へと帰つていく。

「こんな感じかな？」

蒼髪の少女ルリアは、自分でまとめあげた資料を読み返し始めた。  
美しく流れるような文字で書かれているそれは、以前ステイアと話したフォトン、フォノンについて書かれている。

「…………あ」

ふと彼女は、とあることを思い出した。

それは、恐らく自分にとつて大きな出来事になつたかもしれない、  
トルリアは思つてゐる。

あの夜、彼から全てを聞いたとき彼女には分かるところもあつたが、

全ては理解できなかつた。

そのためにどう声を掛けるべきかわからず悩んでしまい、暫く沈黙が続いた。

「……すまない……つまらない話をしてしまつたな……」

「ううん、そんなことはないよ。ただ、初めてセントのこと聞いたのもあつてさ……何を言つたらいいのか分かなくて……」

「ごめん……、と言つた時には再び彼女の目に涙が溜まつっていた。

「そりが……」

再び二人の間を沈黙が支配する。

ルリアは、ふとあることに気づき疑問を持つた。

「……セントはどうしたいの？」

そして彼に問い合わせた。

これまでの話では確かに彼の話ではあつて、何故悩んでいるのかも話すには話していたのだが、意見というものが話されていなかつた。

「……」

「私には分からぬけれど、セントはセントが思つようにしていけばいいと思つ……。セントがやつてくれたように、私も頑張つて支えていくから……」

彼が顔を上げると、ルリアはにっこりと笑つて見せた。

「あつ、でも私が足引っ張つちゃうそだなあ……」

やや上目で色々と考えていたのだが、不安要素ばかり浮かんでしまうのか時間を重ねる」とに焦りが見えてくる。

そんな彼女が何処か可笑しく見えたのか、彼の口元が若干緩んだ。

「ちょっと、笑わなくとも……」

「い、いや、すまない」

セントは正直に謝つたのだが、ルリアは頃垂れた。

「うう、そこは否定してよ……私が馬鹿みたいじゃない……」

そのままつてしまふほりしつつ顔を上げ再びセントの顔を見た。  
(やういえば……いつの間にかいつものセントに戻つてゐる)  
そう思うと、自然と笑顔になつた。

「でも良かつた。なんか久しぶりに笑つてくれた気がするよ」「確かにそうだな」

セントは再び真剣な、かつ何処か吹つ切れたような眼差しでルリアを見た。

「明日…先生のところに行つてくる」

「そうか。よく決断してくれたな」

セフィルは満足そうに頷くと、セントに一枚の術符を渡した。

「組合の証だ。なるべくいつも持つておく様にしてくれ

「これは…？」

再びそれを見ると、術符は青色へと変わっていた。

「それは持ち主の魔力によつて色が変わり、持ち主が分かるようになつてゐる。また、それを持つてゐるもの同士で位置が分かるようになる。くれぐれも失くさないよ」「たゞ

「分かりました」

「それと、依頼の方についてはなるべく授業に支障が出ないよう

するから安心してくれ。…ところで、ルリアはどうかしたのか？」

セフィルは一通り説明し終えると、今度はセントの隣にエミリとともに座っていたルリアに言った。

「えつと…言いづらいんですけど、私たちも入れさせてもらえませんか…？」

「！」

セフィルはなんとなく分かっていた様だが、隣にいたセントは驚いた表情をした。

「ふむ……個人的には歓迎なんだが…」

セフィルが語尾を濁したことにルリアは首をかしげた。

「一応俺も教師だから、生徒に無理を頼んで怪我させる訳にはいかないんだ」

「…そうですよね。すみません、無理言って…」

少し考えれば分かることであった。

組員らが慎重に能力を見極めて、候補者を立てていることはあの夜の話で分かっていた。

「その代わりに、もしやつてくれるのなら、暫くの間俺の補佐として手伝つて欲しいんだ」

「補佐……ですか？」

「ああ。聞いたかもしれないが、今ここには俺含めて三人しかないものだから、事務的なことを済ますのが大変なんだ」

その時、不意にセントが口を開いた。

「…先生、少し時間をもらつていいですか？」

「ああ。俺は少々席を外すが戻るなら勝手に戻つても構わないからな。後日言つてくれ」

そう言つと、机の上に置いてあつた封筒を手にとつて部屋を後にした。

「さて、訳を聞かせてくれないか？」

「んと……」

「ざれ言おうとするが、どうしてか言いづらいものがある。」

「お兄ちゃんを助けたいって言つてたよ」

「う、ちょっと！」

慌ててルリアが遮り立としたのが、HIIコの言葉が確かにHIIコと

を裏付ける。

「えつと…そ、やつこつ」と…」

しかし、セントは首を横に振つた。

「それはありがたいんだが、危険な目にあわせる訳にはいかない。  
そのうち、事務以外もやることになるだらうか…」

「でも、補佐だつたら先生もいるし…。それに…ただ待つていてるだけは嫌だから…」

そう言つた彼女には何か強いものが感じられ、思わず息を呑んだ。  
そして、セントは何か諦めたかのようにため息をつく。

「俺がつべこべ言えるようなことでもないな。まあ、好きにすればいいや」

「うめんね…」

「いや、そもそも自分の考えで縛り付けるのも嫌だしな」

「セント…」

サアア アア……

気がつくと、先ほじまで読んでいた資料に折り目が付いていた。

「あわわ……」

彼女はとりあえず、手で折り目を展ばすと置いてあつた本で押さえ  
る。

そんな様子を面白がるかのように、森のざわめきが聞こえてきた。  
「ふあ……、そろそろ寝るかな」

そう思い、机の上を片付けると再び突っ伏した。  
つこむつきまで眠っていたこともあり、またすぐに眠れそうだ。  
(本当に良かつたのかな……)

意識が薄れて行く中で自分にそう問い合わせたが、特に答えが帰つて  
くるわけでもなく、彼女は意識を手放した。

寝静まつた部屋には、彼女が閉め忘れた窓から入つてくる森の風が  
吹き抜けていく。

そして、透き通るような緑色の術符がその風に任せゆらゆらと揺  
れていた。

「そもそも、付隨魔術は魔術が使えない人でも使えるようにするために、作られ……」

魔製学の教師の声だけが聞こえてくる教室の中、ステイアは特に書くこともなく、パラパラと教科書を捲つていく。

「……によって、例えば火を使わずにも調理が出来る様になつたりと様々な物が便利になつた。更に……」

彼女は独学とはいえ、これまでに学んだことがあるためにある程度付隨魔術に関しては、分かつていてるつもりであつた。

今話されている内容は知つていてる知識で、技術のほうも実際にウエディが使つていてる剣では簡単なものながら問題なく発動している。教科書にも、とりわけ興味の引くような内容もあつたわけではなく、流し読みではあつたがすぐに索引まで見終わってしまった。

「……そのため、使い方によつては脅威にもなり得ることを覚えておいてほしい。あくまで……」

ふと、空を流れる雲が視界に入り外を見た。

ステイアが座つていてる場所は教室の一番後ろでかつ窓の隣であるため、居眠りしてたりしても特に気づかれることもない。

外は普段と変わらない光景が広がつていてるだけであつた。

「じゃあ、これから手順に入つていくが……」

結局、時間が潰せそうな物もないため一応復習も兼ねるつもりで授業を聽こうと思い、彼女のノートを開いた。

付隨魔術は、魔力、正確にはフォトンを術符などの媒介に込めるための魔方陣と、その込めたフォトンを魔術として発動するための魔方陣の二つを刻むのが一般的である。

一般的には、循環を示す円が基礎となつてその周りに詠唱の代わりとなる文を書くと言う形式の魔方陣が使われることが多いのだが、媒介の形などによつては刻むのが困難であつたりするため、その代

わりとして文字を魔方陣として利用したりすることもある。

魔術を発動するための魔方陣は、通常の詠唱魔術で補助として使用するものと似ているため、文字を使用した際のものが上手く扱えれば特に問題は無い。

しかし、フォトンを媒介に込めるための魔方陣が特殊で、ほぼ全てのものの形を比較しても一目で分かるほどだ。

この魔方陣の扱いと、フォトンを込める際の放出の仕方が難しいとされ、付隨魔術が発明されてからまだあまり月日が経っていないということも重なって、研究があまり進んでいないのである。

このフォトンの放出ができるようになるまで、弟子入りして学んだとしても習得出来るのは限らず、実際に彼女もその感覚を掴むまでに三年はかかる更に一年かけてウェディの剣に施したのだ。

彼女は眞面目なときとそうでない時の差が激しいが、根は努力家であるが故に独学で身につけることが出来た。

このように完璧につかいこなすのが難しいにも関わらず、ここまで付隨魔術が普及した背景には、既にフォトンを帯びた鉱石などが見つかったため、難しい作業をしなくてもよくなつたことがある。

通称輝石と言われるそれは、普通の鉱石と同じように地中にある程度まとまって存在しているとされて、新たにフォトンを附加できないうが放つておくと自然にフォトンを取り込んで、再び使えるようになる。

付隨魔術と同様に輝石についてもあまり分かつていらないが、この性質が他に応用できるかどうか研究が進められている。

「難しいため、この授業では主に輝石を使っての実習とする。まずは…」

大まかな手順が書き示されて多くの生徒が写していくが、既に書き込んでおいたステイアは書き足すことはしなかった。

（そういえば、ウェディが今日何かやるとか言つてたけど…何だったかしら？）

それどころか、集中力が切れてしまつたため、授業とはまったく関

係の無いことを考えていた。

「斬撃は、なるべく単発ではなく幾つか組み合わせて、相手が防御したところを利用して狙え！」

校舎の外の広場で、セフィルはそう言いつつ繰り出される斬撃を裁いていた。

現在、実技演習で担当の彼は、受講者であるウェディに稽古をつけていた。

一週の中でも実技演習は2コマあるのだが、実際に取ったのは双方合わせて一人だけで、それも一人ずつとなっていた。

「おらつ！」

「下手に大振りにすると…」

気合が入って振りが大きくなつたところを見逃さず、すれ違うように後ろへと受け流し振り向き様に背中を狙う。

ウェディもそれが分かっていたのか、勢いを殺さずにそのまま軌道

から逃れようとした。

「うわっ！」

しかし、セフィルはそれを狙つていて彼の足を払うと、ウェーディはきれいにすつころんで地面に突つ伏した。

「このように、簡単に返されてしまつ」

「いて…」

剣には刃がついていないため、切れることは無いがそれでも叩かれると痛いのは確かである。

「ウェーディは真つ直ぐに向かつてくるものが多い。速さで押すのもいいが、もつと裏を突くようにすべきだ」

「裏…ですか」

「ああ。まあ、滅多に剣を使う機会なんか無いだろ？が…」

ラドヴィスでは、比較的治安がよく王都の付近ではちょっとしたいざこざはあるものの、盗賊に襲われるなどといったことはまず無く、武器を持つ者は主に商人などの標的となりやすい者や、彼らに雇われるいわゆる用心棒や兵士、未開の地や危険な場所に足を踏み入れるような冒険家、そして強奪を繰り返すような盗賊などである。実際にウェーディもこれまで剣を使ったのは此処での試験関係と、手合わせ程度である。

「と言うより、なるべくそんな機会は来ないほうがいいのだろ？なセフィルはウェーディを立たせ、先ほどの稽古に關しての感想と指摘、そして心得のようなものを話すと、授業の終わりを告げた。

彼自身人を殺すために教えているわけではなく、あくまで身を守るため、そして人々を守るためである。

魔術など自分には持て余す力を持つと、いざれ野心を燃やす者も現れる。

それ自体は決して悪いとは言い切れないこともあるが、関係の無い人々が巻き込まれるのも事実であり、そして多くの場合巻き込まれていった人々が重荷を背負うこととなる。

それらのことに対抗できるような心の持ち主を育てようと、彼はや

つて いる。

術士組合の顧問を担当したのも、そのことが関係しているのであつた。

「… それじゃあ、お疲れさん」

そう締めくくると、訓練用の剣をウエーティから受け取つて先に校舎へと戻つていつた。

「裏、かあ。戦つてる最中は何も考えてないし… 後でカイトにでも聞いてみるかな」

ウェーティも倒れたときについた砂埃を簡単に落とすと、次の授業に向けて戻つて行つた。

### 第30話 再会

朝日が照らす森の中、大小二つの影が通り抜けていった。

「部屋の中埃だらけになつてなきやいいな」

「お姉ちゃん、どこ行くの？」

「んと、此処に来る前に少しの間だけ住んでいた場所だよ」

「ほえ？」

今日は休講で、ルリアは久しぶりに彼女が住んでいた家へと、戻ることにしたのだ。

因みに他の三人は、場所を借りて勉強会を開いている。  
これはウェディが授業に遅れをとり始めたことを案じて、開催された。

魔術を会得していない彼には、やはり理解が難しいところも多い。  
一応これまでステイアが定期的に教えてきていたのだが、今回だけは彼女もお手上げで仕方なくセントに頼んだのである。  
ルリアはと言つて、前の部屋に置いてきた物を片付けたいということとで抜けてきたのであつた。

足早に歩いていると、あまり経たないうちに森を抜けてセリーアの街に着いた。

「そういえば、ミニリちゃんは一度セントと来たんだよね？」

「うん！」

彼が度々セリーアに訪れていることは知っていたが、その理由というものは夜風に当たるだけならばわざわざ街にまで行く必要は無いと思つた。

夜風に当たるだけならばわざわざ街にまで行く必要は無いと思つたが、前のこともあり何かあればきっと言つてくれるだらうということで、特に言及することはしなかつた。

「えつと…こつちだつたかな」

若干道を間違えつつも人気の無い路地を抜けて、彼女の家にまでたどり着いた。

「なんだか久しぶりな感じだなあ……」

そんなことを思いつつも、手を掛ける。

(あれ?)

そして開けようとしたが、ふと中から音がしたような気がして手を離した。

(ここ……だよね?)

不思議そうに、ちらちらを見るHIIコを他所に、やつれたルリアは何歩か後ろへと下がり家を見た。

どこからどう見ても記憶にある彼女の家と同じで、家の周りの様子も違つてはいなかつた。

(さつきのは気のせいかな)

そう納得して戸を開けると、少しだけ物が少なくなつて広く感じられるが自分の家であつた。

「ふう……、じゃあちよつと持つていくものを整理してくるから、待つててね」

「はーい」

そう言つて、隣の部屋へと入つていった。

エミリも、ルリアの入つていった部屋とは違つ場所へと入つた。

「あれ?」

ベットの上には若干不自然に毛布が敷いてあるが、それ以外は特に何もなかつた。

「いないのかな……」

何か探しているようであつたが、どうやら見つからなつてゐる。

「その声は……HIIコちゃん?」

「!」

他を探すために部屋を後にしようとすると、彼女を呼ぶ声が聞こえてきた。

「あつ、ナタリアお姉ちゃん!」

声の主は此処に滞在しているナタリアで、彼女は毛布をはけて姿を現した。

「今日はセントと一緒にじゃないの？」

「うん！、今日はお姉ちゃんと一緒にだよ」

「やうなの……」

いつもセントが来るときは夜間だけで、白昼に訪ねてくるのは一度も無かつたために、ナタリアは隠れていたのだ。

実際、簡単に見つかってしまうような隠れ方だつたのだが、咄嗟のことだつたためこの程度しか出来なかつた。

「今日はどうしてここに？」

「よく分からぬけど、何か取りに行くつて言つてたよ」

彼女はエミリが来たことで安心しきつてしまつたのか、足音が近づいていることに気がつかなかつた。

「……確かにあつたはずなんだけど……つて」

「……！」

二人が話していると、何も知らないルリアが部屋へと入つてきた。ルリアの姿が見えた瞬間、ナタリアの頭の中が真っ白になつた。自分の様子を見に来るセント以外に訪れるとすれば、この家の持ち主か居場所を掴んだかも知れない自分を追つている者たちくらいである。

彼はいてもいいと言つていたが、普通に考えて自分の家に知らない人物が勝手に居座つていたらたまつたものではない。さらに自身は追われ身といふこともあり、もし見つかれば追い出される可能性のほうが大きい。

しかし、それにもかかわらずエミリと悠長に話していたといつてにひどく後悔をしていた。

そして、追い出されることもしょうがないと思いつつも、もしかしたら分かってくれるかもしれないと僅かに希望を抱き弁解を口にしようとした。

「ナタリアっ！！」

しかし、彼女の言葉は他ならぬこの家の主によつてかき消された。

「ほら、私が分からぬ？」

「え……？」

予想外のことに混乱していたナタリアだが、その声を聞いて入ってきた人物をよく見た。

「あ……ル……リア……？」

それは、あの時街に来た追つ手から自分を逃がしてくれた、最愛の親友の姿だった。

入ってきたときはパニック状態になつて気づかなかつたが、長い月日が経ち、声なども大分変わつても見間違えることはない。

「そうだよ！」

それが分かつた時には、彼女の身体をルリアが抱き締めていた。

「よく無事で……」

ナタリアも何か言おうと口を動かしたが、何と言つたのか分からない。

しかしそんなことはどうでもよく、ただ今はこの温もりだけを感じていたかつた。

暫くして彼女が落ち着いた頃を見計らつて、ルリアは口を開く。

「でも、確かにリディナに向かつたはずじゃ……？」

「うん……リディナの小さな村で暮らしてたんだけど、また見つかつて……」

ナタリアが街を出たのはもう随分前で、一人ともまだ幼かつた。

それも知つてか、何故ナタリアがこんなにも過酷な人生を送らなければならぬのか、これまでルリアはずつと思つていたのである。

「それで、逃げてる途中にこの街に来たんだけど、足を挫いて……」

そう言つと、包帯が巻かれている足を見せた。

「でもその時に通りがかつた人が助けてくれて、ここに連れてきてくれたの」

「そうだつたの……」

この時何故だか分からぬが、ルリアにはその人物が何となく分かつた。

そもそも、彼女の家を知つてゐるのは数人程度ということもあるの

だが。

「もしかしてその人、セントとか名乗つてなかつた?」

「…、知つてゐるの?」

「うん。彼とは私もこゝちに来てから知り合つたんだよ」「そうなの…」

あの出来事以来、セントは自身のことを他にも色々と話してくれた。その中で、彼が度々夜風に当たりに外へ行くことも聞いたのだが、ナタリアのことに関するは何も聞いていなかつた。流石に見ず知らずの他人を勝手に自分の家に入れさせたことを言うのは抵抗があつたのだろうか。

そんなことも思つたが、自分も似たようなことをしてゐることもあつて、特に気にしなかつた。

「そういえば、食事とかはどうしてたの?、足を挫いたんなら歩けなかつただろうし…」

「彼が代わりに作つておいてくれたの。最近はもうだいぶ良くなつたから自分で作つてるよ」

そう言つてナタリアは少々ぎこちないながらも笑つて見せた。

「じゃあ、折角だし今日は私が作つてあげるね」

「いいの?」「もちろん!」

ルリアは、笑つて見せると部屋を出て行つた。

「ふう…良かつた…」

長話で眠くなつてしまつたのか、目を擦つていいH//リを隣に寝かせ、ふと思つ。

これまで、自分に関わつたルリアがどうなつたのかずっと気がかりであったのだが、今日ルリアと再会したことで彼女が無事であることが分かつたのだ。

「これも…あの人のおかげ…かな…」

ナタリアはそんなことを呟き、ルリアが呼びに来るまでの少々の間、ずっと窓から空を見上げていた。

### 第31話 きっかけ

既に日没を迎えて月や星が暗い空に昇り、セリーアの街が静かな夜に包まれるなか、ルリアはエミリを連れて彼女の家から慌てて出てきた。

「すごい遅くなっちゃったなあ」

彼女としては早く整理をしてウェーディの勉強会に加わるつもりであつたのだが、予想だにしていなかつたナタリアとの再会によつて長居してしまつた。

勉強会は残念だつたが、それよりも一番気がかりであつたことがはつきり分かつことで、彼女は胸が軽くなつたように感じていた。そもそも、ルリアがここまでナタリアを気にかけるのは、一人が幼少の頃にまで遡る。

まだセントラには詳しく話していないのだが、ルリアの父親は有力な商人の家系の人物で若くから主にこの大陸を中心に活動している。彼は移動の途中、たまたま立ち寄つた小さな宿屋にて同じく宿泊客であつたルリアの母親に出会いすぐに意気投合、特に目的もなかつたために彼女も手伝いとしてついて行くことを決めた。

その後二人は縁を結び、ルリアを授かつたのだ。

しかし、以前よりも商売も上手くいつていてとても一人では追いつかなくなつていつた。

そのため両親は、まだ物心もついていないルリアを連れて商売をしていたのだ。

そんな忙しい日々を送る中、事は起きた。

トルポリックの港街ローレシアに向かうため、國の中央を走る山脈を越える山道を通つていたのだがそこで盗賊の襲撃に遭つた。

普通、長距離…特に峠道など人里はなれる所を通過するときは用心棒などを雇うのだが、これまで賊と遭遇したことはなかつた。

さらにルリアの父親はある程度の体術を会得していることもあり、

雇わなくても大丈夫だろうと思っていたのである。

しかし、訓練などの形式的なものとは別で、ルリアラを底いながら戦わなければならなかつた。

幸いその時は、荷物が幾らか駄目になつてしまつたが皆に大きな怪我は無かつた。

それでも彼は自分が思つていたよりも無力であることを知り、ローレシアで暮らすことを決めたのである。

そしてそこでナタリアと始めて会うこととなつた。

当時、ローレシアはこのラーレイン大陸の中でも有名な港街であつた。

両親はこの場所に住むようになり、そしてこれまでのことを生かして雑貨屋を営むよつになつた。

「あれ?、ここはどこ…?」

大勢の人に行き交う道の端で、ルリアは母親とはぐれ迷子になつてしまつた。

「おかあさん…?」

今日は用がある様で彼女もついて行つたのだが、まだあまり街を知らないため、自力で帰ることは困難であつた。

「うう……」

人ごみの中、母親を探し始めるが中々見つからず徐々に彼女は心細くなつていいく。

「あら、ルリアちゃんじゃないの」

「あ……」

風も吹き始め街が寒くなつてきた中、不意に彼女に声を掛けたのは、一人の女性だつた。

「今日は一人なの？」

「ううん、おかあさんと一緒に……」

相手は自分のことを知つて居るようだが、ルリアにはその女性のことが分からなかつた。

ただ、その女性のお陰なのか先ほどまであつた心細さと言ひのは薄れていた。

「でも、いつのまにか、いなくなつちゃつて……」

「ちなみにどこに行くかとか分かる？」

「ううん……」

「そつか。それなら一緒に探ししましょう」

そう言つてルリアの手を引いて歩き出す。

しかし、人がなかなか減らないせいもあり未だに見つからない。

暫く探していると遠くから手を振つて居る人物が見えた。

だが、ルリアの母親ではなくどうやら女性の知り合いの人らしい。その知り合いは近くまで来ると女性と話し始めた。

会話の内容までは分からなかつたが、ルリアはその間辺りを見渡して探していると、知り合いの後ろに隠れながらこちらを見ている少女の姿があつた。

それこそが、後の親友となるナタリアである。

「こんにちは」

ルリアはそんな彼女に声を掛けて、にっこりと笑つて見せると、ナタリアも恐る恐る返事を返してくれた。

話がひと段落して、ルリアに気づいたその知り合いがルリアの母親

を見かけたとのことでその場所に行つてみると、今度こそ母親の姿があつたのだ。

その後の話で、その女性はどうやら向かいに住んでいるらしくルリアの両親の店にも度々来ているということだ。

そして、その女性の知り合いがことは別の大陸にある実家に帰らなければならぬため、今日は手伝いで色々と買い揃えていたらしい。

ちなみにナタリアは、ルリアに声を掛けた女性の娘である。それ以来ルリアはよくナタリアのところへと遊びに行くようになり、二人は仲良くなつた。

ナタリアは何処か消極的なところがあり、いつもルリアが守るような形となつていたが良い関係であったのは違いない。

そんな生活をし始めてから数年が過ぎたある日、ナタリアの母親宛てに一通の手紙が届く。

それは夫の友人からの手紙で、内容が深刻なものであったのだ。ナタリアの父はリディナで、未開の地に足を踏み入れてはその場所の状況を調査していた。

リディナには、人が入ることの出来ない巨大な樹海が存在していて、これまで多くの探検家などが中に入つていったが、奥まで足を踏み入れた者が帰つてくることはなかつた。

その手紙によると、彼が帰還する予定の日を大幅に過ぎ、未だに行方が分かつていないとことらしい。色々と悩んだ末に、ルリアの母親にナタリアのことを任せて一人リディナに向かうことを決心する。

このときもしかしたら自分もその場所に行くこともないとは限らないため、ナタリアを危険な場所に連れて行くことは出来なかつた。出かける前日、ナタリアに父親の仕事を手伝つてくると「まかして言つと、しぶしぶ納得してくれた。

一人残されたナタリアは、母親がいない寂しさを埋めるかのように、四六時中ルリアと一緒に行動するようになる。

さらに月日が流れ、とうとうあの日を迎えたのだった。

ルリアの両親は雑貨屋を営んでいたため街の住人とも接する機会も多く、色々と情報を入手していたのだがあの日の数日前からある少女を探している人がいるという話をよく聞くようになった。

その中には、ナタリアのことであると気づいた者もいたようだが、何処か怪しいと思って教えて教えてなかつたといつ。

だが、とうとう誰かが教えてしまつたのか分からぬが彼女のことを嗅ぎ付けられたのか彼らのところにも来たのだ。

それでも、いつかはそうなることを多少なりとも考えていたため、あらかじめ書いておいた手紙とナタリアの母親の手紙を渡し、一先ずルリアとともに隣町へ行くよう指示をしてその場から連れさせた。

もしナタリアの親族か何かだとすれば、後に一人を迎えてその者に伝えればいいし、そうでなかつたとしてもどちらかが一緒について逃げればいいと決めていたのである。

結果としてナタリアを探しているのは後者で、更に正体は分からぬものの引き渡してはいけない相手であるといふことも分かり、作戦は成功したかのようだつたがひとつだけ誤算があつた。

ナタリアとルリアは無事隣街に着き、ルリアは母親から渡された手紙を言われたとおりにナタリアに渡して、ナタリアはその内容を読んで言葉を失つた。

父親が行方不明であること、母親は仕事を手伝いに行つたのではなくて彼を探しに行つたこと、なによりもここまで逃げてきたのは自分のせいだつたこと。

ルリアはそんな彼女を何とか慰めつつ、安心させよつとしたのだった。

結局その隣街の宿屋でルリアの母親を待つ事にしたのだが、そこで宿をとつたことを後悔することとなる。

朝早く、息を切らしながら母親が宿に入ると部屋にはルリアの姿しかなく、部屋の机の上には書置きがあつた。

『リティナへと向かいます。今までお世話になりました』

それを見た彼女は、目に涙を溜めて今さつき起きてきたばかりで何も知らないルリアをただ抱きしめることしか出来なかつた。

それから、自宅へと戻るとルリアの母親もルリアを置いてナタリアの後を追つていつた。

ルリアはこのことを毎日悔やみ、食事もまともにとらず部屋に籠ることが多くなつていく中、その様子をずっと見ていた父親はある日彼女にこう言つた。

「ナタリアを探しに行きたいのなら、まずは一人で生きていけるようにならぬと駄目だ。それにどんな危険があるか分からぬから、自分や彼女を守れるくらいの力も会得しなくてはならない」

そして、手に持つていた一冊の本を彼女に手渡した。

「これは、魔術の本。魔術を身に付けることが出来れば、ある程度は防衛する手段となるだろ?」

彼は詠唱をすると、部屋の中にも関わらず柔らかな優しい風がルリアのなでて吹き抜けていつた。

「このくらいなら私が教えてあげられるがあまり使い物にならない。身を守るほどの力ともなると危険が伴つてくる。人を殺めてしまうかもしれない。そうだな……魔術学校を卒業できるくらいなら、道を踏み外すこともしないだろ?」

「でも、それじゃあ……」

それでは見つけるのが遅くなつてしまつ、と言おうとしたが彼が首を振つてルリアの言葉を遮る。

「確かに焦る気持ちは分かる。でも、独学では魔術は初めのうちこそ上達は早いが、そこからが大変だ。恥ずかしながら実際に私も途中で挫折してしまつてね」

職業柄のかあまり笑顔以外の表情を見せない父親が照れているところを見るのは、彼女には不思議であつた。

「弟子入りにしても、学校に行くのとあまり変わらないだろ? 中途半端で行かせて、万一件のがあればあいつにも心配を掛けてしま

まう。そうすると、ナタリアを探すのにも支障が出るだろ？」「

ルリアはそれを聞いて、はつとした。

早く見つけてあげたいのは山々だが、現在母親もナタリアを必死に探しているのだ。

探している身としては、これ以上心配事を増やしたくないはずである。

「でも…例え卒業しても私がナタリアを探しに行つたら、お母さんは逆に心配するんじゃないの？」

「そのときにはもう十分な歳になつてゐるよ。あいつもルリアよりも少し上のときに家を出て、世界を見て巡つていたからな」

「そつ…根本的なこと忘れてたけど、もし魔術学校に行つても私が魔術を扱えなかつたら？」

「それは大丈夫だ。なんてつたつて俺とあいつの自慢の娘なんだからな」

わざわざ自称を変えてまで格好付けて言つたのが何となく可笑しくと共に頼もしく感じられた。

「…もー、挫折した人にそう言われても信用できないよー」「それもそうだつたな」

ルリアの言葉をあつさりと認めてしまつたのが余計に可笑しく、更に彼が笑つてゐるのにつられて彼女も笑いだした。

（そりいえば、こんなに笑つたのつていつぶりだらう…）

あの日からだいぶ経つが、これまでルリアがまともに話そつとしなかつたため、笑うこともしなかつた。

しかし、この会話のお陰か心が軽くなつたような気がした。

「ありがとう…」

「ん?、何か言つたか?」

「ううん、それよりもし会得できなかつたら承知しないからねー」

そう笑いながら言つた彼女の目には涙で一杯だつたが、彼女も彼女の父親も特に気にしなかつた。

それからは毎日魔術の勉強を父とやるようになった。

本当に根拠があつて彼が言ったのかは分からないが、ルリアの伸びはすばらしく理屈こそあまり分かつていなかつたが、簡単な魔術を扱つようになる。

さらにそれに追いつくかのように理屈も理解していき、彼が教えられることはもうないと言つくらいまで身に付けることが出来た。頃を見計らい、父は魔術学校について調べそして隣国にあり現在彼女が所属しているオルレイ魔術学園を勧めたのだった。

その後、彼女は単身でセリーアへと移り住みセントと出会うこととなる。

（そういえば…）

ルリアは、ふと腰についていたものに手に取つた。

それは、紐に結ばれたガラス玉に透き通つた藍色と若草色で流れるような模様が描かれている。

ルリアがセリーアに引っ越すときに、父親が御守りとして持たせてくれたものだ。

これは元々、彼が妻へのプレゼントとして渡したのだが、彼女から家を出る前にルリアに渡すように頼まれたらしい。

ちなみに元々は藍色だけの模様だつたらしい。

ルリアが魔術の勉学を始めた頃に、ルリアと彼女の母親が再び巡り

会えるようにと願いを込めて一色田である若草色の模様を描いたのだ。

元からあつた上に描いたため、色が混ざり合って調和するところはなかつたが、中々綺麗な模様となつた。

彼女はこれをいつも身に付けて大切にしているのだ。

（お母さん……）

今も何処かでナタリアを探している母親と再び巡り会わせてくれる信じて……。

しかし、あまり母親のことを考えてしまつと今やるべきことに集中できなくなるということから、普段はなるべく意識しないようにしている。

彼女は母親への思いを再び心の奥に仕舞い込んで再び歩き出せりとしたところ、目の前に人が迫つて「に」とに気づかなかつた。

「ドン！」

「きやあ！」

相手も気づいていなかつたのか、そのままぶつかつてしまつて彼女は尻餅をついた。

「いたた……」

「すみません、怪我はないですか？」

「あ、はい……」

見ると、相手は自分に對して申し訳なさそうにして、手を差し伸べてくれていた。

「道が暗い上に、自分は目が悪いものであなたに気づきませんでした」

顔までは良く見えないものの、体格や声などからして男性のようだつた。

「私も考え方をして……すみません……」

彼は、ルリアの手をとつて立たせると、一礼をして歩いていってしまった。

「……」

ルリアがその男性が歩いていったほうを見ていると、エミリが何かを手に持つてルリアの服の袖を引っ張った。

「どうしたの？」

「これ、さつきの人が落としていたよ」

エミリから受け取ったそれは懐中時計のようになにやら文字が刻まれていた。

きつと大事なものに違いないとルリアは思い、一度エミリに向き合う。

「さつきの人を探したいんだけど、いい？」

「うん！」

まだそんなに遠くには行つてないはずであるため、時計が無くなっている事が分かれば戻つてくるだろ?と思つたが、彼女は暗い中歩いてきた道を再び戻つていった。

### 第32話 夜の森の隠れ人

「……ルリアが帰つて来ないじゃないのよ

ステイアが口を開く。

彼女もセントも今日は一日中ウェーディに勉強を教え込んでいた。ステイア以外にも講師役がいたためにウェーディが彼女に魔術を習うときほどは厳しくならなかつたが、それでもずっと机に向かうことは彼にとつては大変なものとなつたのである。

その本人は現在ようやく勉強漬けから解放されたものの、ほとんど気力を使いきつてしまつたためか彼の部屋で突つ伏している。

「確かに遅いな……」

彼女の話では日がまだ高いうちに戻つてくると言つていたのだが、既に日没を迎えてしまつていて。

セントには幾つか心当たりがあつたのだが、それにしてもこれは遅すぎた。

「……少し出掛けてくる」

大方ルリアを探しに行くのであらう、セントがそう言つとステイアの返事も聞かずに走つていた。

「ちょっと、あたしも行くわよ！」

慌てて彼女も立ち上がりつて彼の後を追つていった。

寮を出るときに、時間が時間であるため偶々すれ違つた教師に呼び止められたが、二人は適当なことを言つてやり過ごし、外へと出る。

「ウェーディに言わなくて良かつたのか？」

ふとセントがそんなことをステイアに尋ねた。

「いいのよ。言つたところで特に変わらないし、言いに行くのは時間が勿体無いわ。それに……」

「それに？」

「彼なりに頑張つていたみたいだし、少しくらい休ませてあげてもいいかなつてね」

どうやら、ステイアのウーデイに対する気遣いのようだ。

普段の扱いはある様であるが、何だかんだ言ってステイアも彼女なりに彼のことを思つてゐるようである。

「…まあいいわ。とにかく先を急ぎましょ」

「そうだな」

何となくばつが悪く感じたステイアは半ば無理やり話を切り、二人はルリアの元へと急いだ。

同じ頃、ルリアはようやく森の入口へと辿り着いていた。彼女の家を出てからだいぶ時間が経つてしまい、エミリも彼女の背中で静かに寝息をたててゐる。

結局、時計の持ち主は見つからず、しかし先ほどの場所に置いていくのも気が進まず、彼女は悩んだ末にしばらく預かっておくことにした。

現在彼女の家にはナタリアが居ることもあって、セリーアにはそう遠くならないうちにに行くことになる。

そしてそのうちにきっと会えるだらう。

余り深く考えても仕方がないと思い、彼女は黙々と暗い森の中を歩いていくが、ふと以前夜の森を歩いたときを思い出した。

今日は以前よりも道が見える程度に明るく感じられ、時折風が吹くのか木々がざわついている。

というのも、街に抜ける道はあまり深く無いことにあるため、明かりが無くとも歩くことは出来なくもない。

それに比べて、以前通ったところは建物から更に森が深くなる方へと向かつてゐるため、川辺以外は昼間でも薄暗いのである。

それでも足元は見辛く、眼が慣れてきても注意して歩かなければすぐ躊躇してしまう。

そんな中を歩いている時、ルリアは突然何かの気配を感じたような気がして、足を止めて辺りを見た。

もちろん、何も見つからず再び彼女は歩き始めたが、心中では少し不安を募らせていた。

前回のここでの試験では、魔術組合の者が適正かどうか調べるためセントは戦っていたが、その前にも彼女は一度襲われている。彼からその話があった時に、そのことは入学試験の時の腹いせか何かだろうと決めつけていて、一人は魔術組合に加入したのだからそのようなことはもう無いだろ?と思つていたためか、ほとんど用心していなかつたのだ。

今更ではあるが、気配を隠そうとしたが考えれば相手を刺激してしまうかも知れないため、平然を装うこととした。

得体の知れないものに対する不安や恐怖感が与える精神的圧力は大きい。

冷や汗をかきつつ何とか気づかれないようにと注意を払つて寮へと向かつていつた。

ルリアが気配を感じるよりも少し前、セントも何かの気配を感じ取つていた。

「!、…………」  
急に立ち止まつた彼を、ステイアは不思議そうに見た。

「ん?、どうかしたの?」

「…………いや、今誰かいたような気がしたが氣のせいみたいだ」辺りを察していたのか、少々の間の後に彼が答える。

「そう?、なら行くわよ」

「…………」

ステイアは余り気にせずにつと先へ歩き始めていつたが、セントはどこか引っ掛かるところがあるのかもう一度だけ辺りを見た。

「!、ステイアっ!」

そして、偶々奥の方に浮かび上がつた光を見つけそれが何であるのか理解する前には、彼の身体はステイアを庇おうと動いていた。

「何?、つきやあ!」

振り返つた彼女は、彼によつてその場から吹つ飛ばされた。

刹那、その場所に火柱が上がる。

「いたた……いきなりなにすんのよ!」

「いいから走れ！！」

「！！」

突然ぶつかってきたセントに対して怒鳴り声を上げたが、これまで見たことの無い彼の剣幕に驚きすぐにその気も失せてしまった。気がつくとステイアは彼に手を引かれ、森の中を疾走していた。

「ちょっと、どういこう…と…」

走りながら状況をセントから聞こうとするが、すぐ隣で再び火柱が上がり言葉を失う。

今回はいつもの試験のときは違い怪我をしても学校に戻される訳は無く、相手は何なのかも含めて全く分からないうが自分の命が関わっているかも知れない。

セントはこれまで何度も何度か似たような経験はしたがあるために冷静に対処出来たが、ステイアは動搖を隠せなかつたのである。

「詳しいことは落ち着いてから話す。今は走ってくれ」

いつの間にか杖を持っていたセントは手短に彼女に言つて、何とか打開策を打ち出そうと再び考えようとする。

その間にも一人を目掛けて容赦なく炎が姿を現し続け、彼は避けることにも集中しなければならない。

更には、今回はいつものように一人ではなくステイアもいるために強引に避けることも出来ない。

それでも彼は杖を振るつたりして何とかそれらを避けつつ走り続けた。

（まことに…）

しかしいくら走ろうとも相手を振り切れる気配は無く、下手に脇にそれで森の中深くへ逃げることも出来ない。

未だに一人とも怪我は負つていなかつたが徐々にセントは焦りを感じ始めていた。

（やはり、今は一旦道をそれた方が良いのか…）

道をそれるととたんに視界が悪くなるために相手を振り切りやすくはなるのだが、特にこの状況では来た道が分からなくなり、戻つて

これる保障はない。

だが、これしか方法は無いと思いそれを彼女に伝えようとステイアのほうを小さく向いた。

その時によつやくステイアが詠唱していることに気づいた。  
そして気づいた時にはほとんど詠唱は終わっていたのか彼女は声を上げた。

「目を閉じて！」

セントが言われるがまま目を瞑ると、彼女は魔術を発動させる。すると、今まで暗闇だつた森が眩いほどの光で満たされた。ステイアはどつやけめに目眩ましをさせようとしたらしく、目を閉じていても明るく感じるほど強いものを詠唱したらしい。だがそれは功を奏した様で、ピタリと炎の攻撃が止まる。

「今のうちに逃げるわよ！」

それを逃さずに一人はその場から逃げていった。

「ルリアアアーー！」

先ほどの魔術で振り切ることが出来たのか火柱が上がらなくなつた。そして、街のほうへと向かつているとステイアは倒れているルリアと彼女を揺さぶつていたエミリを見つめた。

「！、ステイアお姉ちゃん！」

エミリはステイアの声に気がつくとすぐにこちらへと駆け寄つてきだ。

「お姉ちゃんが…！」

すぐに駆け寄り、セントがルリアの様子を見る。

彼女はどうやら気を失つているだけの様で、外傷が特に無いことから自分たちを襲つてきた者らにはやられていない様である。

「エミリちゃん、落ち着いて。ルリアは気を失つているだけだから大丈夫よ」

そう言つと、ステイアが泣きそつたエミリを抱きかかえて彼女を落ち着かせた。

セントはといつと、いつ再び襲撃されても動けるようにルリアを背負つた。

「さて、無事に合流したが…………これからが問題だな……」

「そうね……さつきの光で先生か誰か来てくれれば……なんて思わないほうがいいから……」

だが、来た道を戻るにしても先と同じ手段は通用しないだろうし、撃退するにも相手がどこに何人ほどいるのかよく分からぬ上、こちらが満足に動けないため厳しい。

「それは厳しいな……」

ほとんど手詰まりのような状況であった。

「……ほんとにウェーディを連れてくれば良かつたわ……こいつに限つて……」

「まあ、仕方ないだろ？……とにかく、戻るだけ戻るか街へと一度向かつて他から行くか…」

しかし、時間は結論が出るのを待つてはくれなかつた。

ステイアもセントも暗闇のどこかにいる相手を恨めしく睨みながら会話していると、狙つたかのように光が浮かび上がるのが見えた。

「残念だけど、わざわざ向こうからいらつしゃったみたいよ…」「みたいだな…」

そう言い終るや否や一人は左右へと、跳んだ。

先ほどステイアは動搖していたこともあつてかほとんどセントに手を引かれて走つていたのだが、元々の身体能力は良いほうである。しかし、今回は先ほどのように炎は現れなかつた。

「…どうしたのかしら」

警戒しつつ辺りを見るが、特に変わつた様子はなさそうである。その時、突如一人の男性が姿を現した。

「二人とも、大丈夫かい？」

「…、あなたは？」

言葉からすると敵では無いのだろうか、警戒しつつもステイアは相手に問う。

「私は、こここの学校の者です。ここは私が引き受けますから、あなた達は戻つていてください！」

「そうしたら、あなたは…？」

「私は大丈夫ですから」

セントは、彼のベルトに術符が付いていたことに気がついた。

（あれは…！）

それは、彼やルリアが持つてゐるものとは色違ひの術符であつた。

「…分かりました」

「ちょっと、セント！？」

「この人ならきっと大丈夫だし、逆に俺たちがいるとかえつて邪魔になるかもしねえ。それに今も魔術で守つてくれてゐる」「…ほんとだわ…」

どうやら先ほど火柱が発動しなかつたのはこの男性の魔術のお陰らしい。

セントに言われて注意してみるとステイアも気がついた。

「そこのお嬢さんには悪く思われるかも知れませんが、…… ああ、早く！」

「……わかりました。助けてくれてありがとうございます」

彼女も仕方なく男性の言葉に従つことを決めた。

「明日、先生に自分たちからも話しておきます」

「そうしてくれるとこっちも助かります」

セントは小さな声でその男性に言つと、ステイアと共に学校へと向けて走つていった。

「さて、では覚悟してもらいますね」

二人が見えなくなるのを見届けた後、そう言つて彼もまた暗闇へと紛れていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8151d/>

---

気ままな風吹くこの世界

2010年10月10日04時08分発行